

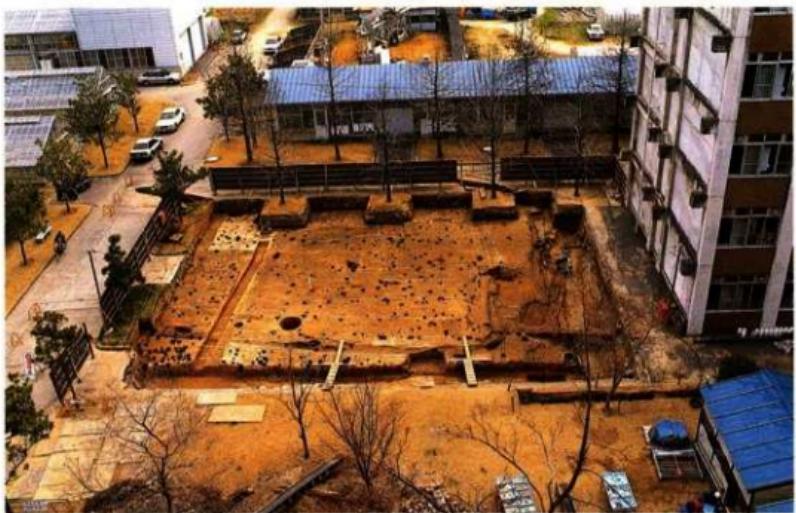
愛媛大學埋藏文化財調查報告 IV

樽味遺跡 II

——樽味遺跡 2 次調査報告——

愛媛大學埋藏文化財調查室

1993



① 梅味遺跡 2次調査区全景（完掘後 北から）



② 1号溝土層断面（南から）



① 調査区北壁土層断面（南から）



② 調査区北壁土層断面 2（南東から）



③ 調査区東壁土層断面（南西から）

愛媛大学埋蔵文化財調査報告 IV

樽味遺跡 II

——樽味遺跡 2 次調査報告——

愛媛大学埋蔵文化財調査室

1993

序 文

愛媛大学には、本部と5つの学部を抱える松山市城北地区、農学部がある松山市樽味地区、医学部と附属病院の建つ温泉郡東信町の東信地区をはじめ、松山市山越地区には運動場、持田地区には附属小・中学校、北条市には附属農場などの分散した敷地がある。これらの敷地の中で、城北地区は文京遺跡として全国的にも知られている。昭和26年頃から遺物が採集され、昭和50年に松山市教育委員会により1次調査が実施された。昭和62年以降は愛媛大学埋蔵文化財調査委員会が発足し、その実施組織である埋蔵文化財調査室が発掘調査を担当している。また、農学部の樽味地区と愛媛大学国際交流会館のある鷹子町でも、昭和62年に埋蔵文化財調査室が発掘調査を実施している。

本報告書は、松山市樽味町3丁目5番地に所在する農学部構内で平成4年1～2月に実施した樽味遺跡2次調査の成果をまとめたものである。調査の結果、南北朝～室町時代の水路、建物群やそれを護む溝や柵列を確認することができた。これは、中世の集落を復元するための好材料である。また、昭和62年に実施した1次調査の成果を考え合わせると、中世後期の集落遺跡や田畠などの生産遺跡は、農学部構内とその周辺に広がっていることが予想される。今後とも、農学部構内における発掘調査は必要である。

発掘調査から記録・遺物類の整理、そして報告書の刊行にいたるまでには、多くの方々から協力を得た。それらの方々に深く感謝するとともに、本書が多くの人々に利用・活用されることを祈念します。

平成5年2月1日

愛媛大学埋蔵文化財調査室 室長

下條信行

例　　言

1. 本書は、愛媛大学埋蔵文化財調査室が平成3年度に実施した愛媛県松山市樽味町3丁目5番地の愛媛大学農学部研究実験棟（農学部3号館）新常にともなう樽味遺跡2次調査の報告書であり、愛媛大学埋蔵文化財調査報告IVにあたる。
2. 本書に使用した遺構実測図は、田崎博之・宮崎直栄・西岡早苗・加島次郎・小玉亞紀子が作成し、浄写は田崎・宮崎が行った。
3. 本書で使用した遺物実測図の作図と浄写は田崎・宮崎が行った。
4. 本書で使用した遺構・遺物写真は田崎が撮影した。
5. 本書の執筆・編集は、下條信行の指導のもとに田崎が行った。
6. 本書で使用した標高数値はすべて海拔標高を示し、方位はすべて国土地標を基準とした真北で、磁北から東偏6度21分を測る。
7. 土色・遺物の色調は、農林省農林水産技術会議事務局監修「新版 標準土色帖」(1976)に準拠した。
8. 本書に報告した樽味遺跡2次調査に係わる記録類および出土遺物は、すべて愛媛大学埋蔵文化財調査室において保管される。

目 次

I 序説	
1 調査にいたる経緯と調査組織・体制	1
2 調査・整理作業の経過	5
3 調査・記録の方法と遺物・記録類の保管	7
II 位置と環境	9
III 調査の概要	
1 基本層位	13
2 遺構と遺物	17
IV 調査の記録	
1 掘立柱建物	18
2 溝	28
3 土壙	50
4 水口（給排水施設）	53
5 棚列	57
6 小穴	58
7 その他の遺物	64
① III層出土の遺物	
② IV層出土の遺物	
V 調査のまとめ	66
付篇 平成4年度の試掘・立会調査	71

挿図目次

Fig. 1	愛媛大学農学部構内の3級基準点と1・2次調査地点（縮尺1/2,500）	6
Fig. 2	樽味遺跡2次調査区の大・中・小区画（縮尺1/400・1/200）	6
Fig. 3	松山市周辺の主要遺跡分布地図（縮尺1/100,000）	10
Fig. 4	松山市周辺の地質（鹿島ほか1992に一部加筆）	11
Fig. 5	石手川流域の地形分類と遺跡分布 (地形分類は平井1989による 縮尺1/35,000)	12
Fig. 6	樽味遺跡2次調査主要遺構配置図（縮尺1/200）	16
Fig. 7	9・10号掘立柱建物(SB-09-10) 実測図(縮尺1/60)	19
Fig. 8	11～13・15号掘立柱建物(SB-11～13-15)・8号土壤(SK-08)・24号溝 (SD-24) 実測図(縮尺1/60)	22
Fig. 9	14・16～18号掘立柱建物(SB-14-16～18) 実測図(縮尺1/60)	23
Fig. 10	19号掘立柱建物(SB-19) 実測図(縮尺1/60)	26
Fig. 11	20号掘立柱建物(SB-20)・23号棚列(SA-23)・5号溝(SD-05) 実測図(縮尺1/60)	27
Fig. 12	掘立柱建物出土遺物実測図(縮尺1/3)	28
Fig. 13	1号溝(SD-01) 実測図(縮尺1/60)	折込 28-29
Fig. 14	1号溝1層出土遺物実測図1(縮尺1/3)	31
Fig. 15	1号溝1層出土遺物実測図2(縮尺1/3)	33
Fig. 16	1号溝1層出土遺物実測図3(縮尺1/3)	34
Fig. 17	1号溝1層出土遺物実測図4(縮尺1/3)	35
Fig. 18	1号溝1層出土遺物実測図5(縮尺1/3)	36
Fig. 19	1号溝1層出土遺物実測図6(縮尺1/3)	37
Fig. 20	1号溝2層出土遺物実測図1(縮尺1/3)	38
Fig. 21	1号溝2層出土遺物実測図2(縮尺1/3)	40
Fig. 22	1号溝2層出土遺物実測図3(縮尺1/3)	41
Fig. 23	1号溝2層出土遺物実測図4(縮尺1/3)	42
Fig. 24	1号溝2層出土遺物実測図5(縮尺1/3)	43
Fig. 25	1号溝2層出土遺物実測図6(縮尺1/3)	43
Fig. 26	1号溝3層出土遺物実測図1(縮尺1/3)	44
Fig. 27	1号溝3層出土遺物実測図2(縮尺1/3・1/4)	45
Fig. 28	2・6・7号溝(SD-02-06-07)、21-22号棚列(SA-21-22) 実測図 (縮尺1/60)	折込 46-47
Fig. 29	2・5・6・7号溝出土遺物実測図(縮尺1/3)	47
Fig. 30	8号土壤出土遺物実測図(縮尺1/6)	51
Fig. 31	25-26号土壤(SK-25-26) 実測図(縮尺1/40)	52

Fig. 32	25・26号土壤出土遺物実測図（縮尺 1 / 3）	52
Fig. 33	3号水口（SM-03）実測図（縮尺 1 / 60）	54
Fig. 34	4号水口（SM-04）実測図（縮尺 1 / 60）	55
Fig. 35	3号水口出土遺物実測図（縮尺 1 / 3）	56
Fig. 36	22号棚列出土遺物実測図（縮尺 1 / 3）	58
Fig. 37	264-311-336-444-662号小穴（SP 264-311-336-444-662）実測図 (縮尺 1 / 20)	59
Fig. 38	小穴出土遺物実測図 1（縮尺 1 / 3）	60
Fig. 39	小穴出土遺物実測図 2（縮尺 1 / 1）	61
Fig. 40	III層出土遺物実測図（縮尺 1 / 3）	63
Fig. 41	IV層出土遺物実測図（縮尺 1 / 3）	65

表 目 次

Tab. 1	愛媛大学構内遺跡調査一覧	1
Tab. 2	樽味遺跡 2次調査の遺構一覧（小穴を除く）	15
Tab. 3	構内遺跡発掘調査一覧（平成 4年 4月～平成 5年 3月）	71
Tab. 4	樽味遺跡 2次調査掘立柱建物出土遺物一覧	73
Tab. 5	樽味遺跡 2次調査 1号溝出土遺物一覧	74～77
Tab. 6	樽味遺跡 2次調査棚列出土遺物一覧	77
Tab. 7	樽味遺跡 2次調査 2・5～7号溝出土遺物一覧	78・79
Tab. 8	樽味遺跡 2次調査土壤出土遺物一覧	80
Tab. 9	樽味遺跡 2次調査水口出土遺物一覧	80
Tab. 10	樽味遺跡 2次調査 C類小穴と出土遺物一覧	81～84
Tab. 11	樽味遺跡 2次調査 III・IV層出土遺物一覧	85

写 真 図 版

卷頭図版 1 ①樽味遺跡 2次調査区全景（完掘後 北から）

②1号溝土層断面（南から）

卷頭図版 2 ①調査区北壁土層断面（南から）

②調査区北壁土層断面 2（南東から）

③調査区東壁土層断面（南西から）

Pl. 1 ①調査区全景 1（III・IV層除去後の遺構検出状況 北から）

②調査区全景 2（完掘後 北から）

Pl. 2 ①調査区全景 3（完掘後 西から）

②10号掘立柱建物（SB-10）（東から）

Pl. 3 ①9号掘立柱建物（SB-09）、7号溝（SD-07）、21号棚列（SA-21）（西から）

- ②10～12号掘立柱建物 (SB-10～12) (西から)
 - ③14号掘立柱建物 (SH-14) (西から)
 - ④15号掘立柱建物 (SB-15) (西から)
- Pl. 4 ①13号掘立柱建物 (SB-13)、24号溝 (SD-24) (西から)
 ②13号掘立柱建物 (SB-13)、24号溝 (SD-24) (北から)
 ③20号掘立柱建物 (SB-20)、23号柵列 (SM-23) (西から)
- Pl. 5 ①1号溝 (SD-01) 1層疊群検出状況 (北から)
 ②1号溝 (SD-01) 1層遺物出土状況 1 (南から)
 ③1号溝 (SD-01) 1層疊群検出状況 2 (南西から)
- Pl. 6 ①1・2・6号溝 (SD-01-02-06)、3・4号水口 (SM-03-04) (北東から)
 ②1号溝 (SD-01) (北から)
 ③1・2号溝 (SD-01-02) (南から)
 ④7号溝 (SD-07) (東から)
- Pl. 7 ①8号土壙 (SK-08) 上層疊群出土状況 (北から)
 ②8号土壙 (SK-08) 下層遺物出土状況 (北から)
 ③25号土壙 (SK-25) (北東から)
 ④26号土壙 (SK-26) (南から)
 ⑤3号水口 (SM-03) (西から)
 ⑥4号水口 (SM-04) (西から)
- Pl. 8 ①4号水口西南隅の土壤状の落ち込み (北西から)
 ②C区拡張部分の5号溝 (SD-05) (北西から)
 ③264号小穴 (SP-264) 遺物出土状況
 ④311号小穴 (SP-311) 遺物出土状況
 ⑤336号小穴 (SP-336) 遺物出土状況
 ⑥662号小穴 (SP-662) 遺物出土状況
- Pl. 9 檜味遺跡 2次調査出土遺物 1
- Pl. 10 檜味遺跡 2次調査出土遺物 2

付 図

付図 1 檜味遺跡 2次調査遺構配置図 (縮尺 1/100)

付図 2 檜味遺跡周辺の遺跡分布図 (縮尺 1/750)

I 序 説

1 調査にいたる経緯と調査組織・体制

愛媛大学埋蔵文化財調査室は、昭和62年4月に設置された愛媛大学埋蔵文化財調査委員会の指導に基づき設立され、大学構内の諸工事に際して発掘調査を実施し、保護処置を講じている(Tab. 1)。平成3年度には農学部研究実験棟(農学部3号館)を新築建設する計画が実施されることとなった。農学部構内は椿味遺跡として周知の埋蔵文化財包蔵地であり、昭和62年度に愛媛大学大学院連合農学研究科の校舎新設工事にも調査が実施され、弥生時代前期～中世の遺構が確認されている。当然、近接した研究実験棟(農学部3号館)の建設予定地にも、同様な遺構の分布が予想された。そこで、関係各部署との協議を進め、建設に先立って、平成4年1月から愛媛大学埋蔵文化財調査室が発掘調査を実施することになった。今回の発掘調査は昭和62年度の1次調査につづく椿味遺跡2次調査にある。

愛媛大学埋蔵文化財調査委員会の設置規程および愛媛大学埋蔵文化財調査室要項は以下のとおりである。

Tab. 1 愛媛大学構内遺跡調査一覧

No.	遺跡名	調査 回数	調査 略号	発掘期間	調査面積 (m ²)	調査機関	該当工事名	文献 No.
1	文京遺跡	1次		S.50.08.01～S.50.08.24	750	松山市教育委員会	愛媛大学工学部衛生工学科校舍新築工事	23
2		2次		S.55.07.08～S.55.09.30	600	〃	愛媛大学工学部資源化学科校舍新築工事	13
3		3次		S.57.01.10～S.57.03.25	500	〃	愛媛大学法文学部校舍新築工事	13
4		4次		S.57.08.03～S.57.06.26	750	〃	松山市商中学校校舎建設工事	6
5		5次		S.59.10.26～S.59.10.28	160	〃	愛媛大学工学部危険物貯蔵庫新築工事	13
6		6次		S.61.01	99	愛媛大学人類考古学教室	愛媛大学城北地区基盤整備	
7		7次		S.61.06～S.61.09	142	愛媛大学人類考古学教室	愛媛大学法文学部校舍新築工事	
8		8次		S.61.11.25～S.62.02.18	854	愛媛大学埋蔵文化財調査室	愛媛大学城北地区基盤整備	28
9	鬼子遺跡	1次	EL	S.62.07.20～S.62.09.30	962	〃	当面交渉会館新築工事	27
10	椿味遺跡	1次	EA1	S.62.10.28～S.62.12.17	684	〃	連合農業研究所校舎新築工事	27
11	文京遺跡	9次	EE	S.62.01.11～S.63.01.29	62	〃	愛媛大学城北地区「ル・ル化粧品」増設工事	28
12		10次	ET	S.63.09.19～H.元.03.03	1073	〃	愛媛大学工学部情報工学科校舍新築工事	29
13		11次	EL	H.元.08.01～H.元.08.29	85	〃	愛媛大学法文学部講義室等名古屋開設取扱	28
14	椿味遺跡	2次	EA2	H.01.01.07～H.04.02.28	506	〃	愛媛大学農芸学部研究実験棟新築工事	本書

* 4次調査地点は愛媛大学構内ではないが、文京遺跡の中に含まれるので加えた。

* * 文獻No.は、巻末の参考文献のNo.と対応する。

愛媛大学埋蔵文化財調査委員会規程 (昭和62年4月22日制定)

(設置)

第1条 本学に、愛媛大学埋蔵文化財調査委員会（以下「委員会」という。）を置く。

(任務)

第2条 委員会は、文化財保護法（昭和25年法律第214号）に基づき、本学の施設整備に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する重要事項を調査審議する。

(組織)

第3条 委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

(1) 学長

(2) 各学部長及び教養部長

(3) 発掘調査に関連のある専門分野の教官 若干名

(4) 事務局長

(5) 庶務部長、経理部長及び施設部長

2 前項第3号の委員は、学長が任命する。

3 第1項第3号の委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。ただし、補欠により任命された委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長)

第4条 委員会に委員長を置き、学長をもって充てる。

2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

3 委員長に事故があるときは、あらかじめ委員長の指名する委員がその職務を代行する。

(委員以外の者の出席)

第5条 委員長が必要であると認めるときは、委員以外の者を出席させ、説明又は意見を聴くことができる。

(調査室)

第6条 委員会に、委員会が定める基本方針に基づき発掘調査を実施し、その結果について報告書を作成するため、埋蔵文化財調査室（以下「調査室」という。）を置く。

2 調査室に関する要項は、委員会の議を経て、別に定める。

(事務)

第7条 委員会に関する事務は、施設部企画課において処理する。

(雑則)

第8条 この規程に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会が定める。

附 則

- この規則は、昭和62年4月22日から施行する。
- この規程の施行後最初に任命される第3条第1項第3号の委員の任期は、同条第3項の規定にかかわらず、平成元年3月31日までとする。

附 則

この規程は、平成3年6月19日から施行する。

愛媛大学埋蔵文化財調査室要項 (昭和62年6月24日制定)

- この要項は、愛媛大学埋蔵文化財調査委員会規程第6条第2項の規定に基づき、愛媛大学埋蔵文化財調査室（以下「調査室」という。）に関し、必要な事項を定めるものとする。
- 調査室は、本学敷地内の施設整備に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する次の業務を行う。
 - 実施計画の立案及び実施に関すること。
 - 遺物の整理及び保管に関すること。
 - 報告書の作成に関すること。
 - その他必要な事項
- 調査室に、室長及び調査員その他所要の職員を置く。
- 調査室に、発掘調査に際して特別な知識を必要とする場合に、それぞれの専門分野について指導・助言を得るために、専門員若干名を置くことができる。
- 室長、調査員及び専門員は、愛媛大学埋蔵文化財調査委員会（以下「委員会」という。）の議を経て学長が任命する。
- 室長、調査員及び専門員の任期は、委員会の議を経て学長が定める。
- 室長は、調査室に関する業務を掌理する。
- 調査員は、発掘調査に関する業務を行う。
- 調査室に関する事務は、施設部において処理する。
- この事項に定めるもののほか、調査室の運営に関し必要な事項は、委員会が定める。

附 則

この要項は、昭和62年6月24日から施行する。

附 則

この要項は、平成3年6月19日から施行する。

農学部研究実験棟新宮にともなう樽味遺跡 2次調査にかかる平成3~4年度の埋蔵文化財調査委員会および調査体制は次のとおりである。

調査委員	学長	福西亮（平成3.3.1~）
	法文学部長	三島宣也（平成元11.5~3.11.4）
	"	溝口統一（平成3.11.5~）
	教育学部長	河瀬計明（昭和63.3.31~）
	理学部長	山本哲朗（平成3.4.1~）
	医学部長	三木吉治（平成3.3.1~）
	工学部長	二神浩三（昭和63.4.1~平成4.3.31）
	"	磯村滋宏（平成4.4.1~）
	農学部長	佐藤晃一（昭和63.3.1~）
	教養部長	森田勝美（昭和63.1.17~平成4.1.16）
	"	武田和昭（平成4.1.17~）
	法文学部	下條信行（教授・人類考古学）
	教養部	松原弘宣（教授・歴史学）
	教育学部	川岡勉（助教授・歴史学）
	事務局長	日下弘（平成元.4.1~3.2.28）
	"	藤本誠造（平成3.3.1~3.3.15）
	"	森谷俊直（平成3.3.16~）
	庶務部長	藤本誠造（昭和63.4.1~3.3.31）
	"	渡辺國利（平成3.4.1~）
	経理部長	北川功二（平成元10.1~平成4.3.31）
	"	荒記竹之介（平成4.4.1~）
	施設部長	石原鄭雄（平成元4.1~4.3.31）
	"	須川公雄（平成4.4.1~）
調査室長	下條信行	
調査員	田崎博之（教養部助教授・歴史学）	
専門委員	松原弘宣・宮本一夫（法文学部助教授・物質文化論）・川岡勉	
調査・整理補助	宮崎直栄・佐伯美幸・高原美保（施設部事務補佐員）・西岡早苗（法文学部研究科学生）・加島次郎・小玉並紀子（法文学部学生）	
調査・整理事務	渡辺弘志（施設部企画課長）・西岡重義（施設部企画課企画係長、平成	

3年度)、兵頭幸男(施設部企画課企画係長、平成4年度)・沖野正治(施設部企画課企画係)

2 調査・整理作業の経過

樽味遺跡2次調査の調査地点、調査面積、調査期間、整理期間は、以下のとおりである。

調査地点	松山市樽味町3丁目5番地 愛媛大学農学部研究実験棟(農学部3号館)新営予定地
調査面積	506m ²
調査期間	平成4年1月7日～2月28日
整理期間	平成4年4月～平成5年3月

発掘調査は平成4年1月7日から開始した。まず、調査区内の遺構面までの土層堆積状況を把握するために、南東隅で部分的に機械力(バック・ホー)で掘り下げを行い、厚さ30～40cmの造成土(III-1で報告するI層)と、その下層に耕作土と床土からなる旧水田層(III-1で報告するII層)を確認した。造成土は農学部用地として造成された際の堆積土で、下層の旧水田層は出土遺物から近世～近代の水田と判断した。旧水田層下では、1次調査で確認された遺物包含層と同質の黒色～黒褐色の粘土質シルト層があらわれた(III-1で報告するIV層)。そこで、造成土と旧水田層を機械力で除去し、黒色～黒褐色粘土質シルト層以下を人力で本格的に発掘調査することとした。また、配水管などの擾乱層の掘り上げ作業も同時に併行させた。ただし、調査区北半部分では旧水田層下の黒色～黒褐色粘土質シルト層が数cmの厚さしかなく、部分的に剥ぎ取ってしまい、下層の鈍い黄褐色粘土質シルト層(III-1で報告するV層)があらわれ、溝や多数の小穴を検出した。

農学部構内に設置された3級基準点から座標点を移動し、調査区に10×10mの方眼区画を設定した。その後、黒色～黒褐色粘土質シルト層の上面で遺構検出を行ったが、検出できた遺構は少数の小穴だけであった。これは遺構の埋土が黒色～黒褐色粘土質シルト層とほぼ同質であるためである。そこで、下層の鈍い黄褐色粘土質シルト層(III-1で報告するV層)の上面まで掘り下げ作業を行い、確実に遺構を検出することとした。その結果、多数の小穴・溝などの遺構を検出できた。調査区の西半部分では、暗褐色や鈍い黄褐色の粘質土の小さな塊状ブロックを含む灰褐色ないし褐色の砂質シルト層(III-1で報告するIII層)が堆積し、これを除去した後に、幅1.8～3.5mの溝などを確認した。この際、調査区の南西部分では遺構の輪郭が明確でなかったため、鈍い黄褐色粘土質シルト層をやや深めに掘り下げたために、遺構の一部を削り取る結果となった。

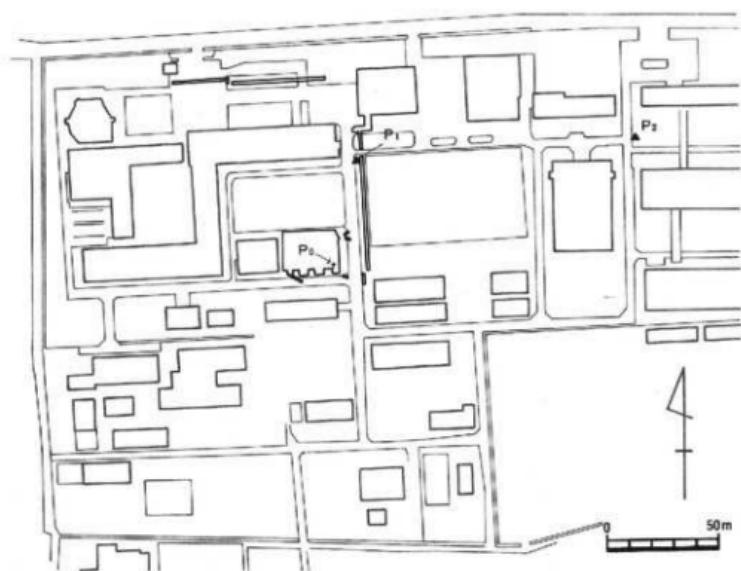


Fig.1 愛媛大学農学部構内の3級基準点と1・2次調査地点（縮尺1/2,500）

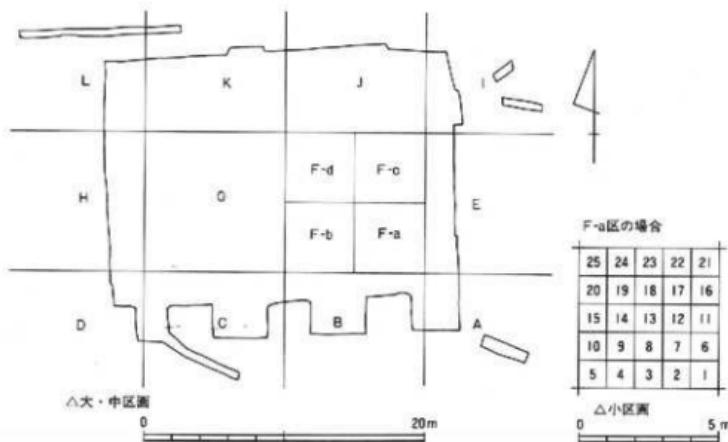


Fig.2 標味遺跡2次調査区の大・中・小区画（縮尺1/400-1/200）

遺構の検出後、写真撮影と平板測量を行い、調査区西側から遺構番号を付した。埋土の土質・色調を記録し、遺構の発掘と実測作業を併行して行った。遺構には掘立柱建物・溝・水口・棚列・性格不明の土壤などがあり、14~15世紀の遺物が出土し、中世の集落跡であることを確認した。遺構の発掘作業がほぼ終了した2月13日に、発掘調査の中間報告として現地説明会を実施した。見学者は、学生・大学教職員一般を含めて100名をこえた。以後は、補足的な調査と図面の点検を行い、調査区の全体写真と個別の遺構写真を撮影した。調査の最終段階には、遺構を検出した鈍い黄褐色粘土質シルト層以下の調査のため、機械力と人力を併用して、さらに1mほどを掘り下げ、1次調査で確認されたAT火山灰を含む黄褐色粘土質シルト層(III-1で報告するVII層)などを確認した。土層断面図の作成と写真撮影を行い、2月28日に発掘調査を完全に終了した。

整理作業は平成4年4月から始めた。図面・写真などの発掘調査時の記録類を整理するとともに、出土遺物の洗浄・注記・復元作業を行った。その後、出土遺物の実測・写真撮影を行い、発掘調査報告書刊行の準備作業にはいった。また、調査成果を公開する場として10月22日~11月9日に附属図書館3階で『速報展…中世の樽味遺跡…』を開催した。見学者は約400名を数え、学内外から大きな反響をえることができた。

3 調査・記録の方法と遺物・記録類の保管

今回の発掘調査と整理作業では、次の調査・記録の方法をとり、遺物・記録類の整理・保管を行っている。

①調査区の設定と呼称 (Fig.1-2)

造成土・旧水田層と浸乱壌の掘削を行った後に、農学部構内に設置されている2点の3級基準点から座標点Poを調査区南東部に移動した。座標は以下のとおりである。

3級基準点 No1 X=92931.851 Y= 65209.582 H=42.243m

3級基準点 No2 X=92936.614 Y=-65083.907 H=44.422m

Po X=92880.000 Y=-65200.000 H=41.612m

座標点をPoを中心として、真北方向(磁北から東偏6度21分)を軸として10m方眼区画を設定した。方眼区画は南東から北西へ向かってA-B-C…J-K-L区と呼ぶこととした。さらに、各区を5mごとに四等分し、東南からa-b-c-dの中区画に分けた。呼称は、大区画につづけて、たとえばF区ではF-a-F-b-F-c-F-d区となる。後述のIII-IV層の掘り下げに際しては、便宜的に中区画を南西側から1・2・3…23-24-25の1m方眼の小区画に細分し、

大区画・中区画・小区画の順序で調査区画を表記して、遺物を取り上げた。

②遺構・遺物の登録番号と略号

遺構には本次調査区内での通し番号の遺構番号を付して、遺構台帳に順次記録した。掘立柱建物・土壙・溝・水口・棚列には1から26までの、もっとも数の多い小穴には101からの通し番号の遺構番号を付している。掘立柱建物・棚列は複数の小穴の集合体である。これらを構成する柱穴の番号は、前述の101からの小穴の遺構番号をそのまま用いた。また、掘立柱建物にはSB、土壙にはSK、溝にはSD、水口にはSM、棚列にはSA、小穴にはSPの略号を冠して、遺構の種別を表した。

遺物にはすべて遺物登録番号を付している。まず、取り上げ時の判断あるいは作業上の単位にしたがって、本次調査区内での通し番号を1から付して、遺物台帳に順次記録した。整理作業の際に、実測図を作図あるいは写真撮影した遺物は、別途に701から通し番号の遺物登録番号を付した。そのため1~700までの発掘調査時に付した遺物登録番号には、一部欠番が生じている。遺構番号との混同を避けるために、遺物登録番号に遺物をあらわす記号Rを冠した。本報告書に掲載された遺物は、巻末の遺物一覧表に遺物登録番号を表記し、報告書から遺物の検索ができるようにしている。

③遺物・記録類の整理・保管方法

遺構の記録は、20分の1の縮尺で全体図を作成し、主要な遺構については20分の1または10分の1の縮尺で個別に遺構実測図を作図した。これらの遺構実測図には、0001から4桁の通し番号の遺構実測図番号を付し、遺構実測図台帳に順次記録した。写真類は、35mmモノクロに3桁+2桁の枝番号(001 01から)、35mmスライドに3桁(001から)、6×7モノクロ・スライドには4桁(0001から)の通し番号の写真登録番号を付し、検索用の写真カードを作成して、整理を行った上で写真台帳に記録した。

出土遺物には、樹味遺跡2次調査を表すEA-2と遺物登録番号R-○○○を注記した。実測図を作図あるいは写真撮影した遺物には、701以降の遺物登録番号を併記した。遺物はコンテナ箱に収納したが、各コンテナには1から通し番号の箱番号を付して、遺物台帳に収納箱番号の欄を設け記入している。

遺物実測は、1分の1または2分の1の縮尺で作図し、必要に応じて写真を撮影した。遺物実測図には、001から3桁の通し番号の遺物実測図番号を付して、遺物実測図台帳に順次記録した。遺物写真は、遺構写真につづけて写真登録番号を付し、写真台帳に記録した。

II 位置と環境

樽味遺跡は松山市樽味町3丁目5番地内に所在する。松山市の位置する道後平野（松山平野）は、四国北西部の高鍋半島の南西基部に開けた平野である。平野の中央南よりには、重信川が支流の石手川・小野川・延部川などと合流しながら東から西へと流れている。これらの河川の山麓部には、扇状地性の低地が展開し、その一部は段丘化している。樽味遺跡は重信川の支流の一つである石手川がつくる扇状地の扇央に立地している（Fig. 4）。

この石手川の扇状地は、標高50～20m、半径4kmほどの広がりをもつ。東側には洪積世に段丘化した扇状地面がみられる。鹿島愛彦と高橋治郎は、段丘化した扇状地の黄褐色ないし褐色の粘土をともない径0.3m以下の礫を含む砂礫層を古期扇状地堆積物としてまとめている（鹿島・高橋 1980、鹿島ほか 1992）。海津正倫は、古期扇状地面と現世の扇状地面の中間にひろがり、部分的に開析された地形面を低位段丘に区分する（海津 1982）。平井幸弘は、鹿島・高橋の古期扇状地のつくる地形面を「烟寺面」、海津の低位段丘面を「東野面」、現世の扇状地面を「中村面」と呼び地形分類を行っている。樽味遺跡は海津の低位段丘面、平井の「東野面」に立地している（Fig. 5）。また、樽味遺跡1次調査での約23000年前の始良（AT）火山灰の検出状況から、平井は「東野面」がAT火山灰の降下・堆積期には段丘化しており、約20000～18000年前には石手川の本流が扇状地北部の城北地区から堀江低地へと流れていたことを推測している（平井 1989a、1989b）。そのために、樽味遺跡周辺は洪積世末期から完新世には比較的安定した土地環境にあったと考えられる。

さて、道後平野では旧石器時代に遡る遺跡は、現在のところ発見されていない。しかし、丘陵部や、平井の「烟寺面」～「東野面」を中心としてナイフ形石器・細石器が採集されている。将来、旧石器時代の遺跡が発見される可能性は高い。縄文時代以降の遺跡は平野の各所で点々と発見・調査されている（Fig. 3）。愛媛大学構内でも、文京遺跡11次調査で縄文時代後期の野外炉が確認され、多数の遺物が出土している。

弥生時代になると、平野内の遺跡数は急激に増加する。樽味遺跡周辺でも、弥生時代の遺跡がいくつか確認されている。樽味遺跡1次調査では前期の土壙と溝、樽味立派遺跡では中期まで遡る可能性をもつ円形の竪穴式住居跡、後期の土壙・土器窯、桑原田中遺跡では後期の土壙が調査されている。これらは愛媛大学農学部キャンパスを中心として広い範囲に散漫に分布している。しかし、遺跡・遺構の密度は、道後平野の弥生時代の中心的な遺跡である文京遺跡や久米・米住地区の遺跡群と比べて、かなり低い。また出土遺物も少ない。



Fig. 3 松山市周辺の主要遺跡分布地図 (縮尺 1/100,000)

- | | | | | |
|-----------|--------------|-------------|------------|-------------|
| 1. 柳味遺跡 | 2. 港堺城 | 3. 文京遺跡 | 4. 祝谷六丁場遺跡 | 5. 道後今市遺跡 |
| 6. 若草町遺跡 | 7. 高月山古墳 | 8. 大沼遺跡 | 9. 船ヶ谷遺跡 | 10. 朝日谷古墳群 |
| 11. 古熊遺跡 | 12. 宮前川遺跡 | 13. 西古泉遺跡 | 14. 横田遺跡 | 15. 上三谷古墳群 |
| 16. 出作遺跡 | 17. 水満田遺跡 | 18. 車頭面山北遺跡 | 19. 大下田古墳群 | 20. 運動公園遺跡群 |
| 21. 来住庵寺跡 | 22. 福音寺小学校遺跡 | 23. 三島神社古墳 | 24. 経石山古墳 | |

しかし、樽味立派遺跡では、弥生～古墳時代の遺物包含層から貨泉が、樽味高木遺跡3次調査では船を線刻した弥生時代後期の絵画土器片が出土している（梅木 1992）。これらの遺物は、樽味遺跡周辺の弥生時代の集落が自己完結的なものではなく、文京遺跡や久米・米住地区の遺跡群との交流や、平野各所と結び付きが強かったことを物語っている。

古墳時代には竪穴式住居跡や掘立柱建物などの遺構が目立って増加する（梅木 1992）。樽味立派遺跡では前期初頭の竪穴式住居跡2軒、中～後期の竪穴式住居跡10軒と掘立柱建物18棟が、樽味高木遺跡では1～3次調査で前期初頭前後の竪穴式住居跡1軒、中～後期の竪穴式住居跡4軒・掘立柱建物1棟・溝・土壤が調査されている。また、樽味四反地遺跡1次調査では中～後期の旧河道、2次調査では竪穴式住居跡2軒と溝、桑原西福葉遺跡1・2次調査では溝・土壤、樽味遺跡1次調査では旧河道と土壤が確認されている。古墳時代の遺構は愛媛大学農学部キャンパスの西から北側を中心として分布する。

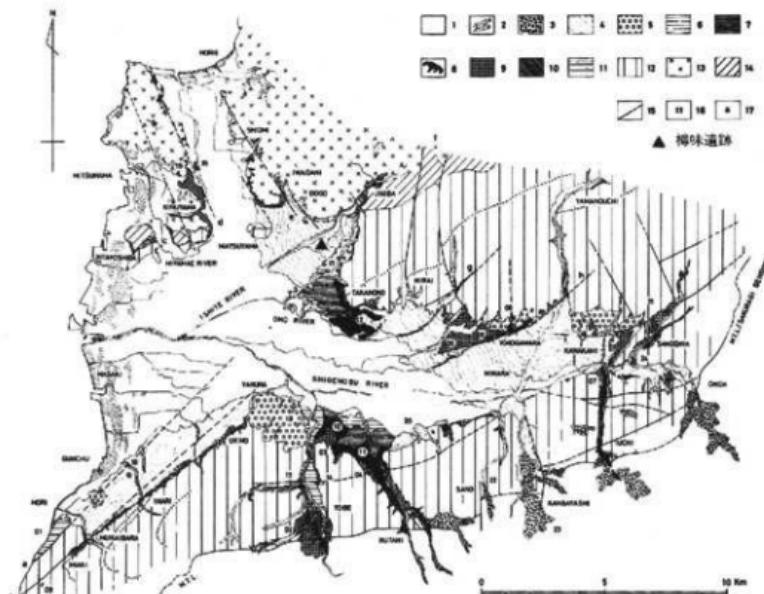


Fig. 4 松山市周辺の地質（鹿島ほか1992に一部加筆）

- | | | | |
|---------------|----------------|----------------|-------------|
| 〈凡例〉 1. 沖積地植物 | 2. 海浜地植物 | 3. 厚蓋地植物 | 4. 新期層状地堆植物 |
| 5. 旧期層状地堆植物 | 6. 低位段丘堆植物(下位) | 7. 低位段丘堆植物(上位) | 8. 中位段丘堆植物 |
| 9. 高位段丘堆植物 | 10. 久万ノ台層 | 11. 郡中層 | 12. 和泉層群 |
| 13. 須家花こう岩類 | 14. 須家変成岩類 | 15. 断層 | 16. 露頭番号 |
| 17. 断層番号 | | | |

奈良～鎌倉時代の遺構は、現在のところ道後平野内では発見例は少なく、樽味遺跡周辺でも、樽味四反地遺跡1次調査で10世紀代の溝が確認されているにすぎない。再び遺構が集中して営まれるのは14～15世紀の南北朝～室町時代である。樽味四反地遺跡2次調査では据立柱建物、樽味遺跡1次調査では溝や土壤が確認されており、今回の樽味遺跡2次調査でも据立柱建物・溝・櫛列・土壤などが調査された（宮本 1989、梅木 1992）。中世の遺構は集落に関連したもので、遺構や遺物の出土分布はそれ以前とは異なり愛媛大学農学部構内へ中心が移る。中世後期には道後平野は河野氏の統治下にあった。その本拠地は樽味遺跡の北2kmほどにある湯築城にある。距離的な近さから、樽味遺跡周辺の中世集落にも河野氏の勢力が強く及んでいたことが考えられる（川岡 1989-1992）。

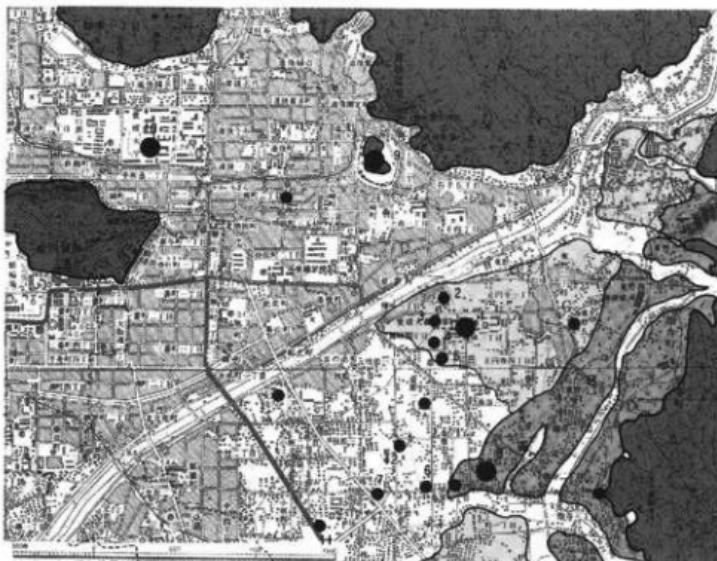


Fig. 5 石手川流域の地形分類と遺跡分布（地形分類は平井 1989による 比尺 1/35,000）

- | | | | |
|------------|-----------|-------------|------------|
| A. 山地・丘陵 | B. 畑寺面 | C. 東野面 | D. 中村面 |
| 1. 樽味遺跡 | 2. 樽味立溝遺跡 | 3. 樽味高木遺跡 | 4. 樽味西反地遺跡 |
| 5. 喜原西和葉遺跡 | 6. 喜原田中遺跡 | 7. 東本遺跡 | 8. 錦石山古墳 |
| 9. 湯築城 | 10. 文京遺跡 | 11. 喜ノ口IV遺跡 | 12. 喜原植寓遺跡 |

III 調査の概要

1 基本層位

本次調査区の基本層位は、基盤層を含めて12層に分層される（付図）。

〈I層〉 瓦礫を多く含む造成土で、農学部構内の造成にかかわる堆積土である。

〈II層〉 I層造成以前のII水田層である。耕作土部分にあたるIIa層と床土部分のIIb層に細分できる。IIa層は黄灰色(2.5Y5/1)で、砂を混じえるシルト層である。IIb層は灰黄褐色(10YR4/2)ないし灰褐色(10YR4/2)を呈し、IIa層と比べやや粘質がつよい。鉄分とマンガンの沈着が認められた。炭化物の細片を含む。古墳時代後期の須恵器から近世・近代の陶磁器片が出土した。水田の時期は近世以降である。

〈III層〉 灰褐色(7.5YR4/2)ないし褐色(10YR4/4)の砂質シルト層である。暗褐色(7.5YR3/4)や鈍い黄褐色(10YR5/3)粘土質土の小さな塊状ブロックを含む。調査区西部(C-d-D-e-G-b-G-d-H-a-H-c-K-b-K-d-L-a-L-c区)に分布する。下層には14世紀代の1号溝があり、溝が埋没した後も浅い窪地状となっていた部分にIII層が堆積している。

〈IV層〉 調査区中央から北東部(F-G-I-J-K区)にひろがるIVa層と、東南部(A-B-E-F区)に分布するIVb層とに細別される。IVa層は黒褐色(10YR3/2)の粘土質シルト層で、0.5cm以下の粗砂を含み、下部ほど粘性が強い。調査区北部は2~3cmと薄いが、南側へ向かって次第に厚くなり15cmほどとなる。IVb層は黒色(7.5YR1.7/1)の粘土質シルト層である。砂礫を含まず、土のしまりはなく、バサバサした感じの土層である。肉眼観察では火山ガラスを含むようで、土壤サンプルを探集したが、細かな分析は行っていない。10~17cmほどの厚さをはかる。IVa層とIVb層は、平面的には先後関係を把握できなかったが、調査区東壁土層断面の観察から、IVb層の堆積はIVa層に先行することを確認した。

中世の遺構を検出したのは、V層上面であるが、掘り込みの面はIV層上面であることを調査区土層断面で観察できた。そのため、IV層出土の遺物は、1m方眼の小区画で取り上げを行った。攢乱壙周辺では近世以降の陶磁器が出土しているが、14世紀を中心として16世紀までの遺物が大半である。本来、遺構にともなうものも含まれると考えられる。

〈V層〉 調査区全面にひろがっている。V層上面で遺構を確認した。鈍い黄褐色(10YR5/4)のかなりしまった粘土質シルト層である。V層は上部のVa層と下部のVb層に分層できた。Va層とくらべ、Vb層は粘性が強い。最下部は褐色(7.5YR4/4)に変化し、下層のVI

層との漸移的な土層となる。遺物は含まれていない。

〈VI層〉 褐色から黄褐色の砂礫質のシルト層で、白色の1mm前後の砂礫を多く含む。上層のV層との境界は不整合面をなす。調査区北壁の土層断面では、Vla・Vlb・Vlcの3層に細分できる。Vla層は北壁の中央部から東側にかけてみられる凹部に堆積する。暗褐色(10YR3/4)の上部に対して、内部の下半部分は、鈍い黄褐色(10YR5/4)ないし黄褐色(10YR5/6)で、粘性が強い。Vlb層はVla層の下層にあたり、北壁東側にもみられる。褐色(10YR4/6)で、Vla層とくらべ、やや砂っぽい。Vlc層は褐色(10YR4/4)ないし黄褐色(10YR5/6)の粘土質シルト層で、北壁西半部でみられ、中央部ではVla層の下にもぐり込む。Vlb層との境界は漸移的に変化する。遺物は含まれていない。

〈VII層〉 調査区の北西部(G・H・K・L区)のみにみられる。黄褐色(10YR5/6)の粘土質シルト層でしまっているが、カサカサした質感をもつ。下部は褐色(7.5YR4/4)マンガンの斑文がみられる。さらに下底部には黒褐色(7.5YR3/1)の粘土質シルトが部分的に混じる。上部から下部へ漸移的に変化しており、境界を明確につかむことはできなかった。層序的に1次調査で確認された約23000年前に鹿児島県の姶良カルデラから噴出したAT火山灰層に対応する。土壤サンプルを探集したが分析は行っていない。VII層は一部人力で精査したが、遺物は出土しなかった。

〈VIII層〉 褐色(10YR4/6)の砂礫層である。調査区北壁の土層断面では、VI層の窪地状の落ち込みの両側でブロック状にみられるだけで、東壁断面の南半でも5~50cmほどと層厚は一定していない。

〈IX層〉 調査区の北・東壁の土層断面で比較的安定した層厚でみられる。褐色(10YR4/6)の粘土質シルト層で、白色の直徑1~10mmの砂礫を多く含む。北壁断面の西半部では、上部に黒褐色(10YR3/1)の厚さ2~3cmの粘土質シルト層がほぼ水平に堆積している。

〈X層〉 褐色の砂礫層で、握り拳大の礫が多い。非常にしまっており、スコップや鍼の刃が立たない状態であった。

〈XI層〉 調査区北西隅の擾乱塊部分で標高39.40m前後まで深掘りを行い、XI層とXII層とを確認した。XI層は暗灰褐色の砂層で、45~50cmの層厚を測る。

〈XII層〉 褐色の砂礫層で、握り拳~人頭大の礫がぎっしり詰まった状態であった。XI層との境界付近から地下水が湧き出し、XI層部分が倒壊する危険な状態となつたため、XII層を20cmほど下げ、深掘りを中止した。

Tab. 2 梅味遺跡 2次調査の遺構一覧（小穴を除く）

略号	No	遺構の種別	調査区	規模・その他の
SD	01	溝	調査区西部	南北方向にはしる幹線水路
SD	02	溝	C-G-K区	1号溝にともなう枝水路
SM	03	水口	K-b~G-b区	1・2号溝にともなう給排水施設
SM	04	水口	G区	1・6号溝にともなう給排水施設
SD	05	溝	B-C区	居住区画のための区画溝、6号溝と連結
SD	06	溝	C-G-K区	1号溝にともなう枝水路および区画溝を兼ねる
SD	07	溝	I-J-K区	居住区画のための区画溝、6号溝と連結
SK	08	土壙	J-b区	直径1.19~1.2mの円形土壙
SB	09	掘立柱建物	I~J区	1×4間、SP-420-458-596-600-607-736-751
SB	10	掘立柱建物	F-G-J-K区	1×4間、SP-372-375-497-502-509-515-518-533
SB	11	掘立柱建物	F-J区	1×1間、SP-357-367-453-494
SB	12	掘立柱建物	F-J区	1×1間、SP-347-358-447-452
SB	13	掘立柱建物	G区	1×2間、SP-288-311-566-570-587-593
SB	14	掘立柱建物	F-G区	1×1間、SP-539-548-555-718
SB	15	掘立柱建物	F-G区	1×2間、SP-237-254-260-277-280-632
SB	16	掘立柱建物	E区	1×1間、SP-196-320-324-331
SB	17	掘立柱建物	C-G区	1×1間、SP-163-175-296-302
SB	18	掘立柱建物	C区	1×1間、SP-162-169-179-184
SB	19	掘立柱建物	B-C区	1×1間、SP-138-152-243-266
SB	20	掘立柱建物	B-F区	1×2間、SP-106-118-120-126-131
SA	21	柵列	I-J-K区	7号溝に併設された柵
SA	22	柵列	C-G区	6号溝に併設された柵
SA	23	柵列	B-F区	20号掘立柱建物にともなう柵
SD	24	溝	G区	13号掘立柱建物にともなう小溝
SK	25	土壙	C区拡張部	直径0.75mの円形土壙
SK	26	土壙	I-b区	0.87m×0.55mの隅丸放方形土壙

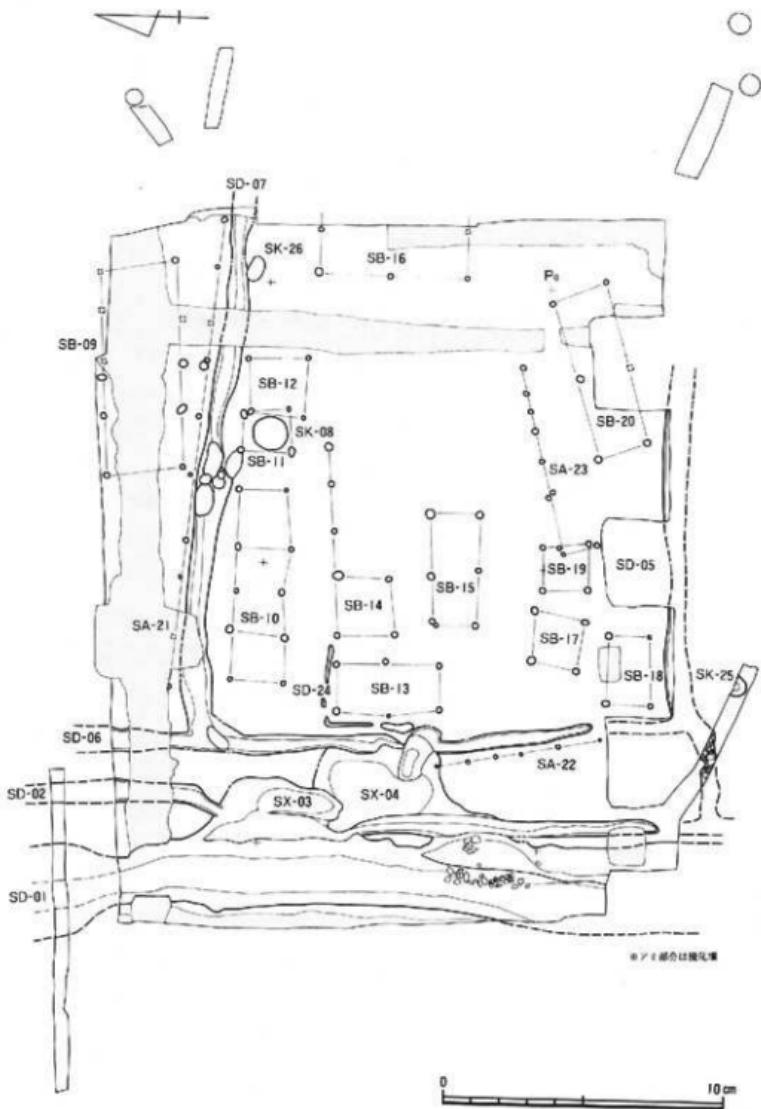


Fig. 6 梅味遺跡 2 次調査主要造構配置図 (縮尺 1/200)

2 遺構と遺物

本次調査では、14世紀～16世紀の中世の集落関連の遺構を検出した。いずれも中世集落を構成する遺構で、遺構の種別と基数は次のとおりである(Fig.6)。また、小穴を除く遺構を一覧表にまとめた(Tab. 2)。

掘立柱建物	(SB-09～20)	12
土壙	(SK-08-25-26)	3
溝	(SD-01-02-05～07-24)	6
水口	(SM-03-04)	2
柵列	(SA-21-22-23)	3
小穴	(SP-101～751、うち38欠番)	613

出土遺物は、I～IV層と遺構出土の遺物とに大別される。

I・II層の遺物は近世以降のものである。III層からは14～16世紀の遺物が出土している。IV層からは容量30㍑入りのコンテナ2箱分の遺物が出土した。近代以降の遺物が少量混じるが、14～15世紀の遺物が多い。前述したように、IV層の上面から遺構が掘り込まれているためであると考えられる。

遺構出土の遺物は、14世紀から16世紀にわたるもののが含まれている。土師器の皿・壺や土鍋・三足付羽釜が大半を占める。他に、亀山焼の大壺、備前焼の擂鉢、東播系須恵器こね鉢、常滑焼の大甕、中國産の白磁・龍泉窯系青磁・同安窯系青磁の皿や碗などがある。また、「治平元寶」「嘉祐元寶」などの中国銭、石硯、獸骨などの自然遺物が出土した。これらの遺物は、調査区西側で南北方向にはしる1号溝の中層～上層から集中して出土し、他の遺構の出土遺物は極端に少ない。14世紀代の遺物がほとんどで、一部15世紀に下る遺物が含まれている。また、8号土壙からは16世紀代の備前焼き大甕・石臼などが出土した。

今次調査で出土した遺物の量は、整理終了後の状態で、容量30㍑入りのコンテナ35箱分である。本報告では、遺構出土の全遺物について、出土量が多い1号溝を除き、遺構ごとに一覧表を作成して巻末に付している(Tab. 4～11)。

IV 調査の記録

前述したように、今回の調査では、掘立柱建物12、土壙3、柵列2、溝6、水口2、小穴多数を検出した。ここでは、遺構の種別ごとに遺物とあわせて報告を行う。

1 掘立柱建物（遺構略号 SB）

本次調査区内では、500～600個の多数の小穴が検出された。その中で、後述するL字形に折れる24号溝（SD-24）に囲まれて1×2間の掘立柱建物と考えられる小穴群を検出できた。また、5・6号溝（SD-05・06）に平行して、方形に並ぶ小穴群もみられた。そこで、配置関係から考える限りの掘立柱建物を復元し、それらを構成する小穴群の埋土や深さを検討して、9～20号掘立柱建物（SB-09～20）の12棟を確定した。ただし、1×1間の建物は、やや強引な推定となった。出土遺物は少ない上に、細片がほとんどである。報文に加えて、巻末の遺構ごとに作成した出土遺物一覧表を参照されたい（Tab. 4）。

9号掘立柱建物（SB-09 Fig. 7・12-1-2 Pl. 3-①）

調査区の北東隅のI～J区に位置する。607・600・596・751・736・458・420号小穴（SP-607・600・596・751・736・458・420）を柱穴とする。中央部分と北東部分を配水管の掘り込みで削られている。調査区北壁断面でSP-420と対をなすSP-751を確認したことで、梁間1間、桁行4間の東西に細い建物と判断した。中央部の擾乱部分に柱穴を考えて、梁間2間の可能性も残す。梁間の全長は2.75～2.78m、桁行の全長は7.2～7.35mを測る。柱間は一定せず、平面形は直角長方形である。南側の桁行列のSP-736・458・420は深さ20cm前後である。SP-471で検出面から20cmほどの深さに偏平な石が置かれ、この上に柱を立てたと考えれば、他とほど同じ深さで柱が立てられたことになる。北側の桁行列の小穴の深さは、現存で30～35cmを測る。南側と比べやや深い。SP-751は調査区北壁断面のIVa層の上面から掘り込まれており、深さ45cmを測る。IVa層の厚さを考慮すれば、他の柱穴もそれぞれ10cmほど深くなると考えられる。

埋土は黒褐色の粘土質シルトを基調として、一部、褐色土を散漫に10～20%含む。SP-471は炭化物を少量含む。柱痕跡は検出面、土壙断面では明瞭に確認できなかった。ただし、SP-458・751では柱痕と考えられる凹みを底付近で確認した。凹みは深さ5～10cm、直徑は10～15cmであり、SP-471内の石の大きさと考えあわせれば、柱の直徑は10～15cmであろう。

出土遺物は、SP-458 から土師器坏の胴部細片、SP-471 から土師器羽釜の口縁部細片、SP-596 から土師器坏の底部破片が出土した (Fig. 12-1・2)。

1 は内外面ともに横ナデ仕上げで、内面には指頭圧痕がわずかに残る。SP-477 から出土

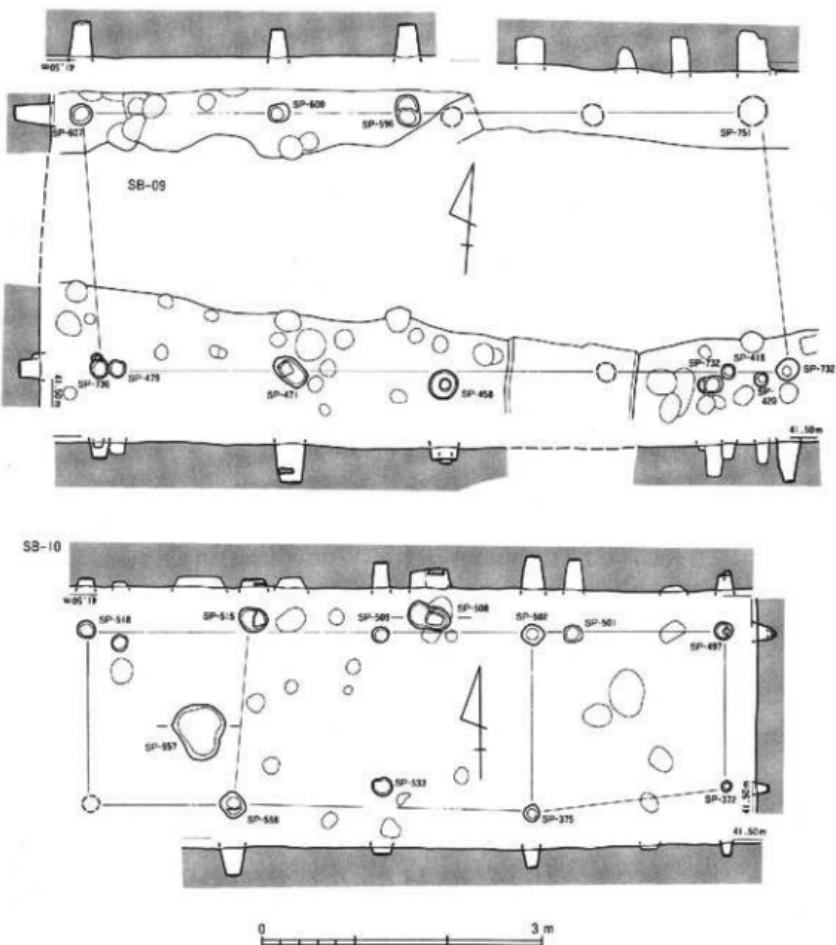


Fig. 7 9・10号掘立柱建物 (SB-09・10) 実測図 (縮尺 1/60)

した。2は外面の荒れが著しく、調整の仔細は不明。内面はナデ調整を施し、胸部が立ち上がる付近には、棒状工具をナデつけて沈線状の凹みを巡らせる。SP-596から出土した。

10号掘立柱建物 (SB-10 Fig. 7-12-3-4 Pl. 3 ②)

調査区の北半部中央のF-G-J-K区に位置する。518-515-509-502-497-558-533-375-372号小穴(SP-518-515-509-502-497-558-533-375-372)を柱穴として構成される。南西隅のSP-518に対応する柱穴を欠くが、梁間1間、桁行4間の東西に長い建物と考えた。梁間の全長は1.9~2m、桁行の全長は6.8mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とするが、東西両側のSP-518-497-372は灰褐色~褐色味をおびる。SP-518-515-509には炭化物が少量混じる。北側の桁行列の柱穴は、ほぼ一直線上に並ぶ。しかし、深さは現存で5~35cmとバラつきがある。SP-515は底近くに偏平な石が敷かれていた。南側の桁行列の柱穴は直線上に並ばず、柱穴の大きさも不揃いである。しかし、中央部の柱穴のSP-515-502-558-533-375は、直径が15cm前後で、柱間隔も梁間で1.9m、桁行で1.35~1.6mとほぼ一定している。東西両側の柱穴は直径5~13cmで、SP-497の柱痕は5cmと小さい。また、柱間隔もやや広く、配置も不揃いである。埋土の質も異なることから、梁間1間、桁行2間の建物の両側に、SP-518-497-372で庇部分を後に追加した構造が考えられる。

出土遺物は、SP-502から土師器壊の細片が3点出土したのみで、2点を図化できた(Fig. 12-3-4)。3は底部近くの胸部破片で、内外面とも横ナデ仕上げを施す。4は底部の破片で、外底は糸切り離しの後にナデ仕上げを施す。内面は横ナデ調整で仕上げられている。

11号掘立柱建物 (SB-11 Fig. 8-12-5 Pl. 3-②-7-②)

調査区北半の中央部F-J区の境界部分に位置する。SB-10の東隣に営まれている。¹ 494-453-367-357号小穴(SP-494-453-367-357)を柱穴として構成される。梁間・桁行とともに1間の建物である。SP-494-453間は1.35m、SP-367-357間は1.6m、SP-494-367間は1.75m、SP-453-357間は1.6mを測り、南北にやや長く歪んだ平面形をとる。

各柱穴の埋土は、SP-494がやや砂質が強いが、いずれも黒褐色シルトである。SP-357-367-453は炭化物が混じる。柱痕は検出面と土層断面で確認できなかったが、柱穴の底付近で直径7~10cmの痕跡を部分的に確認した。この建物の中央部分には8号土壙(SK-08)がある。位階関係から11号掘立柱建物は8号土壙の附属施設と考えた。

出土遺物は、SP-494から出土した土師器の壊・羽釜の破片のみである。細片化しており、図化できたのは壊の底部破片の1点のみである(Fig. 12-5)。内外面ともに器面の荒れが進むが、外底にわずかに糸切り離しの痕跡が観察できた。

12号掘立柱建物 (SB-12 Fig. 8-12-6-7 Pl. 3-②)

調査区北東部のF・J区の境界部分に位置する。11号掘立柱建物と一部重なるが、柱穴は直接切り合ってはいない。452・447・358・347号小穴(SP 452・447・358・347)を柱穴として構成され、梁間・桁行ともに1間の建物である。SP 452・447間は1.88m、SP-358・347間は2.13m、SP-452・358間は1.93m、SP-447・347間は2.12mを測り、平面形は南西側にかなり歪んだ平面形をもつ。柱穴の深さは、現存でSP-358が6cmとかなり浅いが、他の柱穴は14~18cmである。

埋土はSP 452・358がやや粘性が強いものの、黒褐色シルトを基調として、鈍い黄褐色~褐色のシルトを満遍なく10~20%ほど含む。SP 358の埋土には炭化物の細片がわずかに混じる。柱痕はSP-447の底付近で直径8cmほどの痕跡を確認したにすぎない。

遺物は、SP-358から土師器坏の破片が4点出土した。細片のため2点しか図化できなかった(Fig. 12-6-7)。6は口縁~胴部の破片で、推定口径は12.2cm。7は底部の破片で推定底径は6.7cm。ともに器面の荒れが著しく、調整や底部の切り離し方法は不明である。

13号掘立柱建物 (SB-13 Fig. 8-12-8~10-37 Pl.4-①・②・8-④・10-⑩)

調査区西側のG区に位置する梁間1間、桁行2間の南北に長い建物である。6号溝(SD-06)とほぼ平行し、北側と南側をL字形に折れ曲がる小溝の24号溝(SD-24)が開む。当初、24号溝と小穴間の位置関係から、587-566-592-570-312-288号小穴(SP-587-566-592-570-312-288)から構成されると考えた。しかし、SP-592-312は浅く、311号小穴(SP-311)の底付近で柱痕跡を確認したため、SP-592-312ではなく593-311号小穴(SP-593-311)を柱穴と考えた。梁間は、SP 587-566間で1.68m、SP-311-288間で1.55mで、南側の梁間がやや狭い建物となる。桁行きの全長は3.75mを測る。

埋土はSP-566-570が鈍い黄褐色~褐色の粘土質シルトをわずかに含むが、基本的には黒褐色粘土質シルトである。SP-311に加えて、SP-589-566で直径10cm前後の柱痕跡を底付近で確認した。柱穴の深さは、建物の四隅のSP 587-566-311-288が現存で28~40cmであるが、桁行き中央のSP-593は20cm、SP-570は14cmと浅い。

遺物はSP-311-565-587から出土している(Fig. 12-8~10)。10はSP-311から出土した。土師器坏の1/3ほどの破片である。柱穴の上層から柱痕跡の西側に接して正立の状態で出土した(Fig. 37、Pl.8-④・10-⑩)。完形に復元できる量の破片が揃わず、打削った破片を埋めたものと考えた。器面の荒れが進んでいるが、外底面には糸切り離しの痕跡が部分的に観察できた。内底および口縁~胴内外面は横ナデ調整か。SP-565とSP 587からも土師器坏と羽釜の破片が出土したが、図化できたのは2点のみである(Fig. 12-8-9)。ともに坏の口縁部の細片で、内外面ともに横ナデ調整で仕上げる。8はSP-565、9はSP-587から出土。

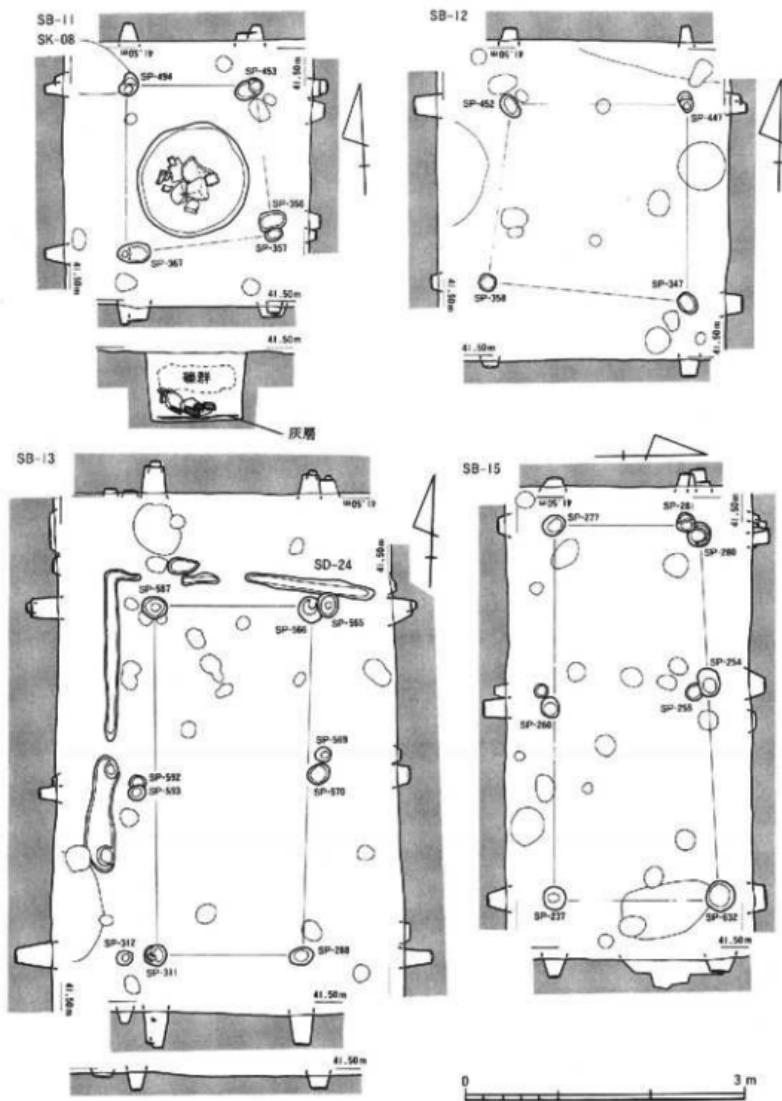


Fig. 8 11~13・15号攝立柱建物(SB-11~13・15)・8号土壤(SK-08)・24号溝(SD-24)実測図(縮尺1/60)

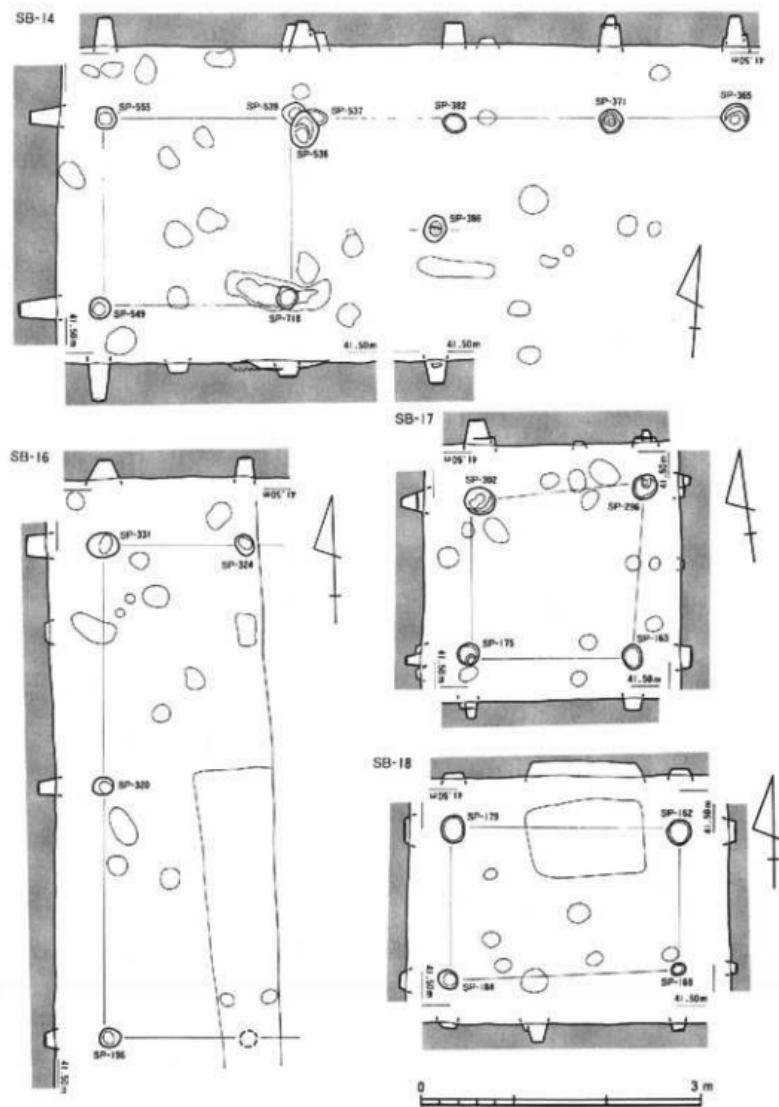


Fig. 9 14~16~18号据立柱建物 (SB-14·16~18) 実測図 (縮尺 1/60)

14号掘立柱建物 (SB-14 Fig. 9-12-11~15 Pl. 3-③)

調査区のほぼ中央部のF-G 区、13号掘立柱建物の東側で、ほぼ一直線上に並ぶ555-539-382-371-365 号小穴 (SP-555-539-382-371-365) の5 個の小穴を検出した。掘立柱建物の存在を考えて、対応する小穴の検出に努めたが、西側のSP-555-539 に対応する549-718 号小穴 (SP-549-718) を発見のみである。しかし、SP-371-365 では底付近で柱痕跡を確認できた。そこで、SP-555-539-549-718 を柱穴する梁間と桁行が1 間の建物に、東側へのびるSP-382-371-365 の柵状の構造が付属した構造を考えた。建物部分の規模はSP-555-539 間が2.2m、SP-549-718 間が2.0m、SP-555-549 間が2.4m、SP-539-718 間が2.0mを測る。比較的整った方形の平面形をもつ。柵部分は全長4.72mを測る。SP-539-382 間は1.7m、SP-382-371 間は1.7m、SP-371-365 間は1.32mである。

埋土は建物部分のSP-555-539-549-718 が暗褐色～極暗褐色の砂質シルトであるのに対して、柵部分のSP-382-371-365 は黒褐色粘土質シルトである。SP-539 とSP-365 の埋土には炭化物が少量混じる。最初に注目したSP-555-539-382-371-365 は現存で25～40cmと深く、ある程度深さが揃っているが、建物部分の南側のSP-549 は40cm、SP-718 は18cmと一定していない。

遺物は、土師器の壺・土鍋あるいは羽釜の細片が、SP-371-382-538-549-555 から少量出土した。図化できたのは土師器壺だけである (Fig. 12-11～15)。11-13-15は、器面の荒れが著しく、調整の仔細は不明。12-14は内外面ともに横ナデ調整で仕上げられている。15の外底の切り離し方法は不明。11はSP-549、12-13-15はSP-538、14はSP-371 から出土した。

15号掘立柱建物 (SB-15 Fig. 8-12-16 Pl.3-④)

調査区のほぼ中央部F-G 区の境界部に位置する。280-254-632-277-260-237 号小穴 (SP-280-254-632-277-260-237) を柱穴として構成される。梁間1 間、桁行2 間の東西に長い建物である。梁間は東側のSP-632-237 間が1.75mを測るのに対して、西側のSP-280-277 間が1.55mとやや狭い。桁行の全長は3.9～4.0mを測る。西北側に営まれた13号掘立柱建物 (SB-13) と平面形や規模が類似する。

埋土は黒褐色粘土質シルトで、SP-280以外には炭化物の細片が混じる。深さは現存でSP-277 が9cmとやや浅いが、他は15～25cmの間に集中する。柱痕は検出面や土層断面でも確認できなかった。

遺物は建物を構成する柱穴からは出土していない。しかし、SP-280 を切るSP-281 から土師器の細片が出土している (Fig. 12-16)。土師器壺の口縁部破片で、内外面とも横ナデ調整で仕上げられている。推定口径は12.0cmである。

16号掘立柱建物 (SB-16 Fig. 9-12 17-18)

調査区西端のE区に位置し、大半が調査区外にある。331-320-196-324号柱穴(SP-331-320-196-324)を建物を構成する柱穴と考えた。SP 331-320間とSP 320-196間が2.58m、SP-331-324間が1.52mを測る。SP-331-320-196を西側の桁行とし、SP-324と擾乱壆内の柱穴を想定し、これを棟持柱とする2×2間の建物と考えた。

埋土は、黒褐色の粘土質シルト～シルトで、明褐色～褐色の粘土質シルトが10%前後混じる。SP-320-324には炭化物の細片が少量混じる。また、SP-196は現存で11cmとやや深いが、他は20cm前後と深さが揃っている。柱痕は、検出面、断面でも確認できなかった。

SP-198-324-331-334から土師器坏の細片が少量出土している。図化できたのはSP-331出土の2点のみである(Fig. 12 17-18)。17は2次的な火熱を受けて赤変し、器面は荒れが著しく、調整の仔細は不明である。18の外底は糸切り離しのままで、脚部は横ナデ調整を施す。底径は6.3cmと復元したが、細片のためやや不確実である。

17号掘立柱建物 (SB-17 Fig. 9-12-19)

調査区の南西部C-G区の境界部に位置する。302-296-175-163号柱穴(SP-302-296-175-163)を柱穴として構成される梁間・桁行1間の建物である。柱穴の間隔は、SP-302-296間が1.76m、SP-296-163間が1.9m、SP-163-175間が1.73m、SP 175-302間が1.73mを測る。SP-296の位置が北東にかなりずれ、歪んだ平面形をもつ。柱穴の埋土は、いずれも黒褐色粘土質シルトで、炭化物の小片を含む。SP-302が現存で27cmとやや深いが、他は13～16cmと浅めである。SP-175-296の底付近で柱痕跡を確認できた。

出土遺物は、SP-302から土師器坏の口縁部破片が1点出土したのみである(Fig. 12 19)。内外とも器面の荒れが著しく、調整の仔細は不明である。推定口径は12.2cmである。

18号掘立柱建物 (SB-18 Fig. 9)

調査区南西隅のC区、17号掘立柱建物(SB-17)の南側に営まれている。179-162-184-169号柱穴(SP 179-162-184-169)を柱穴として構成される梁間・桁行とともに1間の建物である。桁行はSP-179-162間、SP 184-169が2.45m、梁間の長さはSP-179-184間が1.62m、SP 162-169間が1.5mを測り、東側の梁間が若干短い。片側の梁間の長さが狭くなる点は、13・15号掘立柱建物(SB-13-15)と共通する。

柱穴の埋土は、SP-184がやや粘性がつよいが、基本的には黒褐色シルトである。SP-162-169には褐色～暗褐色粘土質シルトの小さな塊状ブロックが、SP-162-179には炭化物の細片が少量含まれる。現存で深さは、どの柱穴も5～10cmと浅い。柱痕跡は検出面・土層断面でも確認できなかった。

出土遺物はない。

19号掘立柱建物 (SB-19 Fig. 10)

調査区の南部B-C区の17号掘立柱建物(SB-17)の東側に営まれている。23号柵列と重なるが、柱穴は直接切り合ってはいない。266-243-152-138号小穴(SP-266-243-152-138)を柱穴として構成される梁間・桁行とともに1間の小規模な建物である。柱穴の間隔は、SP-266-243間が1.58m、SP-152-138間が1.68m、SP-266-152間が1.62m、SP-243-138間が1.65mを測り、SP-138が南東側にずれて、やや亜んだ方形の平面をもつ。

埋土は、SP-266がややシルトに近いが、基本的に黒褐色粘土質シルトである。鈍い黄褐色～極暗茶褐色シルトの小さな塊状ブロックを10%ほど満遍なく混じる。SP-243-152-138の埋土には、炭化物の細片を少量含む。柱穴の深さは、SP-138が現存で15cmと浅めであるが、他は25～28cmと揃っている。また、SP-138は上部の崩壊が著しいが、底付近でわずかに柱痕を確認した。他の柱穴では、柱痕の確認はできていない。

出土遺物は、SP-138から土師器壺の破片が1点出土したのみである。細片のために図化できなかった。

20号掘立柱建物 (SB-20 Fig. 11-12-20 Pl.4-(3))

調査区南東部のB-F区に位置する。23号柵列(SA-23)に、ほぼ平行する131-120-118号小穴(SP-131-120-118)の小穴列と、対応する126-106号小穴(SP-126-106)を確認し、梁間1間で桁行2間の建物を想定した。今次調査で復元した他の掘立柱建物と比較して、桁行の柱間隔が長めで、掘立柱建物と考えるには無理があるかもしれないが一応、20号掘立柱建物として報告しておく。

梁間はSP-131-126間が1.88m、SP-118-106間が2.14mを測る。桁行の全長はSP-131-118間で5.75m、SP-126-106間で5.9mを測る。柱穴と考えた小穴の大きさは不揃いであるが、現存の深さは15～18cmと一定する。埋土は、SP-126がやや粘性が強めだが、基本的には黒褐色粘土質シルトで、SP-120-118-106の埋土には褐色ないし明褐色シルトの小さな塊状ブロックが5%前後含まれる。SP-131-120-126には炭化物の小片が混じる。

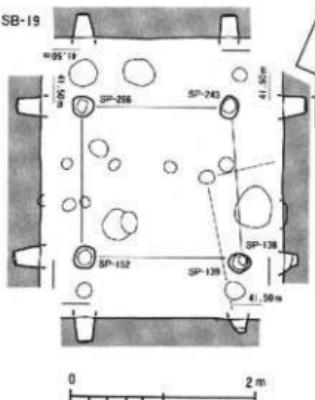


Fig. 10 19号掘立柱建物(SB-19)実測図
(縮尺1/60)

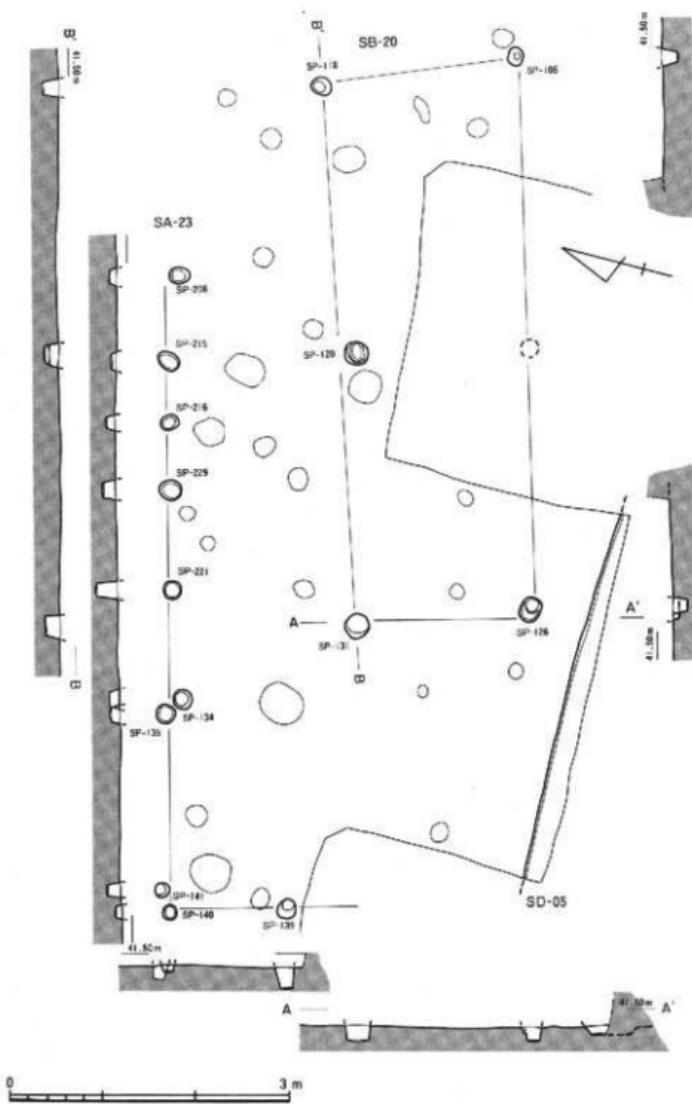


Fig. 11 20号掘立柱建物(SB-20)・23号櫛列(SA-23)・5号溝(SD-05)実測図(縮尺1/60)

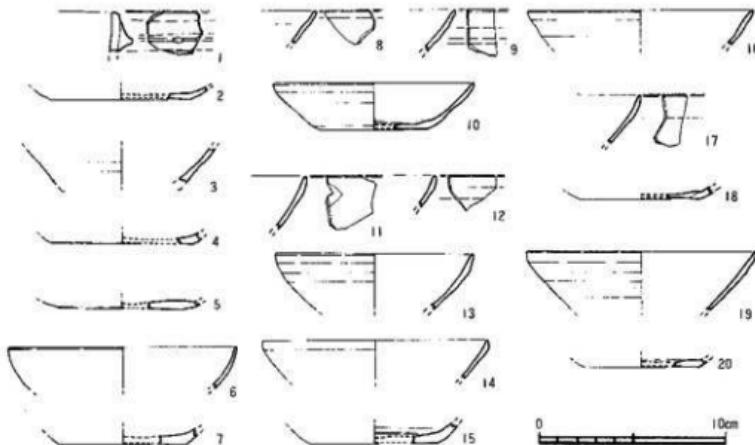


Fig. 12 摂立柱建物出土遺物実測図（縮尺 1/3）

出土遺物は、SP-106 から土師器壺の底部破片が 1 点出土したのみである (Fig. 12-20)。外底には糸切り離しの痕跡がわずかに残る。内面はナデ調整。推定底径は 6.1cm である。

2 溝 (遺構略号 SD)

南北方向にはしる 1・2・6 号溝 (SD-01・02・06)、東西方向にはしる 5・7 号溝 (SD-05・07)、13号摂立柱建物を L 字形に囲む 24号溝 (SD-24) の計 6 条の溝を検出した。後述するように、埋土の状態や他の遺構との配置関係から、それぞれ異なった性格の溝である。出土遺物は 1 号溝を除くと、極端に少なく、細片がほとんどである。報文に加えて巻末の遺構ごとに作成した出土遺物一覧表を参照されたい (Tab. 5・7)。

1 号溝 (SD-01 Fig. 13~27 Pl. 5-6)

調査区の西端部に位置する断面逆台形の溝である。調査区および北側の拡張区で 20m 分を調査した。溝幅は 1.65~2.75m と一定していない。3・4 号水口 (SM-03-04) の南側でもっとも幅が広くなる。溝底は緩やかに南に向かって傾斜する。調査区の北側と南側での溝底の比高差は 30cm 前後である。

1 号溝の周辺は、3・4 号水口や 2 号溝の一部を含めて、III 層の暗褐色や鈍い黄褐色の粘土質シルトの小ブロックを含む灰褐色砂質シルト層で覆われていた。1 号溝および 3・4 号水口の輪郭は、III 層を除去した後に確認できた。当初、III 層は 1 号溝の埋土の最上層部として「褐色粘質土層」、以下に述べる 1 号溝の埋土の上層部分を「上層砂疊層」、中層部分

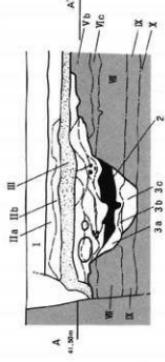
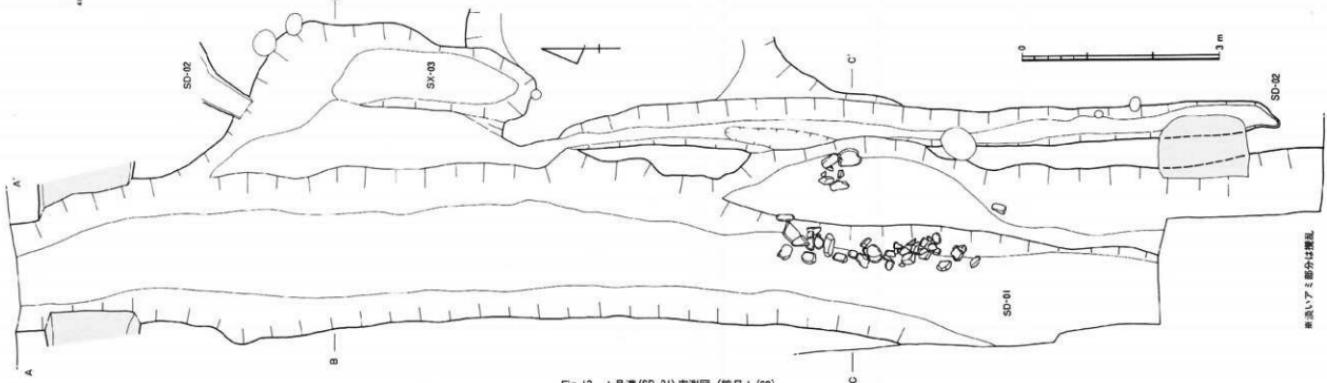


Fig. 13 1号溝(SD-01)実測図(縮尺1/60)

1. 層：五百キロを越す地殻。無酸素環境の底層にしか生息しない微生物土。

2. 層：五百キロを越す地殻。無酸素環境の底層にしか生息しない微生物土。

3. 層：深度1.5km(1.5km=4.2km)の地殻。NOVR(1.4)の粘土シルト層、緑色粘土層、NOVR(1.4)の粘土シルト層。

4. 層：深度1.5km(1.5km=4.2km)の地殻。NOVR(1.4)の粘土シルト層の下部で、緑色粘土層を含む。

5. 層：深度1.5km(1.5km=4.2km)の地殻。NOVR(1.4)の粘土シルト層で、VTR層が存在が強

い。

VI層：表面の岩層は堅い砂岩で、VI層は堅い(0.6m~1.4m)ないし柔軟な

(0.7m~5.6m)の土質で、白色、褐色、茶色の土質が多い。下層には

褐色粘土層(1.7m~3.1m)の粘土シルト層で、白から茶色に變る。

IV層：岩層：褐色(1.7m~3.1m)の粘土シルト層で、白色、茶色の土質が多い。上部

に褐色粘土層(1.7m~3.1m)の粘土シルト層で、褐色粘土層(1.7m~3.1m)の粘土シルト層がほぼ水平面に接する。

V層：岩層の表面は、翠りの青い色で、非常に硬くしてしまった。

VI層：岩層：褐色(1.7m~3.1m)の粘土シルト層で、褐色粘土層(1.7m~3.1m)の粘土シルト層が上へと伸びておらずが面白い。他の場

所では見られない。

III層：褐色粘土層(1.7m~3.1m)の粘土シルト層で、褐色粘土層(1.7m~3.1m)の粘土シルト層。

II層：褐色粘土層(1.7m~3.1m)の粘土シルト層で、褐色粘土層(1.7m~3.1m)の粘土シルト層。

I層：褐色粘土層(1.7m~3.1m)の粘土シルト層で、褐色粘土層(1.7m~3.1m)の粘土シルト層。

解説／アミ部会は誰だ

を「下層砂屑」、下層～溝底部分を「溝底粘質土層」として、遺物を取り上げた。しかし、調査区壁面での上層の堆積状況や遺物など検討を行った結果、III層は1号溝が埋没した跡の窪地に堆積したものと判断した。そこで、1号溝埋土の上層部分の「上層砂礫層」を1層、中層部分の「下層砂屑」を2層、下層～溝底部分の「溝底粘質土層」を3層と読み変えて報告する。III層の下部から集中して土師器・陶器・鏡などが出土した。これらは1号溝に本來ともなう遺物ではないので、後の項で報告する。

溝内の埋土は3層に大きく分層される。上層部分の1層は、褐灰色から灰褐色の砂礫層である。厚さは30～40cmであり、下部には人頭大以上の大きな丸石が集中し、中部は直径2～3mmほどの礫を含む砂礫層、上部は砂質シルト層となる。また、下部ほど含まれる砂礫の粒が大きい。1層上部の灰褐色～暗褐色の砂質シルトは、後述する3号水口の西半部と4号水口にも堆積している。1層は上・中・下部に細分できるが、含まれている礫石の状態から、洪水などで一気に押し流されてきた堆積物と考えられる。遺物はH-a・II-c区から石や礫に混じり集中して出土した。

中層部分の2層は、純い黄褐色の砂屑である。細かく土層断面を観察すると、粒の大きさの揃った薄い砂層が、幾重にも重なり縞状の互層をなす。流水によって堆積した砂層である。この砂層は、1号溝の南半部、D-c区からH-a区南半部分では厚さが数センチと、非常に薄い。1層と2層の間にブロック状にはさまれた部分もみられる。これに対して、北半部のL-a区・H-c区・H-a区北半部分では、10～20cmと安定した層厚で堆積している。3号水口の東半部でも同質の砂層がみられた。また、II-a区の溝幅がもっとも広くなった部分で、東側の壁際に寄り掛かるような状態で偏平な川原石が出土した。遺物は3・4号水口近くのH-c区で集中して出土している。1層と比較すると、遺物の出土範囲は狭く、遺物混りとでも言うような密集した出土状態であった。

下層～溝底部分の3層は、溝の中央に堆積した灰褐色シルトを基本とする。15～35cmの厚さで、その中に褐色の細砂がレンズ状ブロックで含まれる。また、南半部のH-a区北半からH-c区にかけては、溝底の両側に褐灰色・灰褐色・黒褐色の粘土質シルトが部分的に堆積している。H-a区では握り拳大から人頭大の石が列をなし、一部は積まれたような状態で出土した。石列の間で溝底に20cmほど打ち込まれた直径5～7cmの杭の先端部分が検出されている。溝の護岸用の石列であろう。出土遺物は1・2層と比べて少ない。出土範囲はII-c区南半部からII-a区北半部に集中し、2層と比べて南側に若干離れている。

1号溝の埋土、とくに2層と3層の砂礫の堆積状態は、間断なく流水があったことを示している。溝幅が一定していないことも、流水による浸食のためであろう。1号溝は水路

と考えられる。また、2層の砂屑や3層の溝底付近に堆積した粘土質シルトの分布、3・4号水口の位置、H-c区を中心とした遺物の出土分布から、H-c区南半部からH-a区北半部付近には堰が設けられていた可能性が強い。しかし、杭など堰本体の痕跡は確認できなかった。1号溝は、洪水で一気に押し流されてきた1層の砂礫層の堆積により、水路としての機能が失われたと考えられる。

出土遺物は、各層ごとに分けて取り上げた。

(a) 1層出土遺物 (Fig. 14~19 Pl. 9)

1層から出土した遺物には、土師器のほか瓦器壇・東播系須恵器こね鉢・備前焼の壺鉢や壺・龜山焼の大甕・中國産の青磁や白磁などがある。

Fig. 14-1~7、27~29は土師器皿である。1は口径6cm、底径4.2cm、器高1.4cmを測る。胴部の立ち上がりが急な器形である。2~4は1と比べて底径と器高はほとんど変わらないが、口径が7~7.5cmと大きく、胴部の立ち上がりは緩やかである。5~6は1~4と比べて、薄手のつくりで、口径が6.9~7.5cm、底径4.8~5.0cm、器高9.8cm前後と、胴部がかなり緩やかに開く器形をもつ。7は口径が9.8cmの大形の皿で、胴部の開き具合いは2~4と共通する。27は2~3の皿を大形にしたような器形をもつ。かなり厚手のつくりである。28は口縁部周辺に横ナデ調整を施すため、口縁端部がわずかに反る。29は厚手のつくりで、口縁端部を摘むようにして外反させる。

Fig. 14-8~26-30~37、Fig. 15-1~6は土師器壺である。完形に復元できたものはない。口径や口縁～胴部の形状から4種に分類できる。Fig. 14-8-9は口径が11.2~12cmで、口縁部近くがわずかに膨らみ、胴部は直線的にすぼまる。口縁端は丸く仕上げる。ともに薄手のつくりである。10~20は口縁部に横ナデ調整を仕上げ段階に施すため、口縁部下に薄い稜がつく。口縁部付近が膨らみ気味で口縁端部を丸く仕上げたものと、胴部がほぼ直線的に開き口縁端の断面が尖ったものがある。10のように厚手のつくりのものもあるが、薄手のつくりのものが圧倒的に多い。推定口径からみて、10.5~12.0cmの11~17のような小形品と、14cm前後の18~20の大形品がある。21~25は口縁部下が若干厚く、胴部下半がわずかに内湾しながらすぼむ壺である。10~20と比べて、厚手のつくりのものが量的に目立つ。推定口径が10.6~13.2cmのものが多い。数点ではあるが16cmをこえる大形品もある。以外は、数点ずつ例があるだけである。26は厚手のつくりで、胴部上半を横ナデ調整する結果、わずかに窪む。形状的には21~25に近い。

Fig. 14 30~37、Fig. 15-1~6は土師器壺の底部である。外底は回転糸切り離しが施され、板目状の圧痕を残すものもみられる。胴部の開き具合いから、30~32、33~34、35~37

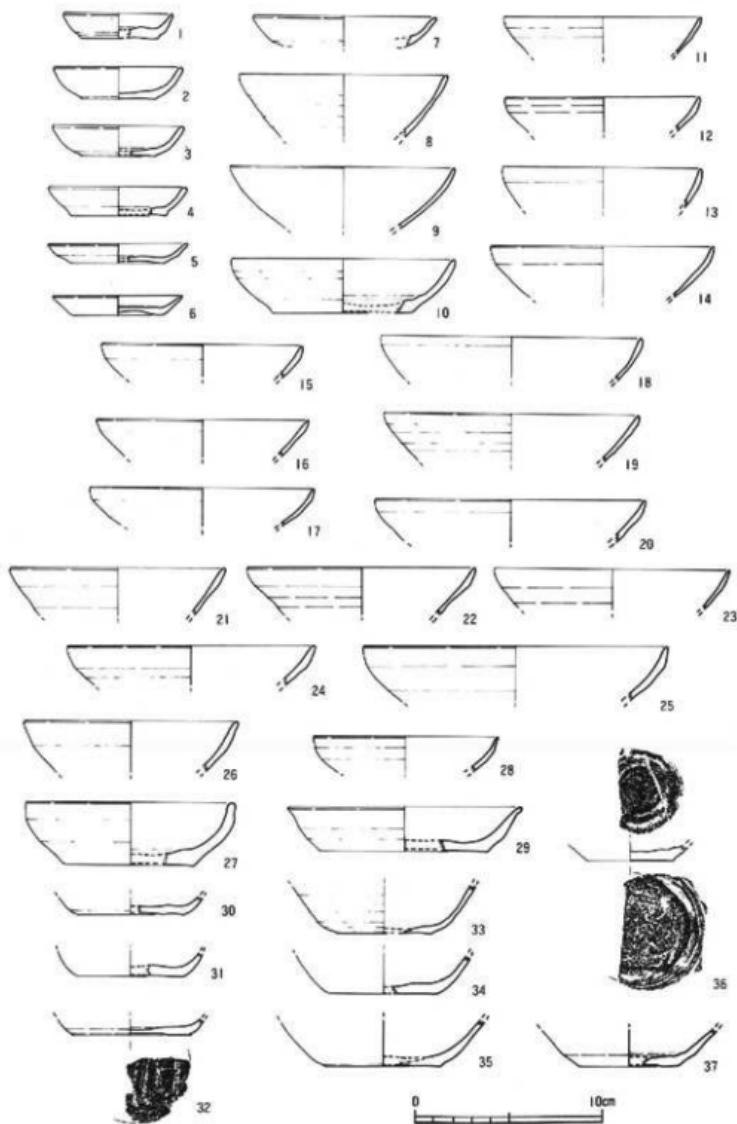


Fig. 14 1号满1层出土遗物实测图 I (缩尺1/3)

・1～4、5・6の4種に分類できる。30～32は胴部の立ち上がりが急で、推定底径が6cm前後に集中する。出土量は少ない。形状的には27のような口縁部がつくと考える。35～37・1～4は胴部の開きが大きく、推定底径は5.3～6.0cmに集中する。出土量はもっと多く、10～20もしくは21～25の口縁部がつくと考える。36は底部側面に平行条線の叩き痕がみられる。5・6は推定底径が8cm前後の大形品で、胴部の立ち上がりがかなり緩やかである。出土量は少なく、10～20もしくは21～25の大形品であろう。

Fig. 15-7～11は瓦器塊である。胴部破片を含めて、10箇点しか出土していない。器表面のケンマ調整が省略され、横ナデ調整で仕上げられている。7は胴部上半で屈曲して、薄い稜が巡る。8は口縁部を摘むように横ナデ仕上げする。9の形状は土師器塊の10～20と共通する。10-11は高台の破片である。器面の荒れが著しい。

Fig. 15-12～19、Fig. 16-1～6は、土師器の三足付き羽釜である。胴部外面には指頭痕が多く残り、煤が厚く付着する。縦が口縁端から若干下がった位置に貼り付けられるFig. 15-13～17、口唇に接して貼付するFig. 16-1～6の2種に分類できる。縦は全体に小さく細いが、前者と比べて後者がより細い。

Fig. 17-1(Pl. 9-2)は、瓦質土器の羽釜である。口縁端に縦を貼り付け、口唇面に細い沈線が巡る。2・3は土師器の土鍋である。わずかに外反する口縁部をもつ。胴部内面に強い横ナデ調整を施すため、口縁部との境界に明瞭な棱がつく。4・5は土師器の茶釜である。4は偏平な胴部に張りの強い縦を巡らす。外面はナデ調整、内面はハケメ調整が施されている。

Fig. 17-6～8、Fig. 18-1・2は東播系須恵器こね鉢である。いずれも胴部内面は磨滅が著しい。6は口縁部を短く逆「く」字形に折り曲げ、横ナデ調整で仕上げる。薄手のつくりで、口唇部が黒変する。7は厚手のつくりで、口縁部上端を摘み上げ、横ナデ調整を施す。口唇面の下方への拡張がわずかにみられる。8は肥厚させながら折り曲げる口縁部をもつ。口唇部には自然釉がみられる。1は粘土を貼り付け、口唇面を上下に拡張する。2の外底は回転糸切り離しの後に板目状圧痕が残される。

Fig. 18-3～5は備前焼の擂鉢である。口唇の平坦面を上下に幅広く拡張させる。胴部内面に3は7条、4・5は8条の放射状の撻引き条線を施す。磨滅が著しい。6は備前焼の大甕の底部である。底部側面はヘラ状工具をナデつける。内面には自然釉が全面にみられる。

7は龜山焼の大甕の口縁部、8は肩部である。同一個体と考えられる。口縁部を「く」字形に折り曲げる際についたと考えられる棒状工具の圧痕が屈折部に残る。胴部外面には格子タタキ痕が残り、内面の晴海波の当て具痕の上から、ヘラ状工具で強いナデ撻引き調整

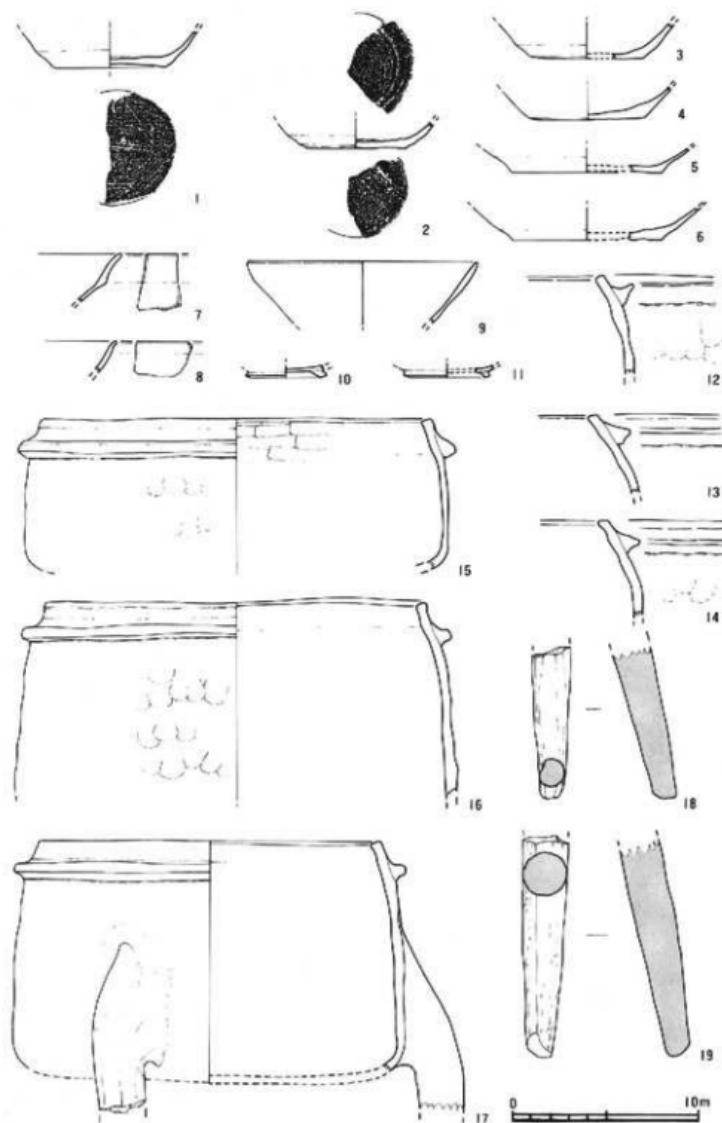


Fig. 15 1号溝Ⅰ層出土遺物実測図2 (縮尺1/3)

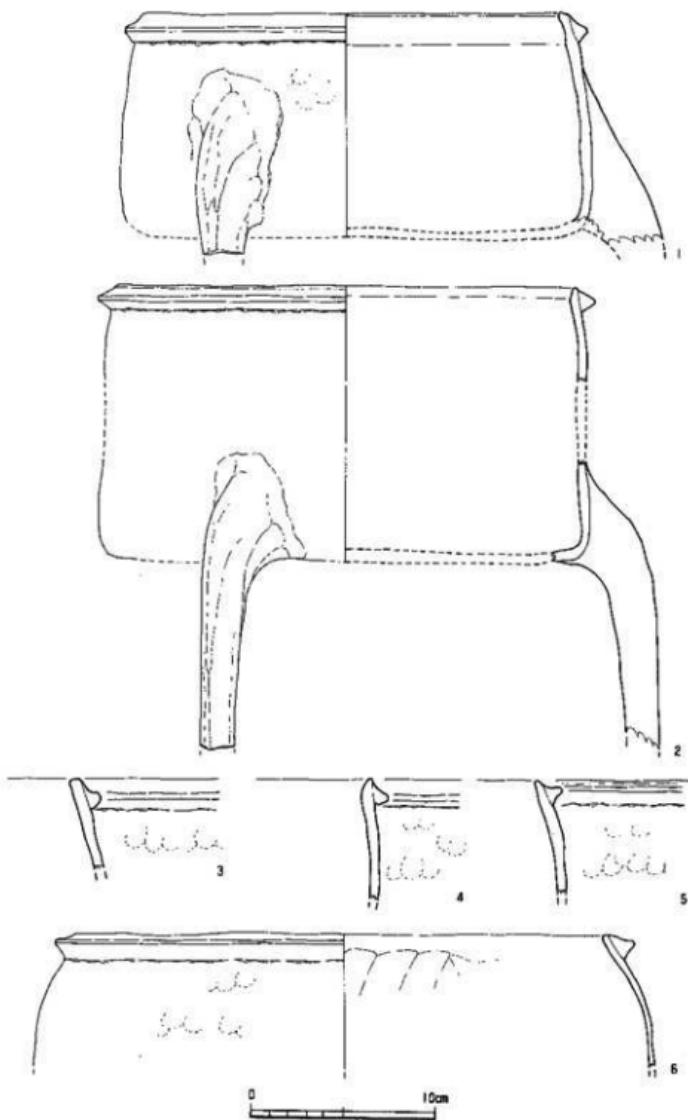


Fig. 16 1号溝1層出土遺物実測図3 (縮尺1/3)

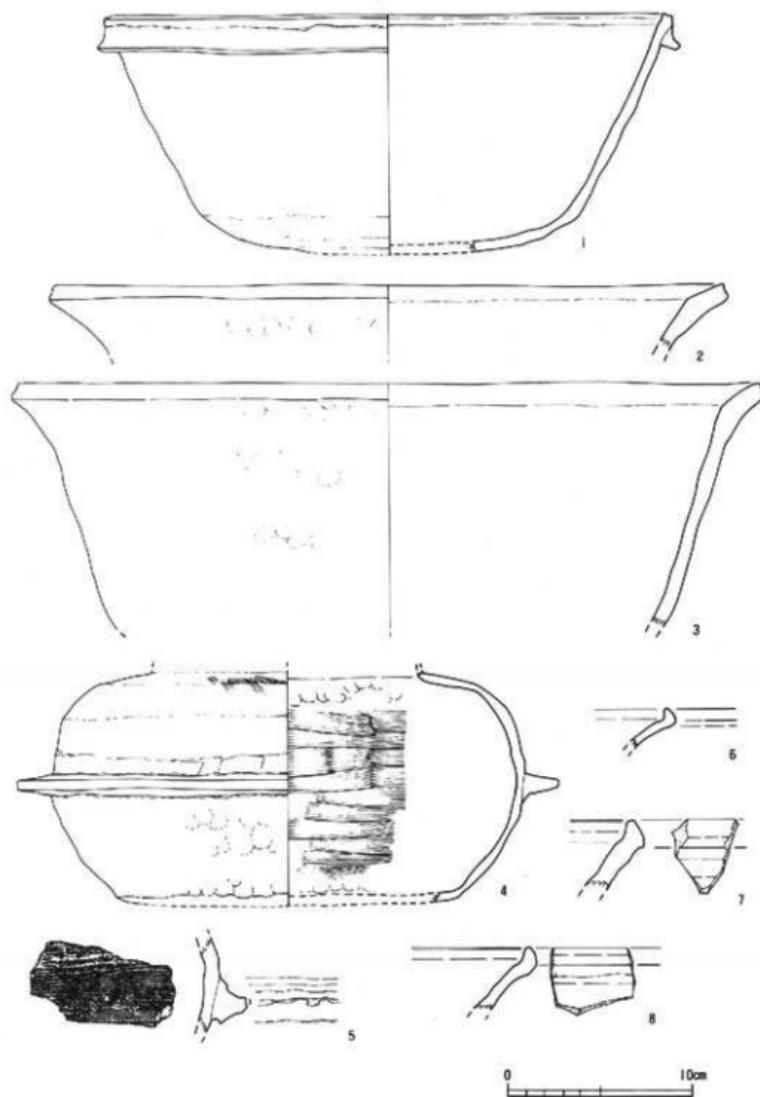


Fig. 17 1号满1层出土遗物实物图4 (缩尺1/3)

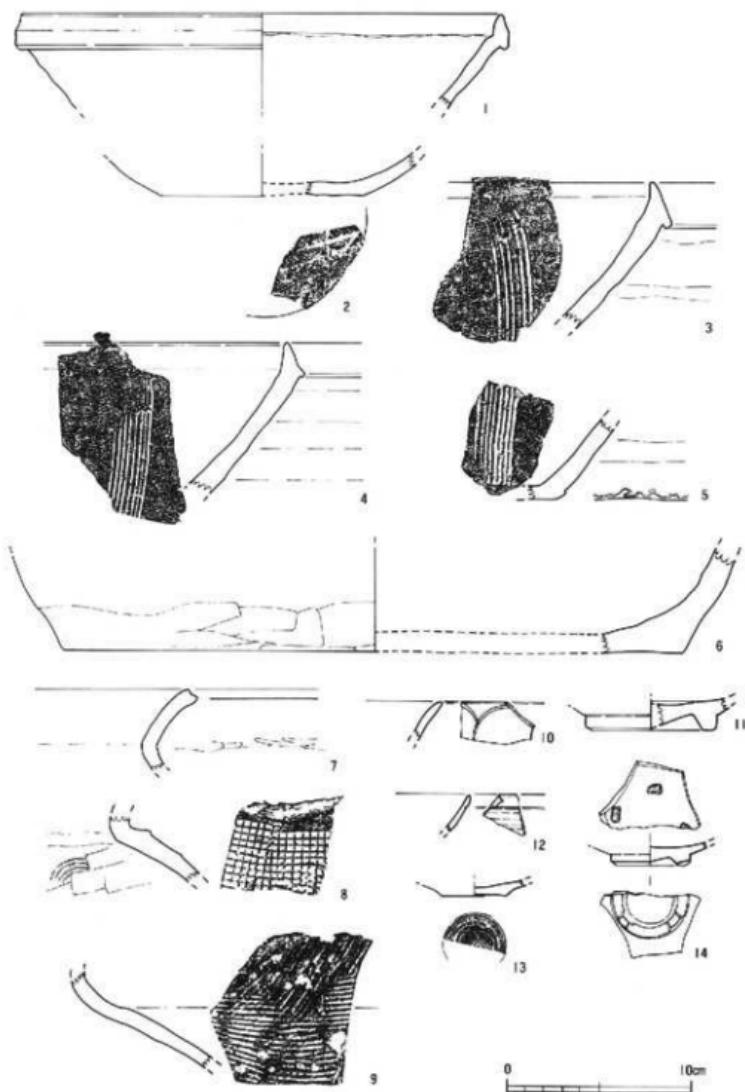


Fig. 18 1号溝1層出土遺物実測図5 (縮尺1/3)

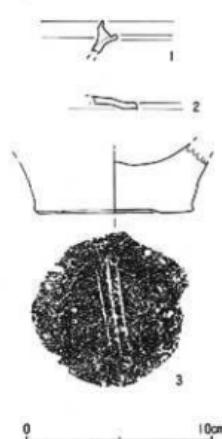


Fig. 19 1号溝1層出土遺物
実測図6(縮尺1/3)

を施す。9は土師質の大壺の肩部である。胸部外面には平行
条線のタタキ痕が残る。内面はナデ調整が施される。

10~11は龍泉窯系青磁碗である。10の胸部には浅い沈線で幅
広の連弁文が描かれる。11は高台部の破片である。内面は施
釉され、見込は輪状に釉が掻き取られ、外面は露胎のままで
ある。壺付きには目砂が付着する。12~14は白磁である。12
は碗とえた。口縁部下を削り、小さな玉縁口縁をつくる。
内外面とも施釉されている。13は底部破片で、内面は施釉、
外面は露胎のままである。外底面には糸切り離し痕が残る。
14は高台付きの皿である。内面は施釉、外面は露胎のままで、
壺付きの4ヶ所を残して削り取る。見込みには4ヶ所に目跡
がみられる。

Fig. 19-1~3は混入品である。器面の荒れが著しい。1~2
は須恵器の壺である。3は弥生時代前期の甕の底部である。
外底面に3条のヘラ書き平行沈線が施文される。

この他、H-c区から銅錢、H-c区から焼粘土塊、D-c区から焼骨の細片、H-a-c区・L-a区・G-d区から馬齒の破片、H-c区・G-d区・L-a区から鐵器が出土した。銅錢は破碎し銭種は不明である。焼骨の細片と馬齒の破片はH-a-c区に集中する。鐵器は筋が著しく器種など細仔は不明である。

(b) 2層出土遺物 (Fig. 20~25 Pl. 9)

2層からは、土師器の皿・壺・羽釜・土鍋のほか、瓦器塊・東播系須恵器こね鉢・備前焼の播鉢や壺・亀山焼の大壺・中国産の青磁や白磁などが出土した。

Fig. 20-1~6は土師器皿である。外底は回転糸切り離しである。1は小片のために法量
は不確実であるが、口径8.9cm、底径8.2cm、器高1.2cmとして復元して図化した。2~4は
推定口径が10cm前後。3~4はやや深めで、胸部の立ち上がりが比較的急で、壺に近い形状
の皿である。5~6は緩やかに胸部が開く。5は口径11.7cm、底径7.8cm、器高2.3cmを測る。
6は口径10.8cm、底径6.5cm、器高2.3cmを測る大形品である。5の口縁部下に浅い不明瞭な
沈線が巡る。

Fig. 20-7~22は土師器壺である。7は胸部上半～口縁部が膨らみ気味で、壺に近い形状
をもつ。8~13は口縁部に横ナデ調整を仕上げ段階に施すため、口縁部下に薄い稜がつく。
8~9は口縁部付近が膨らみ気味で口縁端部を丸く仕上げる。これに対して、10~13は胸部

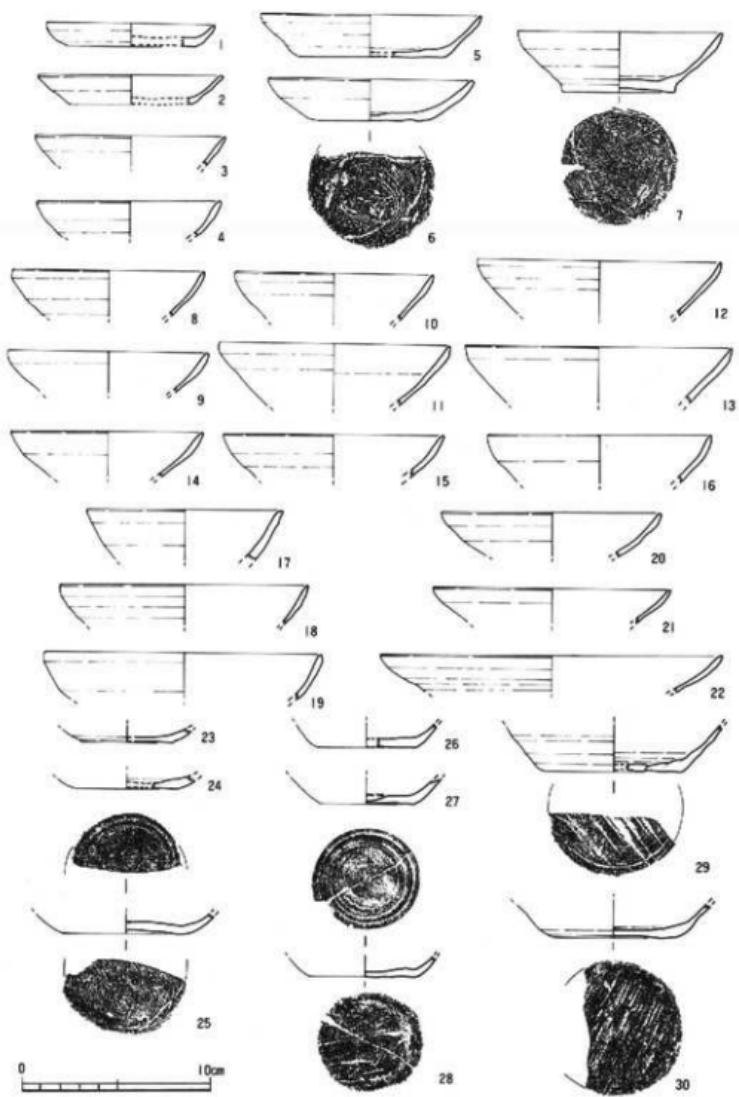


Fig. 20 1号溝2層出土遺物実測図 I (縮尺1/3)

がほぼ直線的に開き、口縁端の断面が尖る。1層と比べて、出土量が相対的に多い。推定口径が10.0~10.5cm、12.0~13.0cm、14cmの3者がみられる。14~16は口縁部下が若干厚く、胴下半がわずかに内湾しながらすぼむ。推定口径は、14が不確実であるが、図化していないものを含め11.5~12.0cmに集中する。17は推定口径が10.4cmを測る厚手のつくりの壺である。18は7と同じく、胴部上半へ口縁部が膨らみ気味で、塊に近い形状をもつが、身が深い。19は胴部下半で緩やかに屈曲する。20~22は口縁部周辺の特徴が8~16に近いが、胴部の立ち上がりが緩やかな身の浅い壺である。推定口径が18cm以上の大形品がある。以上の中で、8~13、14~16の壺の量が多い。

23~30は土師器壺の底部である。推定底径が5cm、6.5~7.0cm前後の2者がある。25~28~30は外底を糸切り離し後に板目状圧痕がつき、内底には同心円状の凹みが数条巡る。

Fig. 21-1~4は瓦器壺の高台部破片である。出土量は胴部破片を含めて10点に満たない。1~3は高台が大きめで、内面は大きく比較的丁寧なナデ仕上げを施す。4の高台は小さく低い。内面はケンマ調整で仕上げられている。

Fig. 21-5~11、Fig. 22-1(Pl. 9-1)は土師器の三足付き羽釜である。1層と同様に、口縁部に貼り付けられる箇は細目で、箇が口縁端から若干下がった位置に貼り付けられる5~10、口唇に接するFig. 22-1の2種に分類できる。前者の出土量が多い。いずれの破片にも、口縁部下の箇以下に厚く煤が付着する。脚は全体に細身である。12は脚の接合方法が観察できる好例である。胴部に粘土板を捻るように貼り付け、脚柱部分を絞って成形し、指頭で細かな整形を施す。

Fig. 22-2~5は瓦質土器の羽釜である。2だけではなく、他の例も三足の脚部がつくと考えられる。土師器と比べて箇は口縁部下から若干下がった部位に巡り、張り出しが強い。箇以下の胴部外面上には煤が付着する。

Fig. 22-6~7、Fig. 23-1は土師器の土鍋である。口縁部が「く」字形に屈曲し、口縁部内面には棱線がつく。6の口縁部は短く肥厚する。いずれも胴部外面には多くの指頭圧痕が残り、煤が厚く付着する。1は膨らみをもつ胴部がつき、底部近くにはヘラ状工具で擦過調整を施す。Fig. 23-2は土師器で、胴部外面に煤が付いていることから土鍋とした。口縁端部に横ナデ調整を行う。内側に摘みだしたような断面をもつ。

Fig. 23-3~7は東播系須恵器こね鉢である。3は薄手のつくりで、口縁端部を上方に摘み上げる。6~7は薄く粘土を貼り付け口縁部を肥厚させる。胴部内面は磨滅が著しい。

8は須恵器の壺で、口頸部が緩やかに外反する。9は常滑焼の壺である。Fig. 24-1の胴部破片と同一個体と考えた。緩やかにすぼまる頸部を短く屈曲させ、上下に拡張させた口

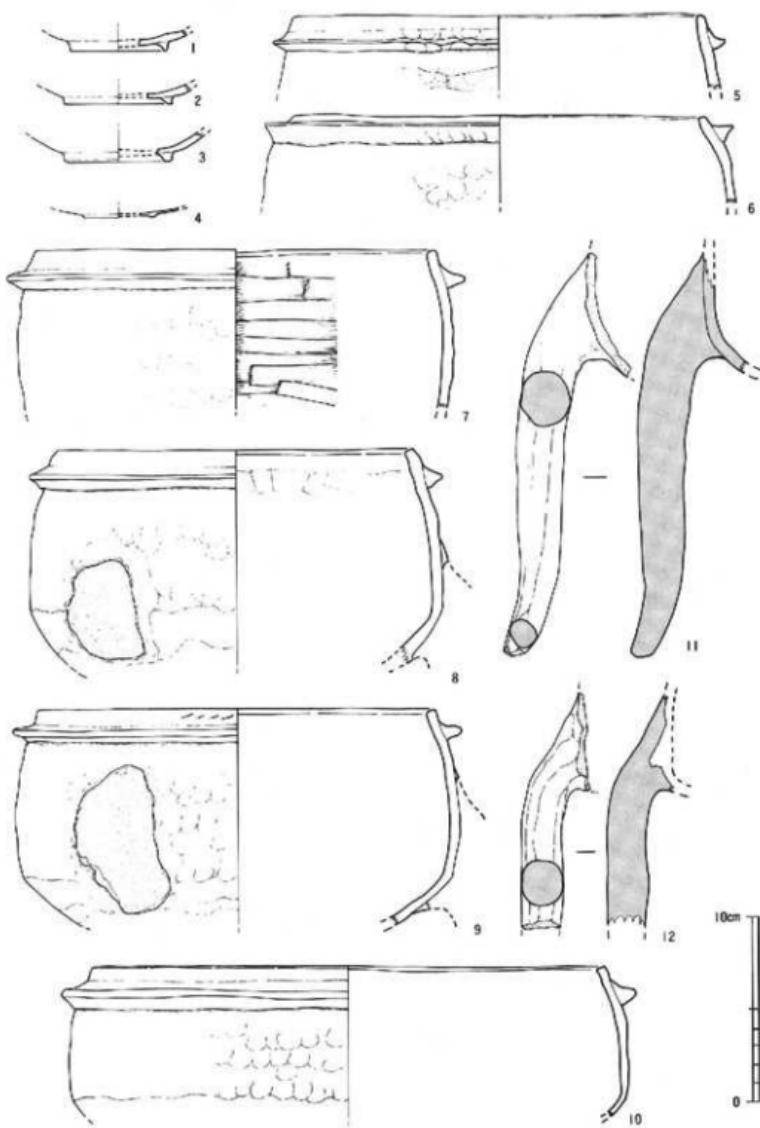


Fig. 21 1号满2层出土遗物实测图 2 (缩尺1/3)

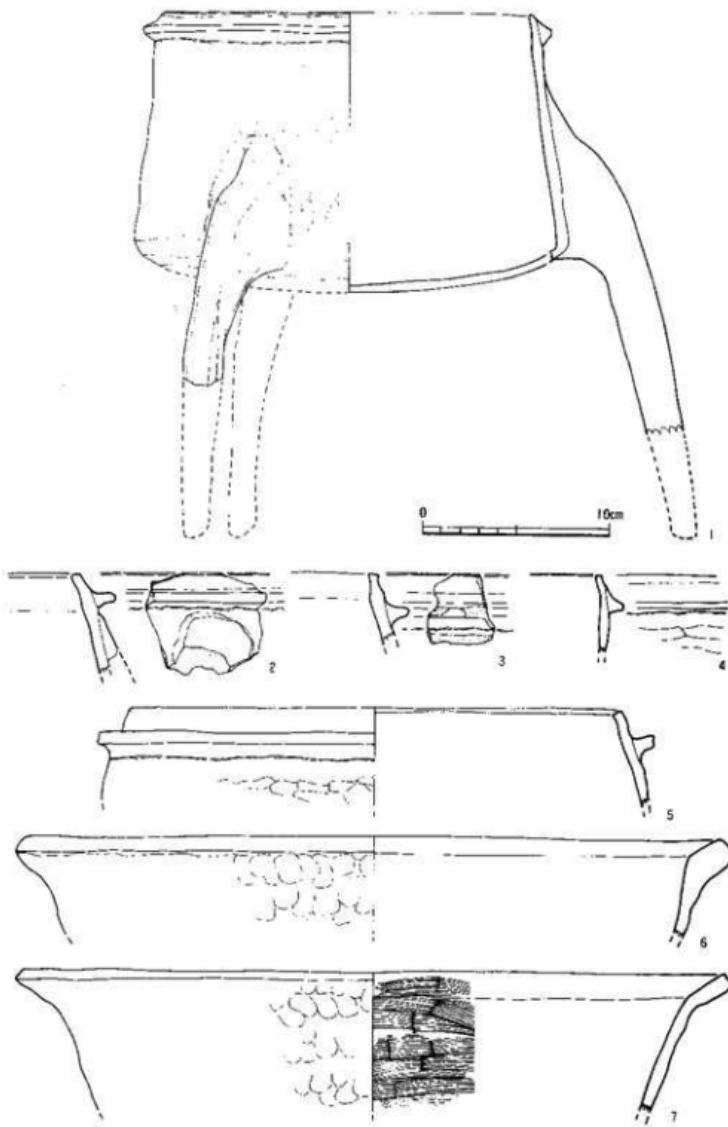


Fig. 22 1号溝2層出土遺物実測図3 (縮尺1/3)

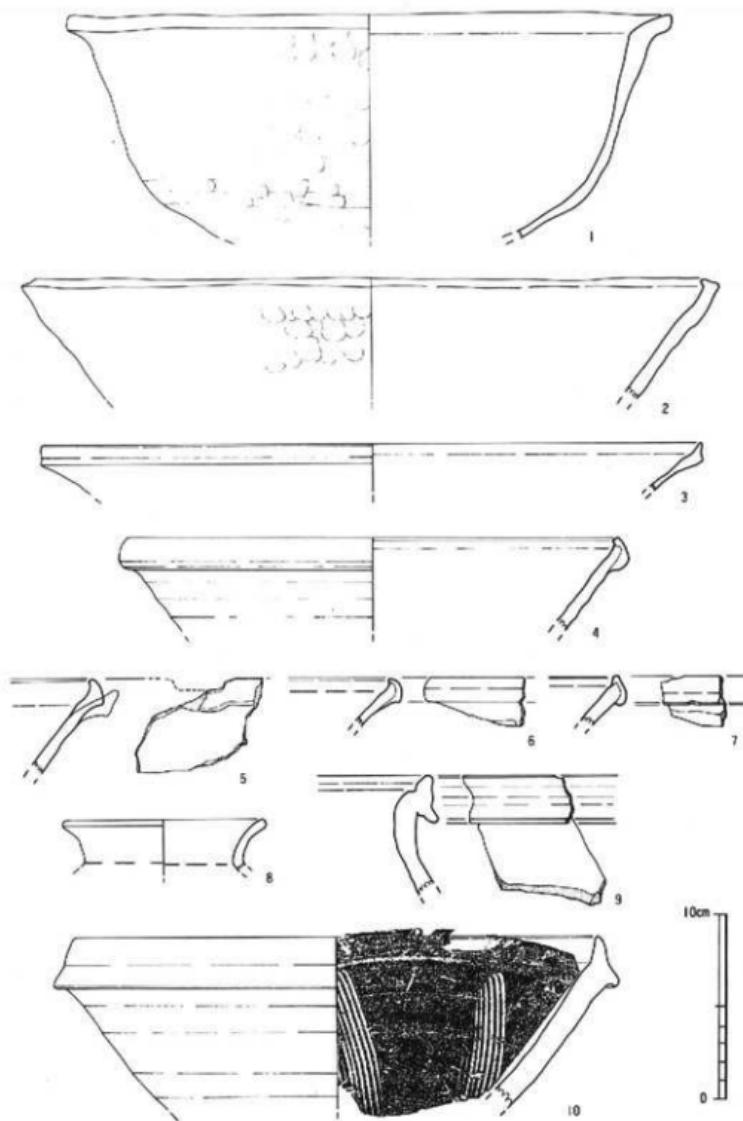


Fig. 23 1号溝2層出土遺物実測図4 (縮尺1/3)

縁部がつく。1の肩部には自然軸がかかる。10は備前焼の擂鉢である。口縁部を上下に拡張する。胴部内面には、上方から下方へ向けて、櫛描きの平行条線を放射状に施す。条線は8条を1単位とする。Fig. 24-2は須恵器の蓋の底部破片であろうか。外底は回転糸切り離しのままである。内底面には指頭による圧痕が残る。

Fig. 25-1は亀山焼の大壺である。指で「く」字形に強く折り曲げた口縁部をもつ。

胴部外面は格子目

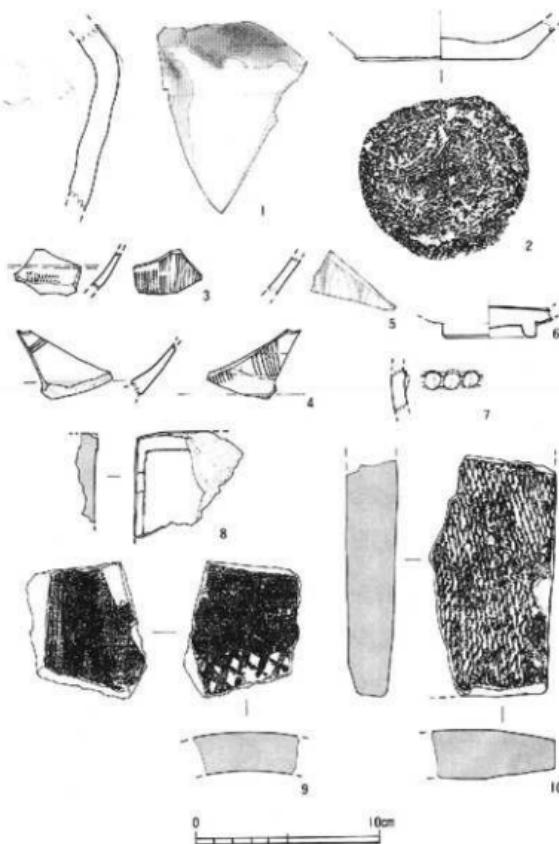


Fig. 24 1号溝2層出土遺物実測図5 (縮尺1/3)

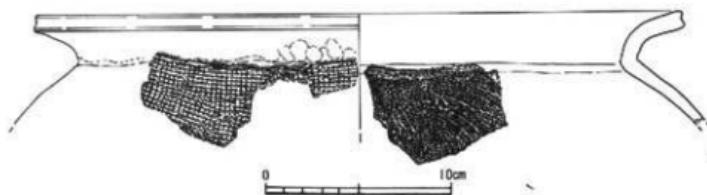


Fig. 25 1号溝2層出土遺物実測図6 (縮尺1/3)

タタキ、内面は晴海波の当て具痕跡の上にナデ調整が施される。

この他、H-c区から馬齒の細片が出土している。

Fig. 24-3-4は同安窯系青磁碗である。外面には櫛齒状工具で平行条線、内面には押捺による列点文が施文される。4の胴部下半は露胎のままである。5・6は胞泉窯系青磁碗である。5は胴部破片で、細身の連弁文を描く。6は高台部の破片で、厚い釉を施し、高台疊付き～外底は露胎のままである。外底は回転ヘラ切りを行う。

Fig. 24-7は縄文時代晩期末～弥生時代初頭の刻目凸帯文系土器の胴部破片で、混入品である。凸帯の刻目は爪で施されている。

8は赤色頁岩製の方形の硯である。同一破片が1層でも出土している。
9・10は平瓦の破片である。9の外面には斜格子のタタキ目が施され、内面には布圧痕が残る。10は外面に縄目タタキ目を施し、内面はナデ調整する。端部は直線的に面取りされ

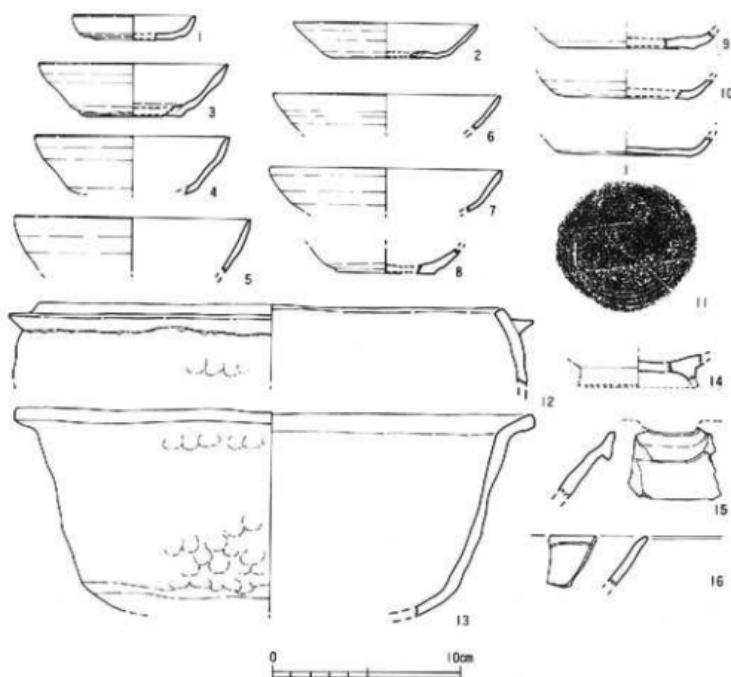


Fig. 26 1号溝3層出土遺物実測図 (縮尺1/3)

ている。

(c) 3層出土遺物 (Fig. 26-27 Pl. 9-10)

3層出土遺物は、1・2層と比べ量が少なく、図示したものが出土遺物の大半である。

Fig. 26-1・2は土師器の皿である。1は推定口径6.6cm、底径4.0cm、器高1.3cmの小形品である。胴部上半を折り曲げ気味に立ち上がる。2は胴部の開きが大きく、口径9.8cm、底径5.6cm、器高1.9cmを測る。薄手のつくりである。

3～7は土師器の壺である。3・4は口縁部下が若干厚く、胴下半がわずかに内湾しながら

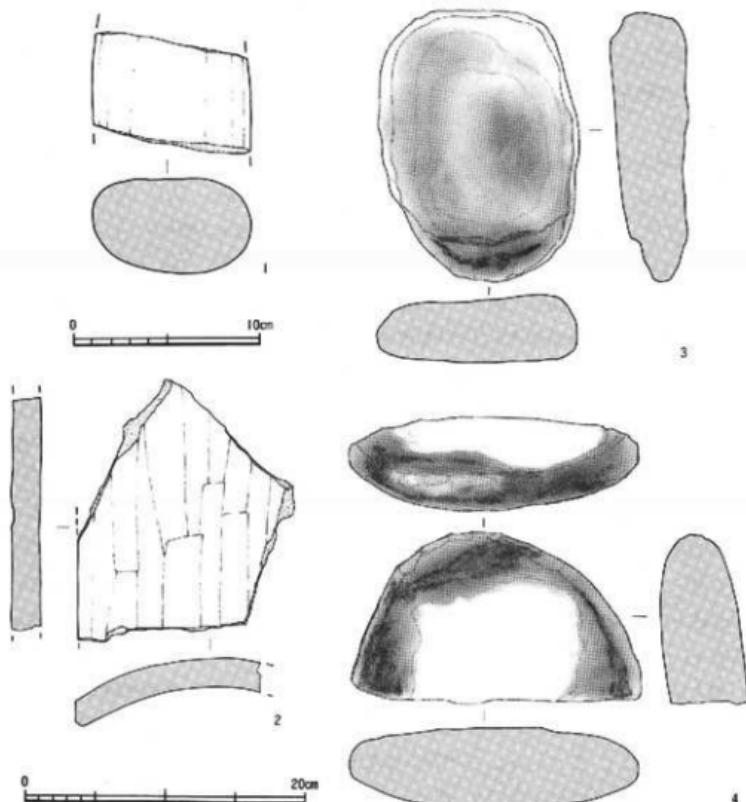


Fig. 27 1号溝3層出土遺物実測図2 (縮尺1/3・1/4)

らすばむ。比較的厚手のつくりで、3は口径10.1cm、底径5.4cm、器高2.8cm、4は口径10.3cm、器高3.3cm前後に復元できる。5は断面形が3・4と同じであるが、胴部の立ち上がりが急で、塊に近い形状をもつ。推定口径12.5cm。6は胴部が直線的にすぼまり、推定口径は12.1cmである。7は胴部下半が不明瞭な稜をもって屈曲してすぼまる。8～11は土師器壺の底部である。8は底径が5.1cmの小形品、9～11は7cm前後を測る。11の外底面には回転糸切り離し痕の上に板目状圧痕が残る。

12は土師器の羽釜で、三足の脚がつくと考える。口縁端部から少し下がった部位に断面三角形の瘤を巡らせる。瘤以下の胴部外面には煤が付着する。13は土師器の土鍋である。口縁部を指で屈曲させるために内面には薄い稜線がはしる。胴部は指頭で荒調整を行い、ナデ調整で仕上げを施す。

14は土師器の塊の高台部破片である。器面は他の土師器と比べて、荒れが著しく、混入品と考えた。

15は東播系須恵器こね鉢の片口部分の破片である。内面の磨滅が著しい。16は同安窯系青磁碗である。口縁部内面に浅い沈線がみられる。

Fig. 27-1～4は、H-a区の溝底で検出した握り拳大から人頭大の護岸用の石列の礫と、石列の間から出土した遺物である。1は弥生時代の始刀石斧である。刃部・基部を欠損する。2(Pl. 9-9)は平瓦の破片で、図示した上面はヘラ状工具で余分な粘土を削り落とし、下面には目の細かな布目圧痕が残る。3(Pl. 10-18)は楕円形の偏平な花崗岩の自然礫である。図示した下端部を中心として炭化物が厚く付着する。4(Pl. 10-17)は同様の自然礫を半分に打ち割る。図示した上端部には細かな擦れ跡がみられ、これを中心として炭化物が厚く付着している。土鍋や三足が付かない羽釜を使用する際に、支脚として用いられたのであろう。

2号溝 (SD-02 Fig. 28-29-1～7 Pl. 6-①-③)

調査区西側のC・G・K区に、1号溝と平行して3号水口(SM-03)を挟んで南北方向にのびる溝である。南端部は途切れているが、これは遺構検出面を掘り下げすぎたためであり、調査区南壁のIVa層の下部で延長部分を確認した。溝幅は50～80cm、深さは現存で10～15cmを測る。

埋土は暗茶褐色ないし黒褐色の粘土質シルトである。部分的に純い黄褐色粘土質シルトの塊状ブロックと、薄いレンズ状の細砂ブロックとを含む。細砂ブロックは紡錘形で、流水があったことを示す。しかし、1号溝とは異なり、流水が恒常にあったとは言い難い。溝底は部分的に凹凸があるものの、緩やかに南にむかって傾斜し、調査区南北壁での溝底

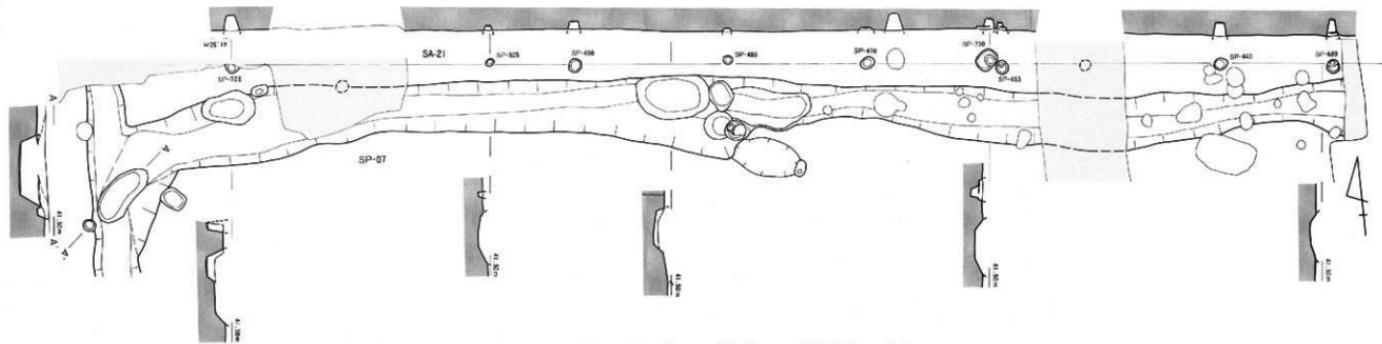
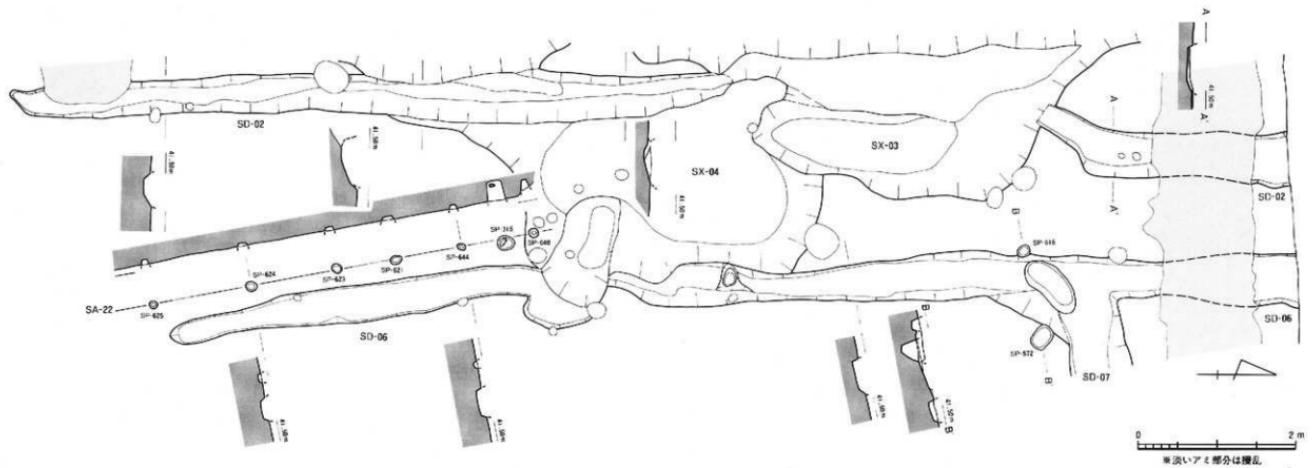


Fig. 28 2・6・7号溝(SD-02・06・07)、21・22号橋列(SA-21・22)実測図(縮尺1/60)

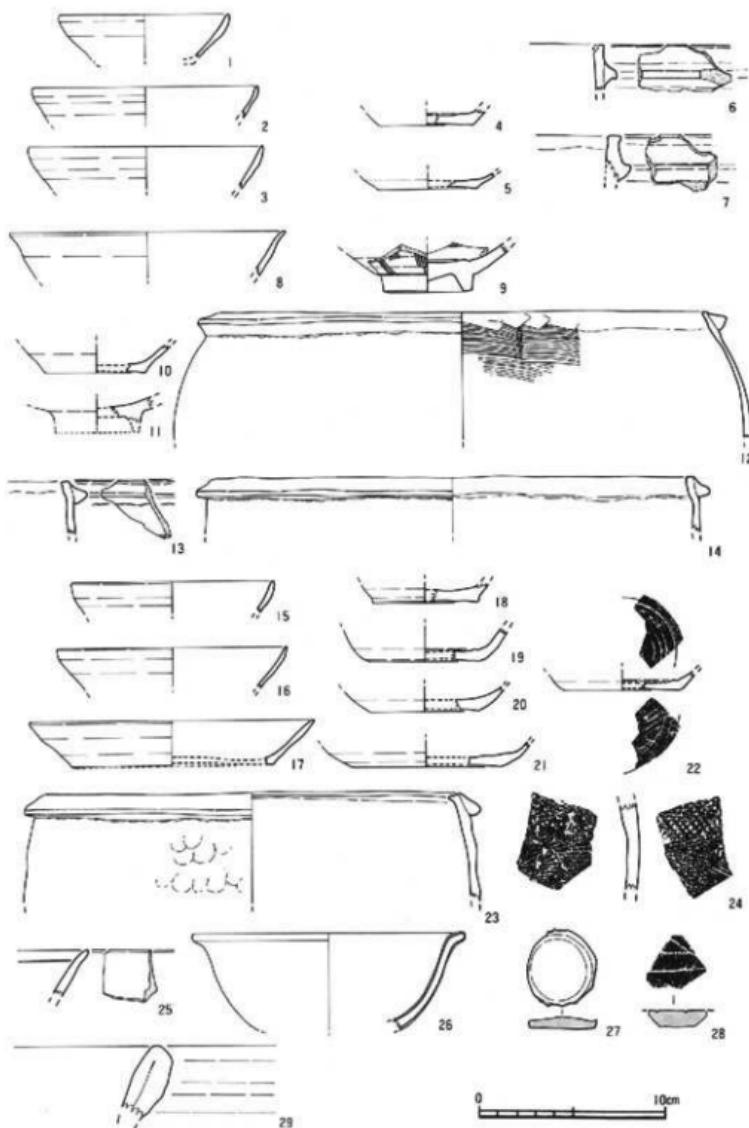


Fig. 29 2・5・6・7号満出土遺物実測図 (縮尺 1/3)

の比高差は10cm未満である。

3号水口と埋土が共通することから同時併存と考えた。4号水口との関係は、土層の状態から判断できない。しかし、後述するように、4号水口と7号溝は同時併存の遺構と考えられ、水口と溝の関係から言うと2号溝は4号水口に先行すると考えられる。G-b区では1号溝埋土の2層の鈍い黄褐色の砂層が2号溝を覆っていた。これは1号溝埋土の2層の砂層が堆積した段階に、2号溝の一部が削られたものと判断した。埋土の状況と1号溝・3号水口との関係から、2号溝は1号溝にともなう枝水路と考えられる。

出土遺物はC-d・G-b区から少量出土したにすぎない(Fig. 29-1~7)。1~3は土師器壺の口縁部である。1・3は口縁部下が若干厚く、胴下半がわずかに内湾しながらすぼみ、口縁端部を尖り氣味に仕上げる。比較的厚手のつくりである。推定口径は1が9.0cm、3が12.5cmである。2は比較的薄手のつくりで、壺に近い器形と考えられる。推定口径は11.9cmである。4は土師器の皿、5は壺の底部である。外底面には回転糸切り離しの痕跡が残る。6・7は羽釜の口縁部である。6は土師器、7は瓦質土器である。ともに口縁部のやや下方に断面「コ」字形の籠を貼付する。6の箇部より下方には煤が薄く付着する。

5号溝 (SD-05 Fig. 11-29-8~12 Pl. 8-(2))

B-C区で溝の一部を確認した。A区では確認できず、C区の調査区拡張部分で、幅60cmの浅い溝を検出した。握り拳大や偏平な20×30cmほどの円礫や角礫が散かれていたが、埋土はB-C区で検出した溝と同質で、5号溝の一部と考えた(Pl. 8 (2))。5号溝周辺は遺構検出時に平面形を確認するために、若干深めに削っているために、現存での深さは10cm以下である。溝幅はC区の拡張部分で50cm前後である。埋土は暗茶褐色シルトで、薄いレンズ状の細砂ブロックを部分的に少量含む。A区の拡張部分では検出されておらず、南北方向に屈折し、埋土の状況から流水があまりなく、前述した掘立柱建物群を区画するための溝と考えた。

出土遺物は、B区部分では少量出土したにすぎない(Fig. 29-8-9)。8は土師器壺の口縁部である。口縁部をわずかに外反させる。9は同安窯系青磁碗である。胴下半へ高台部の破片で、内面は淡いオリーブ色の釉がかけられ、外面は露胎のままである。内外面に櫛齒状工具で文様を描く。外面は回転ヘラケズリが施される。

C区の調査区拡張部分では比較的まとまって遺物が出土している(Fig. 29-10~12)。10は土師器の壺の底部で、外底は回転糸切り離しのままである。推定底径は5.4cm。11は青磁碗の高台部である。溝の上部から出土し、後世の混入とも考えられる。12は土師器の三足付きの羽釜と考えた。口縁端部に断面三角形の細目の籠を貼り付ける。籠以下の胴部外面

には煤が付着する。

6号溝 (SD-06 Fig. 28-29-13-14 Pl. 6 ①)

調査区西部のC-G-K区で南北方向に、1・2号溝(SD-01-02)とほぼ平行してのびる幅35~60cmの溝である。調査区の南半部は遺構検出時に、各遺構の輪郭を確定するため掘り下げすぎて、2号溝と同様に南端部分が途切れている。しかし、調査区南壁断面のIVa層の下層で延長部分を確認した。

調査区北半部のK-b区で7号溝(SD-07)と接しており、当初、切り合い関係を考えたが、埋土がほぼ共通することから同時期のものと判断した。また、4号水口(SM-04)東半部と4mほどが切り合うが、これは4号水口の壁が崩れたためであり、本来は4号水口南東隅の土壤状の窪みに繋がっていたものと考えられる。

埋土は暗茶褐色ないし黒褐色の粘土質シルトで、暗色ないし褐色の細砂が薄いレンズ状のブロックが含まれ、流水があったことを示している。しかし、細砂ブロックの量は、2号溝と同じく、1号溝と比べて少ない。溝底は北から南に向かって緩やかに傾斜するが、調査区の南北壁での比高差は10cm未満にすぎない。流水があつても、量も少なく間歇的な流れであったと考えられる。この流水は、北からは4号水口へ落とされ、南へさらに導水されたのであろう。その場合、6号溝と4号水口の接点付近に小規模な堰を設けられた可能性も考えたが、浅い小穴を検出したにすぎない。

遺物は、南端近くのG-b区と、7号溝と6号溝が繋がるK-b区から出土した(Fig. 29-13-14)。13はG-b区、14はK-b区から出土。ともに土師器の羽蓋の口縁部である。13-14とともに口縁端部にはほぼ接して断面三角形の縫を巡らす。縫以下には煤が薄く付着する。他に土師器の皿もしくは壺の胴部破片がある。

7号溝 (SD-07 Fig. 25-29-15~29 Pl. 6-④)

調査区北部のI-J-K区に、東西方向にのびる幅35~80cmの溝である。西端は6号溝(SD-06)と繋がり、調査区東壁近くでは新しい櫛乱塙によって切られているが、さらに東へのびると考えられる。しかし、今次調査区から東へ6.5mほど離れた1次調査II区では、7号溝の延長部分は確認されておらず、北もしくは南へ折れ曲がるのであろう。

埋土は6号溝(SD-06)と共通した暗茶褐色ないし黒褐色粘土質シルトで、流水による堆積物である細砂の薄いレンズ状ブロックが部分的に混じる。しかし、その量は6号溝と比べてより少ない。埋土の質から6・7号溝は同時に併存していたと判断できるが、その機能は5号溝(SD-05)と同じく、住居域を区画するための溝と考えた。

西端の6号溝との接続部には土壤状の窪みがあり、J-b区にも数ヶ所に窪みがみられる。

これらは、溝底付近で検出できたものである。性格については明らかでない。また、I b 区では26号土壙 (SK-26) と662号小穴 (SP-662) と切り合う。切り合い関係から26号土壙に7号溝が先行する。662号小穴は同質の埋土のために、時間的な先後関係は不明である。

遺物は J 区から比較的まとまって出土した (Fig. 29 15~29)。15・16は土師器の环である。15は口縁部下が若干厚く、胴部下半がわずかに内湾しながらすぼまる。16は口縁部に横ナデ調整を仕上げ段階に施すため、口縁部下に薄い稜がつく。17は大形の皿である。推定口径15.2cm、底径10.8cm、器高2.4cmほどである。18~22は环の底部で、いずれも回転糸切り離しの痕跡が外底面にみられる。22は板目状圧痕が重なる。23は土師器の羽釜の口縁部である。三足の脚がつくと考えられる。口縁端部に接して下垂する断面三角形の籠がめぐる。外面全面に薄く煤が付着している。24は須恵器の胴部破片である。器形は不明。外面には細かな斜格子と平行条線のタタキ痕、内面には晴海波の当て具痕が残る。25・26は龍泉窯系青磁碗の口縁部である。25は内面に沈線が1条めぐる。26はオリーブ色の厚い釉を施す。この破片が出土した直下から694号小穴 (SP-694) が検出された。そのため、7号溝にともなうか確定できない。この他、龍泉窯系青磁碗の胴部破片2点が出土している。29は備前焼の大壺の口縁部である。27は土師器の皿の底部部分を円盤状に加工したものである。側縁の2/3ほどが削られている。28は砂岩製の臼の破片である。強い火熱を受けて、表面の荒れが著しい。

24号溝 (SD-24 Fig. 8 Pl. 4-①・②)

G 区に位置する。部分的に途切れながら13号掘立柱建物を「L」字形に囲む。幅は10~20cmを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調として、暗褐色や鈍い黄褐色の粘土質シルトの小さな塊状ブロックを少量含む。埋土の質は、これまで報告してきた1~7号溝よりも、小穴の埋土と共に通する。配置関係から13号掘立柱建物にともなう小溝と考えた。

遺物は出土していない。

3 土壙 (遺構略号 SK)

調査区の各所で浅い窪地状の土壙を検出したが、人為的に掘られたと判断できるものは3・4・8・25・26号遺構の5基である。ただし、3・4号遺構は1号溝にともなう水利施設の一部と判断した。他の3基の土壙は性格が不明な遺構である。3・4号遺構は次項で水口として報告する。8・25・26号遺構から出土した遺物は少なく、細片がほとんどである。報文に加えて、巻末の遺構ごとに作成した出土遺物一覧表を参照されたい (Tab. 8)。

8号土壙 (SK-08 Fig. 8-30 Pl. 7-①・②・9-3-4)

調査区北東部のJ-b区に位置する。8号土壌を囲むように11号掘立柱建物(SB-11)が配置されており、外部施設と考えた。

土壌の平面形はほぼ円形で、直径1.19~1.2mを測る。埋土は、黒褐色粘土質シルトに、褐色ないし鈍い黄褐色の粘土質シルトの大きめの塊状ブロックが多量に混じる。

土壌の埋土上部には人頭大以上の石が多数詰め込まれたような状態で出土した。その下層から備前焼の大甕の口縁部や石臼などの破片が出土した。これらの遺物の下部には厚さ2~3cmの灰層がみられた。灰層の直下がほぼ壌底と考えられるが、埋土の観察に失敗して、かなり深く掘り下げすぎてしまった。遺構実測図では灰層の直下を壌底面として復元的に図示している。

出土遺物には備前焼の大甕と石臼が2点ある(Fig. 30-1~3)。1(Pl. 9-3)は備前焼の大甕の口縁部破片である。口縁は内湾させながら引き伸ばして外側に折り曲げて玉縁口縁に仕

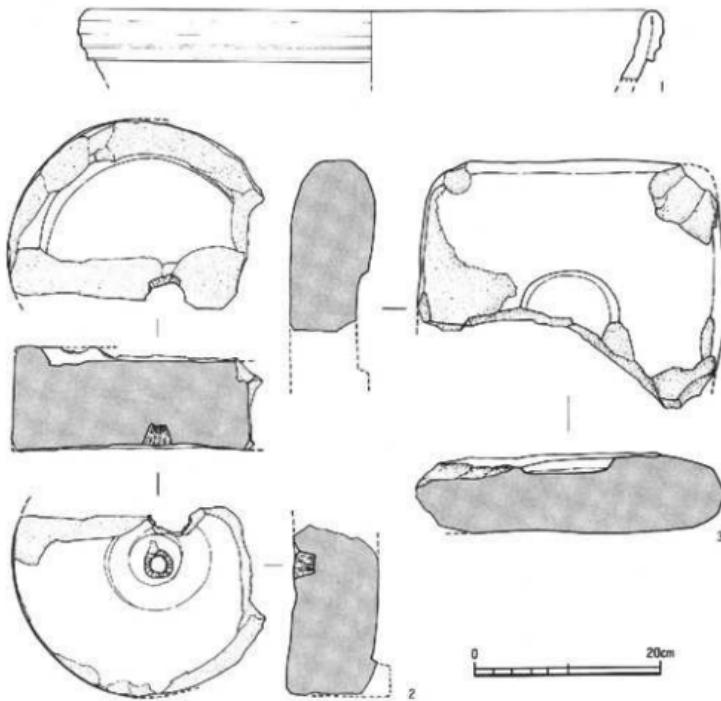


Fig. 30 8号土壌出土遺物実測図(縮尺1/6)

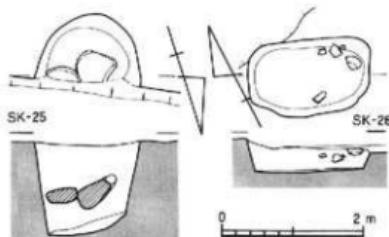


Fig. 31 25-26号土壤(SK-25-26)実測図
(縮尺1/40)

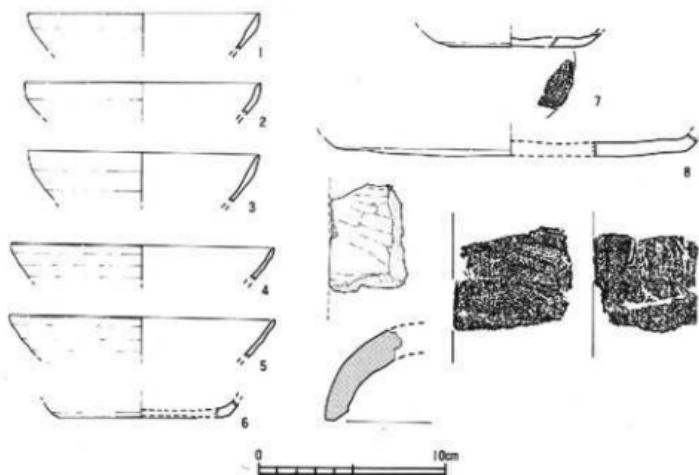


Fig. 32 25-26号土壤出土遺物実測図(縮尺1/3)

上げている。口縁外面には幅広の凹線を巡らせる。2 (Pl. 9-4) は硬質砂岩製のすり臼である。軸受けの孔には縦方向の鑿痕が明瞭に残り、その周囲には帯状に浅い窪みが巡る。上面は傷みが著しい上に、欠損部分が多い。3 は砂岩製。約1/3を欠損する。隅丸方形に加工され、中央に円形の窪みがみられる。

25号土壤 (SK-25 Fig. 31-32-1~6 Pl. 7-③)

調査区南側のC区に設けられた拡張部分に位置する。北半部は調査区外にあり、完掘していない。円形の土壤と考えられ、検出面で直径0.75m前後を測る。壙底は東へ緩やかに傾斜する。埋土は黒褐色粘土質シルトで炭化物が少量混じる。壙内の中位で偏平な自然石が2個出土した。

出土遺物には、土師器の壺・羽釜、束縛系須恵器こね鉢がある。いずれも細片化し、図化できたのは土師器壺の6点のみである(Fig. 32-1~6)。1~3は推定口径が12cm前後、4・5は14cm前後を測る。器面は内外面ともに荒れているが、部分的に横ナデ調整の痕跡が観察できる。6は底部破片で、外底面は糸切り離しのままである。図示していないものは、いずれも胸部の細片である。

26号土壤 (SK 26 Fig. 31-32-7~9 Pl. 7-④)

調査区北東隅のI-b区で検出した土壤である。7号溝(SD-07)を切っている。平面形は隅丸長方形で、検出面での長軸長0.87m、短軸長0.55mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトである。

壺底から5~10cmほど離れ、東側から流れ込んだような状態で土師器壺、羽釜もしくは土鍋の底部破片、瓦片などが出土した(Fig. 32-7~9)。7は土師器壺の底部である。外底面には糸切り離し痕が残る。内面は横ナデ調整で仕上げられている。8は羽釜もしくは土鍋の底部である。2次的な強い火熱を受けたためか灰緑色に変色している。9は丸瓦の側縁の破片である。側縁周辺はヘラ状工具で面取りが施されている。外面はヘラ状工具で搔き取ったような調整痕、内面には布圧痕が残る。

4 水口 (給排水施設 遺構略号 SM)

1号溝の東側で、浅い皿状の土壤を検出した。埋土には流水によって堆積したと考えられる薄いレンズ状の細砂ブロックが含まれ、1・2・6号溝(SD 01-02-06)との配置関係も考慮し、給排水施設の一部である水口と判断した。3号水口が4号水口より時間的に先行する。巻末に遺構ごとの出土遺物一覧表を付している(Tab. 9)。

3号水口 (SM-03 Fig. 33-35-1~7 Pl. 7-⑤)

調査区西北部のK-b~G b区に位置する。北側から2号溝(SD-02)が西にカーブしながら連結する。南側も2号溝と繋がると考えられるが、4号溝(SD-04)に切られ直接繋がらない。壺底の中央には南北方向にわずかに高まりがのびるが、ほぼ平坦面をなす。埋土は東側の壺底付近に1号溝の2層の砂層と同じ鈍い黄褐色砂層が10cm前後堆積し、その後に西側を中心として1号溝1層の妙螺旋層が覆う。さらに最上層に1号溝上面でみられたIII層の灰褐色砂質シルト層が3号水口付近まで広がる。埋土の状態から、1号溝に2層の鈍い黄褐色砂層が堆積した時期には水口として機能していなかったと言える。

遺物は西側に堆積した砂疊層中から出土した。出土量は少なく、細片ばかりである(Fig. 35-1~7)。1・2は土師器壺の口縁部破片である。内外面ともに横ナデ調整で仕上げる。3

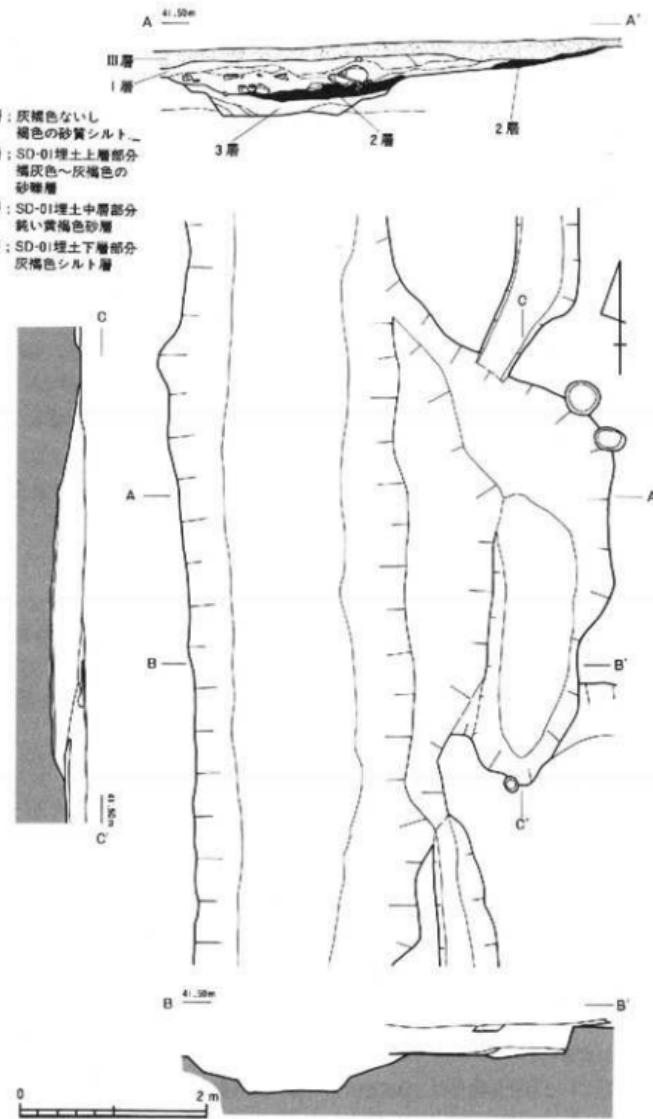


Fig. 33 3号水口 (SM-03) 実測図 (縮尺 1/60)

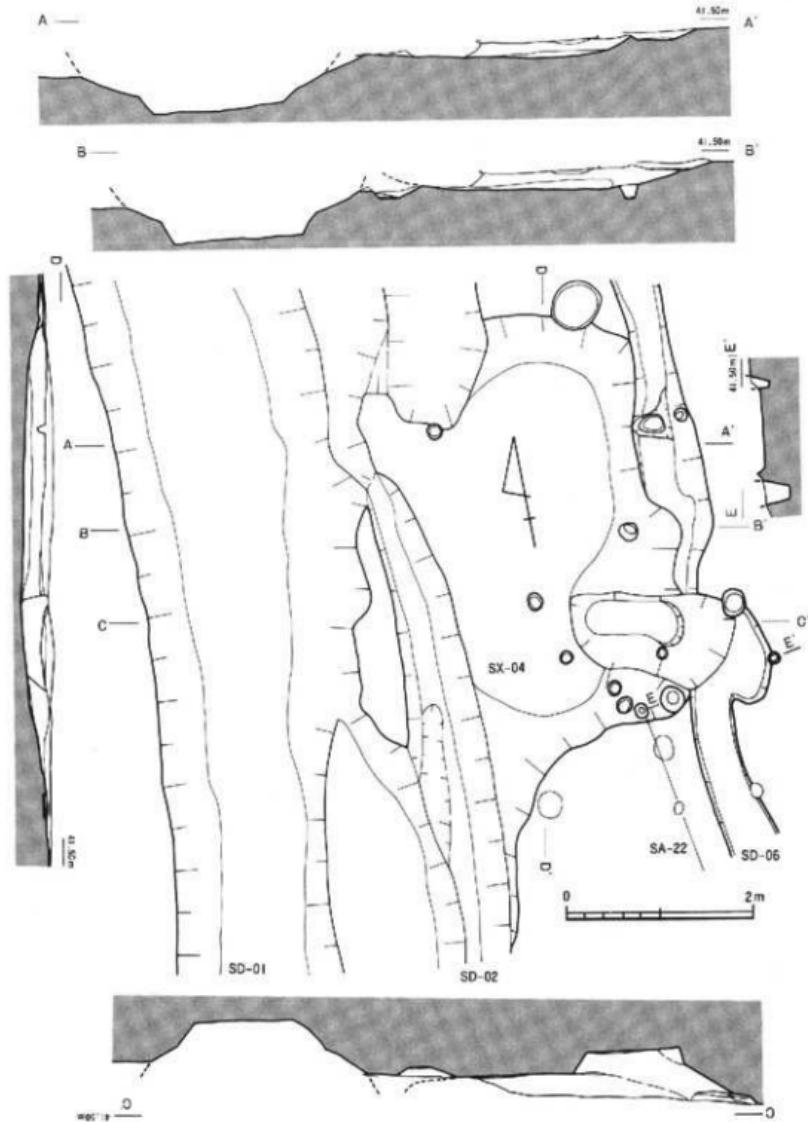


Fig. 34 4号水口 (SM-04) 実測図 (縮尺 1/60)

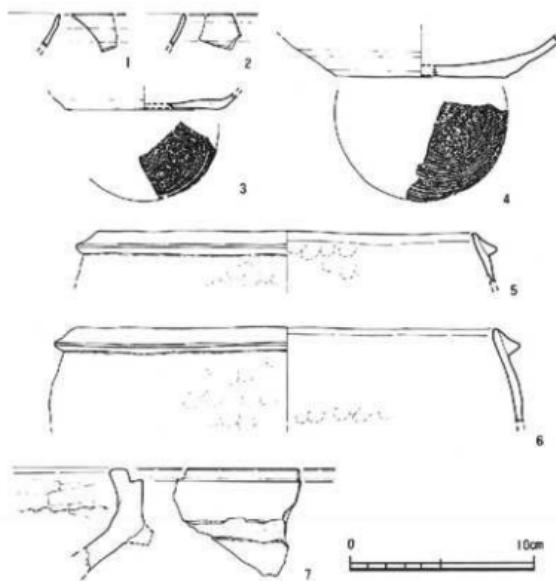


Fig. 35 3号水口出土遺物実測図 (縮尺 1/3)

・4は壺の底部破片である。外底面には糸切り離し痕が残る。胴部の内外面は横ナデ、内底面は不定方向の指ナデ調整で仕上げる。5・6は土師器の羽釜の口縁部破片で、口縁端に接して小さな断面三角形の箇を貼り付ける。箇以下には煤が付着している。7は瓦質土器である。外面ともに横ナデ調整で仕上げを施す。内面にヘラ状工具で余分な粘土をかるく掻き取った痕跡が残る。

4号水口 (SM-04 Fig. 34 Pl. 7-⑥-8-①)

3号水口の南側のG区に設けられている。最上層に1号溝・3号水口と同じくIII層の灰褐色砂質シルト層が堆積し、これを除去後に遺構の輪郭を把握することができた。2号溝(SD-02)と3号水口(SM-03)を切り、6号溝(SD-06)とは南東部分の土壤状の窪みで連結する(Pl. 8-①)。この窪みに向かい、壺底はわずかに傾斜する。数ヶ所に小穴がみられるが、いずれも浅い。4号水口にともなうものか判断できない。埋土は1号溝埋土の1層の砂砾層にあたる褐灰色ないし灰褐色の砂質シルト層である。南東部分の土壤状の窪みには、暗黒褐色粘土質シルトが堆積していたが、上部には灰褐色の細砂が薄いレンズ状ブロックとして混じる。

遺物は褐灰色ないし灰褐色の砂質シルト層から出土した。量は少ない。土師器壺の胴～底部、亀山焼や備前焼の壺の胴部、赤色頁岩製の甌などがある。いずれも細片化しており岡化できなかつた。

5 櫛列 (遺構略号 SA)

6号溝南半部の西側、7号溝の北側で、溝とほぼ平行して一直線上に並ぶ小穴列と、調査区南東部でL字形に並ぶ小穴列を確認した。これら3ヶ所の小穴列は、埋土がほぼ同質で配置関係から櫛列と判断し、21～23号櫛列 (SA-21～23)とした。出土遺物は少なく、細片がほとんどである。報文とともに、巻末の出土遺物一覧表を参照されたい (Tab. 6)。

21号櫛列 (SA-21 Fig. 28 Pl. 3-①)

調査区北半部のI-J-K区で、7号溝 (SD-07) の北側にほぼ平行して東西方向にのびる。7号溝に併設された櫛列である。擾乱によって部分的に小穴が失われているが、西から726・505・490・486・470・440・689号小穴と、730ないし453号小穴 (SP-726・505・490・486・470・440・689とSP-730ないしSP-453) から構成される。西端はSP-726までで、東へは調査区外へさらにのびる。全長16.8mを測る。小穴の大きさと深さは一定していない。SP-453-698の底付近で木痕を確認した。直径6～7cmほどで、杭を打ち込み横木を渡したような簡易な構造の柵と考える。小穴の間隔は、擾乱をうけていないSP-505-490間で1.32m、SP-490-485間で2.34m、SP-486-470間で2.13m、SP-470-453間で2.05m、SP-440-689間で1.72mを測る。埋土は、SP-490が粘性がややつよいが、黒褐色～黒色の粘土質シルトであり、炭化物の細片や褐色～黄褐色のシルトの小ブロックが混じる。

遺物は出土していない。

22号櫛列 (SA-22 Fig. 28-36-1)

調査区の西部のC-G区で、6号溝 (SD-06) の南半部の西側で確認した。6号溝に併設された櫛列である。北から640-644-621-623-624-625号小穴 (SP-640-644-621-623-624-625) から構成される。北端は4号水口 (SM-04) まで、南端は調査区外へさらにのびる。調査区内での全長は6mをこえる。小穴は直径12～17cmのものばかりで、北端の4号水口内で検出されたSP-640が、現存で24cmともっとも深い。他は5～10cm程度である。IVa層の層厚を考えても、本来の深さは20～25cm前後であろう。21号櫛列と同様に、10cm以下の太さの杭を打ち込み横木を渡すような簡易な構造と考える。小穴の間隔は、SP-640-644間で1.13m、SP-644-621間で1.0m、SP-621-623間で0.92m、SP-623-624間で1.33m、SP-624-625間で1.5mを測り、21号櫛列と比べて等間隔に配列される。SP-644の埋土が暗褐色シル

トであることを除き、他の小穴の埋土は黒褐色粘土質シルトで、明褐色シルトの小ブロックを10%ほど満遍なく含む。SP-623以外は炭化物の細片が少量混じる。

遺物はSP-315から土師器坏と羽釜の破片が4点出土した。

その中の土師器坏の底部破片を1点だけ図化できた(Fig. 36-1)。内外面ともに器面の荒れが進むが、外底面には部分的に糸切り離し痕が認められる。推定底径は5.9cmである。

23号柵列 (SA-23 Fig. 11 Pl.4-③)

調査区南東部のB-F区で、ほぼ一直線上に並ぶ小穴列を検出した。当初、掘立柱建物の可能性を考え、対応する小穴を検出することに努めたが、193号小穴(SP-193)だけしか小穴がみあたらず、「L」字形に折れ曲がる柵列と判断した。また、並行して20号掘立柱建物(SB-20)があり、外部施設と考える。東から208-215-216-229-221-135-140号小穴(SP-208-215-216-229-221-135-140)から構成され、SP-140を基点に南へ約90°の方向に139号小穴(SP-139)がある。小穴の埋土は、基本的には黒褐色のシルトないし粘土質シルトである。一部、褐色シルトの小ブロックを少量含み、炭化物の小片が少量混じる。現存の深さは一定していない。

小穴の間隔は、SP-208-215間が0.9m、SP-215-216間が0.65m、SP-216-229間が0.7m、SP-229-221間が1.06m、SP-221-135間が1.34m、SP-140-139間が1.26mを測るが、SP-135-140間は2.13mと間隔が広い。SP-135とSP-140に接して、それぞれSP-134とSP-141があり、両者ともに埋土は炭化物が混じる黒褐色粘土質シルトである。柵列を構成する小穴の間隔が広いSP-135-140間を、20号掘立柱建物を囲む柵列の出入口部分と考えれば、SP-134-141は出入口の両側を補強するためのものと考えることも可能であろう。

出土遺物は、SP-134から土師器の細片と、SP-141から常滑焼の甕もしくは壺の胴部破片が出土したにすぎない。細片化しているために図示できなかつた。

6 小穴(遺構略号 SP)

本次調査では、600をこえる小穴を検出した。これまで報告した掘立柱建物や柵列を構成するものが含まれているが、以外の小穴は埋土の質から、以下のa～cの3類に区分できる。

〈a類〉暗灰黄色・灰黄褐色・灰褐色の灰色系の砂質土ないし砂質シルトを埋土にもつ小穴である。調査区北半部に多くみられる。土質・色調とともにII層の旧水田層、とくにIIa層と共通する。調査区壁の土層断面で、この種類の埋土をもつ小穴がII層の中位から掘り込

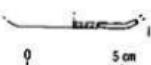


Fig. 36 22号柵列出土
遺物実測図 (縮尺1/3)

まれていていることを確認した。また、G-d 区の529号小穴が3号水口を、K-b 区の527号小穴が6・7号溝を切っている。471号小穴で土師器の羽釜の口縁部破片が1点出土したが、528号小穴からは近世～近代の国産白磁碗の口縁部が出土した。以上から、a類の埋土をもつ小穴は近世以降のものと考えた。

〈b類〉赤黒色・暗赤褐色・暗灰色の赤色味をおびた粘土質シルトを埋土とする小穴である。調査区全域に散在する。調査区西部に堆積したⅢ層の灰褐色ないし褐色の砂質シルト層の上面で、この類いの埋土をもつ190-316-403号小穴(SP-190-316-403)を検出した。また、a類の埋土をもつ小穴から切られている例もある。Ⅲ層には16世紀までの遺物が含ま

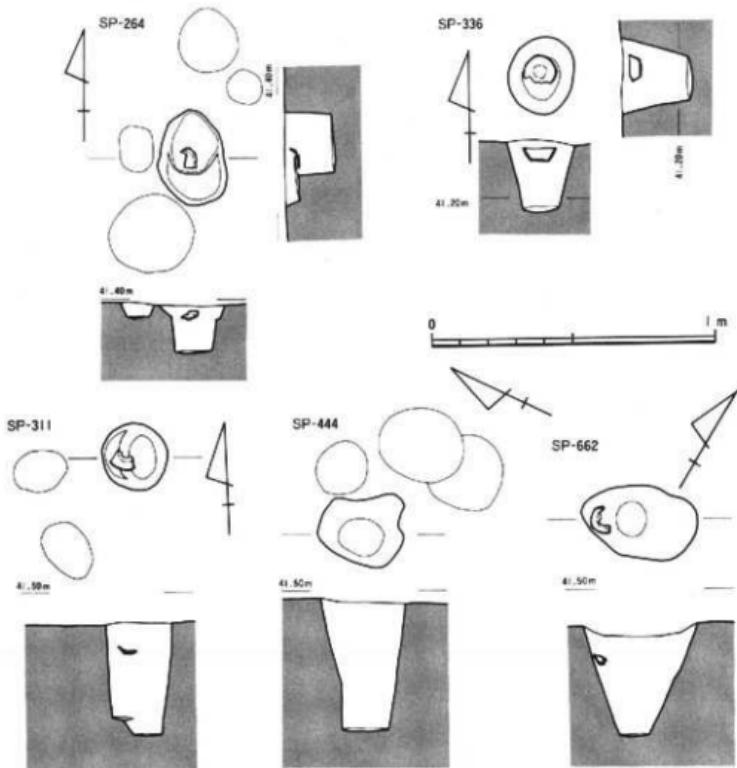


Fig. 37 264-311-336-444-662号小穴 (SP-264-311-336-444-662) 実測図 (縮尺 1/20)

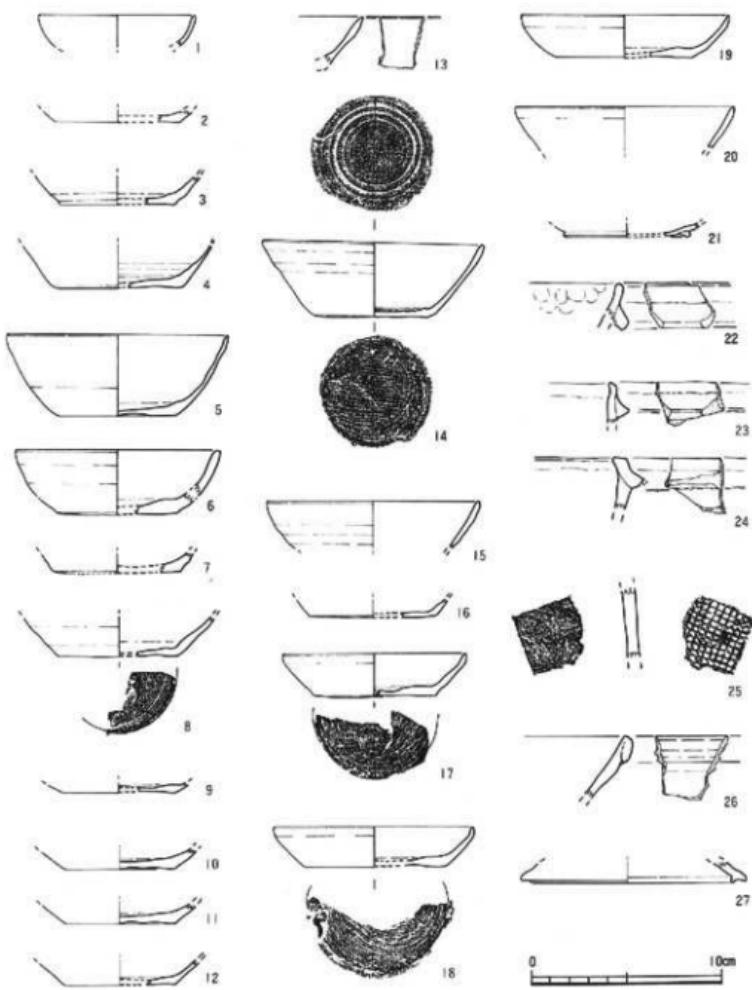


Fig. 38 小穴出土遺物実測図 I (縮尺 1/3)

れていることから、b類の埋土をもつ小穴は、それ以降のものと考える。C-d区の190号小穴から鉄片が1点出土している。

〈c類〉 黒褐色ないし黒色の粘土質シルトを埋土とする小穴である。検出した小穴のほとんどを占める。土質や色調は、14~16世紀の遺構の埋土と共通している。掘り込み面も同様にIV層の黒褐色ないし黒色の粘土質シルト層の上面である。14~16世紀代におさまるものと考える。

以下、a類・b類の埋土をもつ小穴の報告は省略し、c類の中で遺物を出土した小穴を覽表にまとめ、代表的な小穴と出土遺物のみを報告する (Tab. 10)。

264号小穴 (SP. 264 Fig. 37-38-4 Pl. 8-③)

G-a区の南東隅に位置する。不整な梢円形の平面形を呈する。埋土は均一な黒褐色シルトで、炭化物の細片を含む。口縁部を欠く全体の1/4~1/5の土師器壊の破片が、小穴の上層から出土した (Fig. 38-4)。外面は荒れが著しく、調整の詳細は不明。内面は横ナデ仕上げで、内底部には同心円状に凹みが巡る。

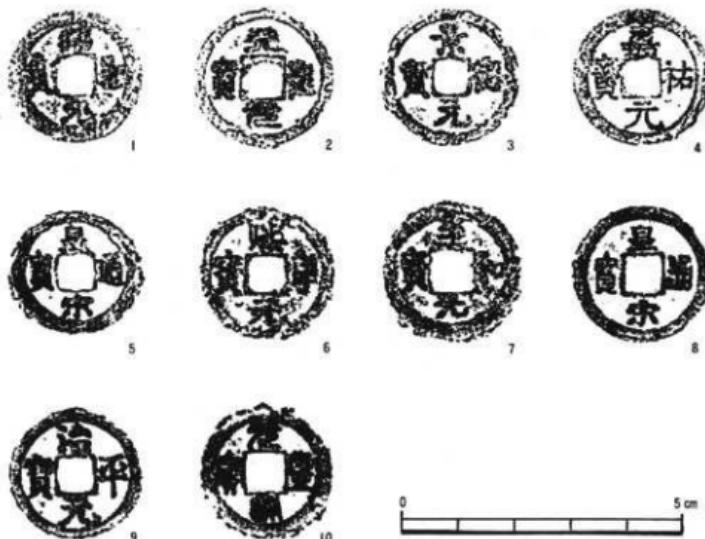


Fig. 39 小穴出土遺物実測図 2 (縮尺1/1)

269号小穴 (SP-269 Fig. 38-5・10-15)

G-a 区に位置する楕円形の小穴である。IV層を掘り下げ中に完形に近い土師器坏 (Fig. 38-5) が正立に据え置かれたような状態で出土した。土師器坏を取り上げた後に、V層上面で269号小穴を検出した。埋土は黒褐色シルトで、褐色シルトを約30%ほど含む。土色はIV層と共通している。IV層上面での検出に失敗したものと判断し、269号小穴にともなうと考えた。取り上げに失敗し、器面が荒れてしまったが、外底面に板目状圧痕が不明瞭ながら観察できる。内底面は指頭による押捺痕が残る。

336号小穴 (SP-336 Fig. 37-38-14 Pl. 8-⑤・10-14)

F-d 区に位置する楕円形の小穴である。14号廻立柱建物 (SB 14) の建物本体と柵に囲まれたような配置をとる。埋土は黒褐色粘土質シルトである。上層部分から正立に据え置いたような状態で土師器坏が出土した (Fig. 38-14)。遺構の掘り下げに際して一部を欠いたが、ほぼ完形に復元できた。口縁部～胸部は横ナデ調整で仕上げられ、外底は糸切り離しの後に、キメの細かい板目状圧痕が残る。内底部には同心円状に凹みが巡る。

444号小穴 (SP-444 Fig. 37-39 Pl. 10-1～11)

I-b 区に位置する不整形の小穴である。上層部から11枚の中國銅錢が癒着して塊状となって出土した。11枚の中で、1枚は破碎して細片化したため銭種は不明である。他の10枚は、景德元寶 1 枚 (1005年、以下、初鑄年)、天聖元寶 (1023年) 1 枚、皇宋通寶 (1039年) 2 枚、嘉祐元寶 (1057年) 1 枚、治平元寶 (1064年) 1 枚、熙寧元寶 (1068年) 1 枚、元豐通寶 (1078年) 1 枚、紹聖元寶 (1094年) 1 枚と、鑄上がりが悪く不確実であるが至和元寶 (1054年) と考えられる 1 枚である。

662号小穴 (SP-662 Fig. 37-38-17～19 Pl. 8-⑥・10-12)

J-a 区と I-b 区の境界に位置する楕円形で、断面形が円錐形の小穴である。埋土は黒褐色粘土質シルトである。Fig. 38-17～19 の 3 枚の土師器坏を正立に重ねた状態で出土した。上部 2 枚は取り上げてしまい、下部 1 枚の破片の状態の出土状況しか示せない。いずれも口縁部～胸部は横ナデ調整で仕上げし、内底面には指頭圧痕が残る。17-18は外底を回転糸切り離す。19の外底面は荒れが著しいが、板目状圧痕がわずかに認められる。

この他、G-a 区の270号小穴 (SP-270) からは龜山焼の大壺の胸部片が出土した (Fig. 38-25)。外面には格子文のタタキ痕、内面はナデ仕上げされているが、晴海波の当て具痕がわずかに認められる。また、F-d 区の385号小穴 (SP-385) からは瓦器塊 (Fig. 38-21)、G-c 区の531号小穴 (SP-531) からは玉縁の口縁をもつ白磁碗 (Fig. 38-26) が出土している。26は内外とも施釉され、胎は灰色で緻密である。外面には大きめの嵌入がみられる。F-c 区と J

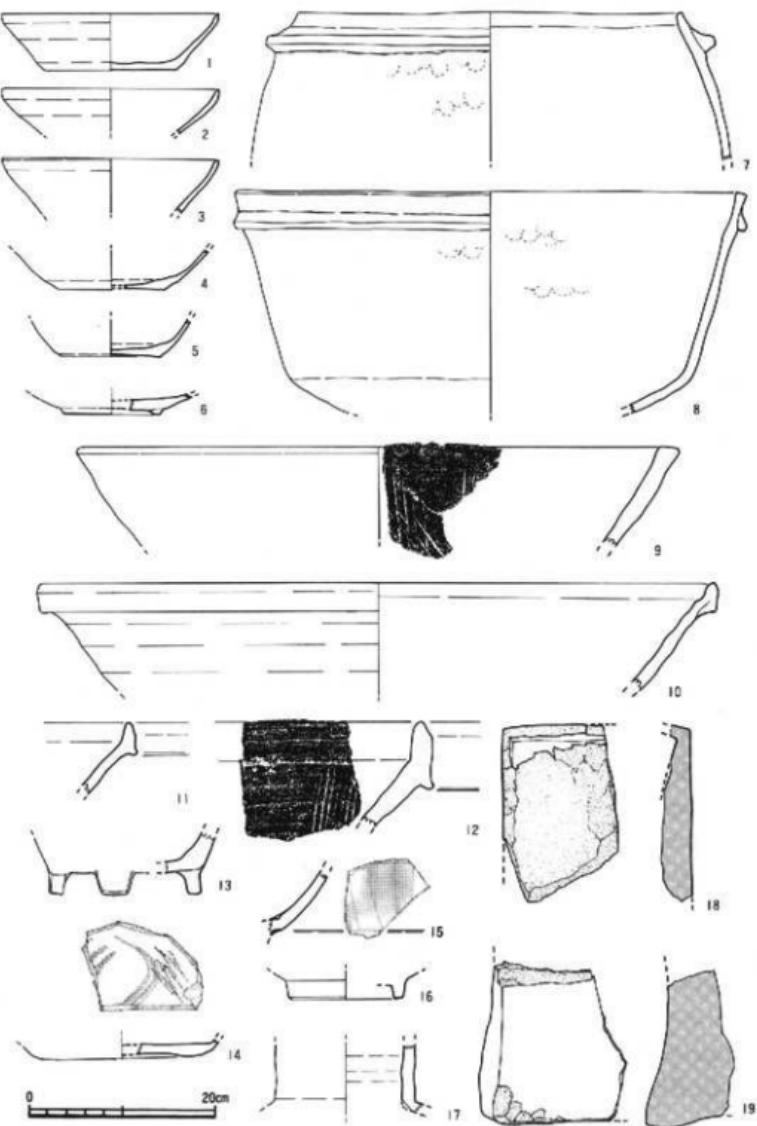


Fig. 40 III層出土遺物実測図 (縮尺 1/3)

a 区の境界に位置する345号小穴(SP-345)からは鉄釘が、J a 区の469号小穴(SP-469)からも鉄滓が1点出土している。また、I-b 区の414・441号小穴(SP 414・441)、J a 区の424・435号小穴(SP424・435)から焼成をうけた粘土塊が出土している。414・424・441号小穴のものは指先大のものであるのに対して、435号小穴の焼粘土塊は拳大で、重量172gを測る(Pl. 10)。

7 その他の遺物

III・IV層からも遺物が出土しているが、出土量は少ない。III層では下部から遺物が集中して出土した。III層上部からは疎らにしか出土していない。下部出土の遺物の中には、発掘時に1号溝埋土の1層まで掘りすぎて取り上げたものが含まれる。ここでは、そうした遺物を分離することなく、一括して報告する。また、IV層では、IVa層から遺物が出土している。近世以降の遺物もあるが、中世の土師器や陶磁器がみられる。近世以降の遺物は、IVa層が部分的に攪乱されて混じり込んだものである。中世の遺物は、本来V層の上面で検出した14~16世紀の遺構にともなうものである。中世の代表的な遺物だけを抽出して報告する。また、巻末には遺物観察表を付している。参照されたい(Tab. 11)。

① III層出土の遺物 (Fig. 40-1~17・Pl. 9~8)

Fig. 40-1~5は土師器の壺である。1・2はほぼ直線的にひろがる胴部をもち、口縁部をわずかに曲げて、横ナデ仕上げで口縁端部を尖らせる。4・5は底部破片で、外底は回転糸切り離しを施す。6は土師器壺の高台部である。7・8は土師器の羽釜である。ともに口縁端部からやや下がった部位に断面「コ」字形の籠を巡らせる。7には三足の脚部が付く。8は1号溝1層から出土した瓦質土器の羽釜(Fig. 17-1)に胴部の形状に近いことから、三足の付かない羽釜と考える。7・8はH-a区でIII層の下部からかたまって出土した。9は土師器の擂鉢である。胴部内面に櫛齒状工具で平行条線を二重に施す。

10-11は東播系須恵器こね鉢である。10は口縁部外面に粘土を貼り付け肥厚させ、11は口縁端部を上下に引き伸ばし拡張する。ともに内面の磨滅が進む。12は備前焼の擂鉢の口縁部である。口縁上端をほぼ垂直に立ち上げる。内面には7条を1単位とする平行条線が施される。13は土師器の火舎である。脚部周辺の破片であるため、法量は不確実。内底面には炭化物が付着している。

14は同安窯系青磁皿である。見込みには櫛齒状工具で施文する。内外とも施釉され、外底面のみが露胎のままである。15-16は龍泉窯系青磁碗である。15の胴部には連弁文が描かれる。16の釉は厚い。17は白磁の長頸壺の頸部破片である。内外面ともに施釉される。

18(Pl. 9-8)は赤色頁岩製の硯、19は砂岩製の砥石である。19の下半部は欠損する。

この他、H-a区で焼骨の細片、H-a-c区とG-b区から馬齒、D-c-G-d-H-c区から鉄器が出土している。鉄器は鏽で器種などは不明。

② IV層出土の遺物 (Fig. 41-1~3)

1は白磁碗である。外面は回転ヘラケズリが施され、比較的薄手のつくりで、内外面ともに施釉される。2は白磁皿である。内底から脣部が立ち上がる部位に深い段が巡る。外底面も含め、全面施釉される。この他、整理作業中に所在が不明となったが、口禿の白磁皿の口縁部破片がある。3は土師器の羽釜である。口縁端部に接して断面三角形の瘤が貼り付けられる。瘤以下には煤が薄く付着している。

この他、H-c-13区とG-d-25区から鉄器が出土している。鏽が著しく、器種など不明であり、また中世のものか判断できない。

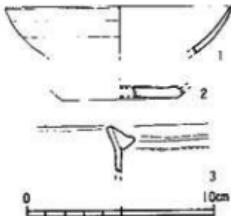


Fig. 41 IV層出土遺物実測図 (縮尺 1/3)

V 調査のまとめ

今回の樽味遺跡2次調査では、中世の溝・水口・櫛列・掘立柱建物・土塙など集落関連の遺構を調査した。以下、出土遺物の検討を行うとともに、1次調査などの周辺の調査成果も含めて、樽味遺跡における中世集落について検討し、調査のまとめとしたい。

1 1号溝出土の土器類

今次調査で出土した遺物の大半は、1号溝(SD-01)から出土した。ほとんどが破片資料で、完形に復元できたものはきわめて少ない。1号溝の堆土は1~3層に分層できた。1層は洪水などにより一気に堆積した砂礫層である。その中に含まれる遺物は、北側上流から砂礫や石とともに押し流されてきたものと考えられる。これに対して、2・3層の遺物は、3・4号水口(SM-03-04)南西側のH-c~G-a区に溜まったような状態で出土している。これはH-c区付近に堰が設けられていたためと考えられる。1層と比べると、まとまった資料と言える。比較的に遺物の出土量のある2層の土器類から検討を行ってみよう。

まず、土師器壺をみると、次の3種の壺が大半を占める。

a類：口縁部に横ナデ調整を仕上げ段階に施すため、口縁下に薄い稜がつく。口縁部付近が膨らみ気味で口縁端部を丸く仕上げたもの、胴部がほぼ直線的に開き口縁端の断面が尖るものがある(Fig. 20-8~13)。

b類：a類と同じく口縁部に横ナデ調整を仕上げ段階に施すが、口縁下の稜が下がり、胴部上半をわずかに折り曲げたような形状をもつ。口縁部から胴部上半が若干厚く、胴下半はわずかに内湾しながらすぼまる(Fig. 20-7-14~16)。

c類：口縁部周辺の特徴はa類に近いが、胴部の立ち上がりが緩やかで、身が浅い壺である。推定口径が18cm以上の大形品がみられる(Fig. 20-20~22)。

土師器の羽釜は三足付きのもので、脚は全体に細身であり、胴部に粘土板を捻るように貼り付け、脚柱部分を絞って成形し、指頭で細かな整形を施している。口縁部に巡らせる縦は細目で、縦の貼り付け位置から2種に分類できる。

a類：口唇部に接して縦を貼付するもの(Fig. 22-1)。

b類：縦が口縁端から若干下がった位置に貼り付けられるもの(Fig. 21-5~10)。

また、瓦質土器の羽釜がある。1層出土のFig. 17-1は土鍋タイプであるが、胴部が張って三足が付くと考えられるものが大半をしめる。縦は土師器の羽釜と比べて口縁端部から離

れた位置に巡らされるが、箒の断面形状などから2種に分類できる。

a類：箒の断面形が三角形に近く、箒は口縁端部からやや下がった部位に巡らされるもの(Fig. 22-4)。箒の位置を別にすれば、断面形状はFig. 17-1と共通する。

b類：箒の断面形は「コ」字形で、a類と比べて口縁端部からかなり離れた位置に貼付されるもの(Fig. 22-2-3-5)。

出土量は少ないが、土師器の土鍋がある。身の浅いボウル形の脚部をもち、口縁部を折り曲げる。口縁部の形状から2種に分類できる。

a類：口縁部が厚く、短いもの(Fig. 22-6・Fig. 23-1)。

b類：a類と比べて口縁部が長めで、薄手のもの(Fig. 22-7)。

以上、1号溝2層から出土した土師器の壺・羽釜・土鍋と瓦質土器の羽釜を分類した。次に3層出土の土器類をみると、出土量が限られているが、土師器の壺は2層で分類したb類がある(Fig. 26-3～5)。土師器の羽釜はb類、土鍋はb類が各々1点出土している(Fig. 26-12-13)。

他の遺構では、5号溝(SD-05)で土師器羽釜a類のみ(Fig. 29-12～14)、7号溝(SD-07)で土師器の壺a類(Fig. 29-15-16)とc類と共通する胸部形状の皿(Fig. 29-17)、羽釜a類(Fig. 29-23)が出土している。さらに、櫛味遺跡1次調査の1・2号溝(SD-01・02)では、土師器の壺a・c類、羽釜a類がみられる。

資料数が限られているが、1号溝2層の土器から、5・7号溝と1次調査の1・2号溝の資料を差し引いたものは、1号溝3層の資料と対応する。つまり、土師器の壺b類・羽釜b類・土鍋b類と、壺a・c類・羽釜a類・土鍋a類の2つの土器群に区分でき、前者をI群、後者をII群とする。瓦質土器の羽釜は、1号溝3層から出土していない。しかし、型式学的にはa類からb類への変化を考えることができる。a類をII群、b類をI群にともなうものと考えておく。

1号溝では2層と3層の堆積に時期差があると考えられる。後述する1号溝に付設される3・4号水口(SM-03・04)や2・5～7号溝(SD-02・05～07)の時間的関係とも対応する。したがって、I群とII群の土器群は、それぞれ固有の時間幅をもつと言える。

I群とII群の土器類にともなう備前焼播鉢や東播系須恵器こね鉢には、14～15世紀の年代観が与えられている(伊藤1984、萩野1985、森田1986、間壁1990ほか)。また、伊予地域では15～16世紀に土師器皿・壺の外底をヘラ切りする技法が再び登場する(中野1988)。しかし、1・2次調査ともに土師器の皿・壺はすべて糸切り技法で作られている。そこで、I・II群の土器群は14世紀を前後する時代幅で捉えうる。I・II群の先後関係から、

I群土器には14世紀前半～中頃、II期を14世紀後半～15世紀に一部かかる年代観を与えておきたい。

2 1号溝と3・4号水口、2・5～7号溝、21・22号柵列の関係

1号溝は、埋土の堆積状況から、恒常に水が流れる水路と判断した。1号溝には3・4号水口(SM-03・04)が付設されている。3号水口には、東側の壇底付近に1号溝埋土の2層と共通する鈍い黄褐色砂層、その後に西側を中心として1号溝1層の砂疊層が堆積していた。4号水口の埋土は1号溝埋土の1層の砂疊層である。そのために、3号水口が4号水口より時間的に先行することが明らかになった。また、3号水口の東半部に1号溝2層が堆積することから、1号溝埋土の2層が堆積した時期には4号水口が機能しており、1号溝1層が押し流されてきた際に、1号溝とともに4号水口も埋没したと考えた。したがって、3号水口が機能していた時期は、1号溝の3層が堆積した時期と言うことになる。ただし、4号水口は1号溝と直接連絡していない。3号水口の西半部分に3層が堆積していることから、部分的に4号水口の導水口として利用されていたと考えた。そうすることで、3号水口の中央部分に南北にはしる高まりも理解できよう。

3・4号水口には、それぞれ2・6号溝(SD-02・06)が連結する。埋土には、流水を示す薄いレンズ状の砂層が含まれていた。それぞれ北側から水を水口へ流し込み、さらに水口から南に向かって導水した1号溝にともなう枝水路である。しかし、埋土に含まれる砂層の量からは、恒常的な流水があったとは言い難い。むしろ、季節的に利用され、間歇的に流水があった程度であろう。こうした2・6号溝の流水は、田畠に導かれたと考えられる。今後、農学部構内で中世の田畠などの生産関連の遺構が発見される可能性は強い。

6号溝には7号溝(SD-07)が連結する。埋土は6号溝と同質であり、同時に併存した溝である。しかし、流水の痕跡を示す薄いレンズ状の砂層はほとんど含まれていない。5号溝(SD-05)も同様な埋土をもつが、部分的にしか調査できなかった。II群の土器類が出土したことから、1号溝2層が堆積した時期に、4号水口・6号溝と同時に併存した溝と言える。5・7号溝の性格は、2・6号溝とは埋土が異なることから、水路と言うよりも後述する掘立柱建物群の一部を囲む区画のための溝とした。また、今次調査区から東へ6.5mほど離れた1次調査II区では、5・7号溝の延長部分は確認されず、北もしくは南に折れ曲がり、南北16.5m、東西20m前後を区画すると考えられる。

21号柵列は7号溝、22号柵列は6号溝と平行して設けられている。遺物はごく少量出土したのみであるが、配置関係から6・7号溝と同時に設けられたものと判断した。

このように、1号溝と3・4号水口、2・5～7号溝、21・22号柵の性格と時期を、次のように整理できる。

(幹線水路) + (水口) + (枝水路) + (区画溝と柵列)	(出土土器)	(時期)
・1号溝3層 + 3号水口 + 2号溝	I群土器	14c前半～中頃
・1号溝2層 + 4号水口 + 6号溝 + 5・7号溝	II群土器	14c後半～15cの一部
+ 21・22号柵列		

3 挖立柱建物の構造とグルーピング

今次調査では12棟の掘立柱建物を復元できた。内訳は1×1間が7棟、1×2間が3棟、1×4間が2棟で、大半が小規模な建物である。これらの建物の柱痕跡を確認することに努めたが、部分的にしか確認できなかった。しかし、確認できた柱痕跡はいずれも直径が10cm前後のものばかりである。規模と柱痕跡から考えると、多くは簡易な構造の建物であったと考えられる。「一遍聖絵」に代表される中世に描かれた絵巻物には、市場や武家の屋敷地の一角に建てられた1×1間や1×2間の建物がみられる。ほとんどが壁をもたず板や藁で屋根を葺いた簡易な建物である。今次調査で復元した1×1間や1×2間の建物は、こうした構造の建物と考えられる。

掘立柱建物の時期比定は困難である。土器類がいくつか出土しているが、それは遺構の上限しか示しておらず、時期を決定する絶対的な決め手とはなりえない。ここでは掘立柱建物の配置関係から考えてみた。

まず、10・12・13・16・18号掘立柱建物(SB-10・12・13・16・18)は、5・6・7号溝が区画する区域内で、ほぼ平行したり直交する配置関係をとる。建物方向が6・7号溝とはほぼ一致することから、同時期のものと考えられよう。これらと建物方向がほぼ共通する建物として9・15・19号掘立柱建物(SB-09・15・19)がある。しかし、9号掘立柱建物は7号溝や21号柵列とは方向が異なる。15・19号掘立柱建物も方形区画の中央にあり、区画の規制を受けているとは考え難い。

次に、14・17号掘立柱建物(SB-14・17)は6・7号溝とは方向が異なり、14号掘立柱建物に付設された柵列と11号掘立柱建物(SB-11)がほぼ平行し、柵列が途切れた所に建てられている。これら3棟の建物を1グループにまとめた。さらに、20号掘立柱建物(SB-20)と23号柵列(SA-23)が、他の建物とは方向がまったく異なる。

以上、今次調査で復元した掘立柱建物群は、①群：SB-10・12・13・16・18、②群：SB-09・15・19、③群：SB-11・14・17、④群：SB-20・SA-23に区分できる。

出土遺物をみると、9号掘立柱建物からは土師器羽釜のb類、15号掘立柱建物からは土師器杯b類のI群土器、18号掘立柱建物からは土師器杯a類のII群土器が出土している。また、14号掘立柱建物からは土師器杯a類とb類の、11号掘立柱建物にともなう8号土壙(SD-08)からは16世紀に下る備前焼の大甕が出土している(伊藤 1984、間壁1990)。

こうした建物の配置関係と出土遺物から、①群はII群、②群はI群の土器類の時期と考えられる。③群は11号掘立柱建物にともなう8号土壙の出土遺物から16世紀代に比定できよう。また、④群は、今次調査で13世紀以前に遡る遺物が出土しておらず、III-IV層の遺物も15~16世紀におさまることから、①群と③群を繋ぐ中間期の建物群と考えておきたい。

今次調査では、14~16世紀の集落関連の遺構を調査した。とくに、I群の土器類に示される14世紀前半~中頃には、1号溝が開削され、3号水口と2号溝が付設される。この溝の北側延長線上にあたる1次調査III区では、幅5m前後の溝(SR-1)が確認されている。本体部分の横断面形は逆台形で、2次調査の1号溝と同じ溝であり、総延長は90mをこえる水路となる。樽味遺跡周辺では13世紀までの遺構がほとんどないことを考えれば、この水路の開削によって、樽味地区の中世の開発が軌道にのったことが伺える。同時に営まれたのは、②群の9・15・19号掘立柱建物である。

さらに、II群の土器類に示される14世紀後半~15世紀に一部かかる時期には、1号溝に4号水口・6号溝が付設される。さらに、5・7号溝と21-22号櫛列で南北16.5m、東西20m前後の方形区画が設けられ、①群の10-12-13-16-18号掘立柱建物が営まれる。また、今次調査区から北東へ60mほど離れた1次調査区でも、「L」字形に曲がる溝など3条の区画溝が調査されている。出土土器はII群の土器類であり、同時期の遺構である。1次調査区は近代~現代の搅乱が著しく、掘立柱建物などは確認できなかった。しかし、1・2次調査の成果からは、愛媛大学農学部構内全域に広がる複数の方形区画が連結した中世集落の姿を考えることができよう。

ただし、今次調査区で確認した掘立柱建物群は、いずれも小規模で簡易な構造の建物である。こうした遺構の貧弱さに対して、出土遺物には中国錢や石硯などがある。また、白磁や龍泉窯系青磁・同安窯系青磁などの貿易陶磁器が破片ながら比較的多く出土した。出土遺物の内容も考慮すれば、集落の中心となる大形建物が営まれた屋敷跡が周辺に存在する可能性が強い。中世後期には、道後平野は河野氏が統治下におさめていた。樽味遺跡周辺は、河野氏家臣の一人である重水氏の本貫に比定されている(川岡 1989ほか)。今後、文献史の分野からの検討も含め、農学部構内の中世集落の調査を進めていく必要がある。

付篇 平成4年度の試掘・立会調査

愛媛大学では、昭和62年度に愛媛大学埋蔵文化財調査委員会が設置され、その指導のもとに愛媛大学埋蔵文化財調査室が設立された。愛媛大学埋蔵文化財調査室では、大学構内の現状変更をともなう諸工事に際して、埋蔵文化財に対する影響の度合いに応じ、立会・試掘・事前に区分した各調査方法によって発掘調査を実施し、保護処置を講じている。また、平成4年度からは、大学構内の埋蔵文化財の有無と範囲を確認するために遺跡範囲確認調査を実施することとなった。平成4年4月から平成5年2月までに実施した発掘調査は11件を数える(Tab.3)。こうした調査の成果は、順次、公開していく予定である。

Tab.3 構内遺跡発掘調査一覧(平成4年4月～平成5年3月9日)

調査番号	調査種別	事業名	団地名	遺跡名	面積(m ²)	調査期間
99201	立会	農学部屋外ガス本管改修	椿味団地	椿味	6.1	H.4.05.26
99202	事前	城北団地東側開闢改修	城北団地	文京	2.7	H.4.07.30
99203	事前	附属図書館農学部分館新館	椿味団地	椿味	1.1	H.4.08.26
99204	事前	医学部附属病院駅病原室新館	重信団地		3.2	H.4.08.26
99205	確認	埋蔵文化財範囲確認調査	山越団地		57.4	H.4.08.28
99206	立会	農学部自転車置場新設	椿味団地	椿味	2.6	H.4.09.21
99207	立会	農学部拓翠寮自転車置場新設	椿味団地	椿味	2.1	H.4.09.21
99208	立会	城北団地外灯設備改修	城北団地	文京	1.7	H.4.10.26
99209	立会	教育学部附属小学校 給水設備改修	持田団地		11.1	H.4.10.26
99210	事前	医学部附属病院駐車場取扱	重信団地		39.6	H.4.10.27
99211	確認	埋蔵文化財範囲確認調査	東信団地		56.4	H.5.1.20～21
99212	立会	城北団地情報通信設備	城北団地	文京	11.8	H.5.03.08～09

〈参考文献〉

- 伊藤晃 (1984) : 備前焼の流れ、木村コレクション古備前図録、80-86
- 上田真輔 (1991) : 南江戸園日遺跡、松山市文化財調査報告書、22
- 梅木謙一編 (1991) : 松山大学構内遺跡…2次調査…、松山市文化財調査報告書、20
- 梅木謙一編 (1992a) : 観谷アイリ遺跡、松山市文化財調査報告書、25
- 梅木謙一編 (1992b) : 桑原地区的遺跡、松山市文化財調査報告書、26
- 梅木謙一・宮内慎一編 (1992) : 道後城北遺跡群、松山市文化財調査報告書、30
- 岡山県教育委員会 (1988) : 山陽自動車道建設に伴う発掘調査、3.岡山県埋蔵文化財発掘調査報告、69
- 荻原繁春 (1985) : 西日本における中世須恵器系陶器の生産資料と編年、福井県考古学会誌、3
- 海津正倫 (1982) : 松山市北西部における土地変更、「社会科」学研究、4.13-27
- 鹿島愛彦・高橋治郎 (1980) : 四国平野の環境地質学的研究 (1)…松山半野とその周辺の地質…、愛媛大学教育学部紀要 自然科学Dシリーズ、IX.1.1-16
- 鹿島愛彦・桃井齊・高橋治郎編 (1992) : 愛媛県の地質 第4版 20万分の1地質図・説明書--
- 栗田茂敏編 (1987) : 桑原本郷遺跡、松山市埋蔵文化財調査年報、I
- 栗田茂敏編 (1992) : 文京遺跡…第2・3・5・5次調査…、松山市文化財調査報告書、28
- 川岡勉 (1989) : 中世の道後平野と河野氏、愛媛大学埋蔵文化財調査報告、I.95-113
- 川岡勉 (1992) : 河野氏の歴史と道後湯築城
- 古代学協会四国支部 (1988) : 松山道後城北の弥生遺跡をめぐって (シンポジウム資料)
- 藤原芳秀 (1989) : 草野千軒町遺跡の龜山焼、中近世土器の基礎研究、III.93-96。
- 下條信行 (1987) : 近年の文京遺跡調査の成果と課題、「社会科」学研究、13
- 中野良一 (1988) : 愛媛県における古代末から中世の土器様相、中世土器の基礎研究、IV
- 中野良一 (1990) : 80年代の研究成果と今後の展望、中世土器研究、VI
- 西尾幸則 (1982) : 文京遺跡 (愛媛大学構内第3次) 調査概報、「社会科」学研究、5
- 西尾幸則 (1986) : 文京遺跡、愛媛県史、資料編 考古
- 西田栄・森光晴・大山正風 (1976) : 文京遺跡、松山市文化財調査報告書、II
- 平井幸弘 (1989a) : 石手川扇状地北地区における沖積低地の地形発達と考古遺跡の立地環境、愛媛大学教育学部紀要 第III部 自然科学、9.59-73
- 平井幸弘 (1989b) : 勝子遺跡および樽味遺跡をとりまく地形環境、愛媛大学埋蔵文化財調査報告、I.61-75
- 間壁忠彦 (1990) : 備前焼、考古学ライブリー、60
- 宵本一夫編 (1989) : 鷹子・樽味遺跡の調査、愛媛大学埋蔵文化財調査報告、I
- 宮本一夫編 (1990) : 文京遺跡第8・9・11次調査、愛媛大学埋蔵文化財調査報告、II
- 宵本一夫編 (1991) : 文京遺跡第10次調査、愛媛大学埋蔵文化財調査報告、III
- 森光晴 (1986) : 桑原高井遺跡、愛媛県史、資料編 考古
- 森光晴 (1986) : 東本遺跡、愛媛県史、資料編 考古
- 森田稔 (1986) : 東横系須恵器の成立と展開…神出古窯群を中心として…、神戸市立博物館研究紀要、3

*この他、樽味遺跡周辺の最近の調査成果は、梅木謙一・宮内慎一氏からの教示による。また、土器類については、愛媛県埋蔵文化財センターの中野良一氏とともに検討を行うことができた。記して感謝したい。

Tab. 4 槽味遺跡 2 次調査 掘立柱建物出土遺物一覧

遺物番号	柱穴(小穴) 番号	出土遺物			掲回番号 番号	遺物登録 番号
		種類	器形	部位	保存状態	
SB-09	SP-458	土師器	环	肩	細片 1	R-107
	SP-471	土師器	羽釜	二縁	内外面ともに横ナデ、内面に指頭痕が残る	Fig. 12-1 R-1333
	SP-396	土師器	环	底	外表面は荒れが著しい、内面は指頭による押さえ	Fig. 12-2 R-1283
SB-10	SP-502	土師器	环	肩	細片 2	R-183
		土師器	环	肩	内外面ともに横ナデ、径にやや不整実	Fig. 12-3 R-1305
		土師器	环	底	内外面ともに荒れが進む、外底は回転糸切り離し	Fig. 12-4 R-1306
SB-11	SP-491	土師器	环	口縁	細片 1	R-283
		土師器	环	底	内外面ともに荒れが進む、外底は回転糸切り離し	Fig. 12-5 R-1334
		土師器	?	?	細片 2	R-283 #
		土師器	?	?	細片 1	
SB-12	SP-358	土師器	环	口縁	内外面ともに荒れが進み、調整の仔細不明	Fig. 12-6 R-1267
		土師器	环	肩	細片 2	R-160
		土師器	环	底	外表面は荒れて調整の仔細不明、内面はナデ仕上げ	Fig. 12-7 R-1307
SB-13	SP-311	土師器	环	肩	細片 1	R-258
	SP-565	土師器	环	口縁	外表面は荒れ、内面は横ナデ、外底は回転糸切り離し	Fig. 12-10 R-1252
	SP-587	土師器	环	口縁	外表面は荒れて調整の仔細不明、内面は横ナデ仕上げ	Fig. 12-8 R-1335
		土師器	?	?	細片 3	R-266
SB-14	SP-371	土師器	环	肩	細片 7	R-190
		土師器	环	肩 or 羽釜	?	#
	SP-382	土師器	?	?	細片 5	Fig. 12-9 R-1308
	SP-538	土師器	环	口縁	内外面ともに横ナデ	Fig. 12-14 R-983
SB-15	SP-281	土師器	环	口縁	内外面ともに横ナデ仕上げ	Fig. 12-16 R-1272
		土師器	?	?	細片 1	R-244
	SP-382	土師器	环	肩	細片 2	R-188
	SP-538	土師器	环	肩	細片 2	R-187
SB-16	SP-198	土師器	环	口縁	細片 1	R-203
	SP-324	土師器	环	肩	細片 2	R-208
	SP-331	土師器	?	?	細片 1	#
		土師器	环	口縁	2 次的な火熱を受け、器面の荒れが進み、調整の仔細不明	Fig. 12-17 R-1336
SB-17	SP-302	土師器	环	口縁	外表面は回転糸切り離し、底径は小片のため不確実	Fig. 12-18 R-1280
		土師器	环	肩	細片 2	R-205
		土師器	?	?	細片 1	#
	SP-334	土師器	环	底	細片 1	R-102
SB-18	SP-138	土師器	环	口縁	内外面ともに荒れが著しく、調整の仔細不明	Fig. 12-19 R-1297
SB-19	SP-106	土師器	环	底	外底は回転糸切り離し、内面は横ナデ仕上げ	Fig. 12-20 R-1337

Tab. 5 梅味遺跡 2 次調査 1 号溝出土遺物一覧

遺物番号	出土部位 層位・地区	出 土 遺 物				写真番号	遺物登録 番号	
		種類	器形	部位	特徴・遺存状態			
SD-01	I層	H-c	土師器	皿	2/3の破片 内外面ともに横ナデ、外底は回転糸切り離し	Fig.14-1	R-867	
		H-c	土師器	皿	略完整 口縁～側は横ナデ、内底はナデ、外底は糸切り離し	Fig.14-2	R-905	
		H-c	土師器	皿	1/3の破片 内外面ともに横ナデ、外底は糸切り離し	Fig.14-3	R-710	
		H-c	土師器	皿	口縁～側は横ナデ、外底は糸切り離し	Fig.14-4	R-768	
		H-c	土師器	皿	1/2の破片 口縁～側は横ナデ、内底はナデ、外底は糸切り離し	Fig.14-5	R-709	
		H-c	土師器	皿	略完整 内外面ともに横ナデ、外底は糸切り離しのまま	Fig.14-6	R-711	
		H-c	土師器	皿	口縁～肩 底近くまでの破片、内外面ともに横ナデ	Fig.14-7	R-946	
		H-c	土師器	环	口縁～肩 内外面ともに横ナデ	Fig.14-8	R-940	
		H-a	土師器	环	口縁～肩 2次の火熱を受け、表面が荒れ、調整の仔細不明	Fig.14-9	R-1000	
		H-a	土師器	环	口縁～肩 外面は荒れて調整の仔細不明、内底は横ナデ	Fig.14-10	R-705	
		H-c	土師器	环	口縁～肩 内外面ともに横ナデ、外底は糸切り離し	Fig.14-11	R-968	
		H-c	土師器	环	口縁～肩 内外面ともに横ナデ	Fig.14-12	R-997	
		H-c	土師器	环	口縁～肩 外面は器面の荒れが著しい、内面は横ナデ	Fig.14-13	R-942	
		H-c	土師器	环	口縁～肩 2次的な火熱を受け、一部赤変、器底は荒れている	Fig.14-14	R-985	
		H-c	土師器	环	口縁～肩 内外面ともに荒れが著しく、調整の仔細不明	Fig.14-15	R-1007	
		H-a	土師器	环	口縁～肩 内外面ともに荒れが著しく、調整の仔細不明	Fig.14-16	R-1010	
		H-c	土師器	环	口縁～肩 内外面ともに横ナデ	Fig.14-17	R-993	
		H-c	土師器	环	口縁～肩 内外面ともに横ナデ、口縁外面が帯状に黒変	Fig.14-18	R-994	
		D-c	土師器	环	口縁～肩 内外面ともに横ナデ	Fig.14-19	R-994	
		H-c	土師器	环	口縁～肩 内外面ともに横ナデ、口縁はやや不確実	Fig.14-20	R-965	
		H-a	土師器	环	口縁～肩 内外面ともに荒れが著しく、調整の仔細不明	Fig.14-21	R-987	
		H-a	土師器	环	口縁～肩 内外面ともに横ナデ	Fig.14-22	R-988	
		H-c	土師器	环	口縁～肩 内外面ともに荒れが著しく、調整の仔細不明	Fig.14-23	R-1001	
		H-a	土師器	环	口縁～肩 内外面ともに横ナデ	Fig.14-24	R-932	
		H-c	土師器	环	口縁～肩 内外面ともに横ナデ	Fig.14-25	R-961	
		H-c	土師器	环	口縁～肩 内外面ともに横ナデ	Fig.14-26	R-990	
	L a	土師器	皿	口縁～割	内外面ともに横ナデ、外底は回転糸切り離しのまま	Fig.14-27	R-703	
		H-c	土師器	皿	口縁～肩 内外面ともに横ナデ	Fig.14-28	R-1015	
		L a	土師器	皿	口縁～肩 内外面ともに横ナデ	Fig.14-29	R-1185	
		L a	土師器	皿?	底 内外面ともに横ナデ、外底面は不定方向のナデ	Fig.14-30	R-763	
		H-c	土師器	皿?	外底面は横ナデ、内底面は指頭で押された後ナデ	Fig.14-31	R-863	
		H-a	土師器	皿?	外底面は荒れ、内底面は横ナデ、外底は回転糸切り離し	Fig.14-32	R-771	
		H-c	土師器	环	内外面ともに横ナデ、外底には板状状底盤が残る	Fig.14-33	R-1182	
		L-a	土師器	环	外底面は横ナデ、外底は糸切り離し後に板状状底盤	Fig.14-34	R-725	
		H-c	土師器	环	外底面は荒れが窓い、外底は糸切り離しか?	Fig.14-35	R-738	
		H-c	土師器	环	内外面ともに荒れ、外底は回転糸切り離し	Fig.14-36	R-727	
		H-c	土師器	环	底 脊部縫合十手縫継タタキ底、内底には同心円凹痕	Fig.14-37	R-722	
		H-c	土師器	环	外底は荒れ、切り離し方法不明、内底には同心円凹痕	Fig.15-1	R-1183	
		H-c	土師器	环	外底は横ナデ、内底は指頭ナデ、外底は糸切り離し	Fig.15-2	R-726	
		L-a	土師器	环	外底は回転糸切り離し、内底には同心円凹痕が残る	Fig.15-3	R-934	
		H-a	土師器	环	内外面ともに横ナデ、外底は回転糸切り離し	Fig.15-4	R-732	
		H-a	土師器	环	外底面は横ナデ、内底はナデ、外底は糸切り離し	Fig.15-5	R-736	
		H-c	土師器	环	内外面ともに横ナデ、外底は回転糸切り離しのまま	Fig.15-6	R-729	
		L-a	土師器	环	内外面ともに荒れ、外底は糸切り離しの後に板状状底盤	Fig.15-7	R-1111	
		H-a	瓦器	嘴	口縁	外底面は横ナデ、内底面は器面が荒れて調整の仔細不明	Fig.15-8	R-1113
		H-a	瓦器	嘴	口縁	内外面ともに横ナデ、内底面は黒変	Fig.15-9	R-1110

SD-01	1層	H a	瓦器	堺	高台	内外面ともに荒れが著しく、調整の仔細不明	Fig.15.10	R-1114
		H-c	瓦器	堺	高台	内面はケンマ、外面は横ナデ仕上げ	Fig.15.11	R-875
		H-c	上部器	羽釜	口縁	内外面ともに横ナデ、胴外面に指擦痕	Fig.15.12	R-1630
		L-a	土器器	羽釜	口縁	内外面ともに横ナデ、胴外面に指擦痕	Fig.15.13	R-1637
		H-c	土器器	羽釜	口縁	内外面ともに横ナデ、胴外面に指擦痕	Fig.15.14	R-1039
		H-c	土器器	羽釜	口縁~割	内外面ともに横ナデ、胴外面に指擦痕	Fig.15.15	R-1024
		H-c	土器器	羽釜	口縁~割	口縁周辺は横ナデ、胴は指擦による整形の後にナデ	Fig.15.16	R-1050
		H-c	土器器	羽釜	口縁~割	口縁周辺は横ナデ、胴外面はナデ	Fig.15.17	R-1027
		L-a	土器器	羽釜	口縁~割	指擦によるナデ	Fig.15.18	R-1079
		H-a	土器器	羽釜	脚	指擦によるナデ	Fig.15.19	R-1076
		H-c	土器器	羽釜	口縁~群	口縁周辺は横ナデ、胴外面はナデ	Fig.16.1	R-1025
		H-c	土器器	羽釜	口縁~群	口縁周辺は横ナデ、胴外面はナデ	Fig.16.2	R-1033
		H-c	土器器	羽釜	口縁~群	内外面ともに横ナデ、胴外面に指擦痕	Fig.16.3	R-1041
		H-a	土器器	羽釜	口縁	内外面ともに横ナデ、胴外面に指擦痕	Fig.16.4	R-1034
		L-a	土器器	羽釜	口縁	内外面ともに横ナデ、胴外面に指擦痕	Fig.16.5	R-1084
		H-c	土器器	羽釜	口縁~群	内外面ともに横ナデ、胴外面に指擦痕	Fig.16.6	R-1042
		H-a	瓦器	羽釜	口縁~群	外表面はナデ、内面は横ナデ、外面の一部は火熱で剥落	Fig.17.1	R-1055
		H-a	土器器	土鍋	口縁	口縁は横ナデ、外表面はナデ、胴内面は強いナデつけ	Fig.17.2	R-1060
		H-c	土器器	土鍋	口縁~群	口縁は横ナデ、外表面はナデ、胴内面は強いナデつけ	Fig.17.3	R-1028
		H-a,c	土器器	茶釜	口縁~群	外表面は指擦・ヘラナデ、一部ハケメ残存、内面はハケメ	Fig.17.4	R-1040
		H-c	土器器	茶釜	西	蓋の先端を失し、外表面は横ナデ、内面はハケメ	Fig.17.5	R-1085
		H-a	東播系	こね鉢	口縁	外表面は横ナデ、口唇部に炭化物が帯状に付着	Fig.17.6	R-1106
		H-c	東播系	こね鉢	口縁	口縁周辺は横ナデ、外表面には強い指擦によるナデ	Fig.17.7	R-1357
		H-c	東播系	こね鉢	口縁	内外面ともに横ナデ、口唇部に自然焦	Fig.17.8	R-1102
		H-c	東播系	こね鉢	口縁~群	口縁周辺は横ナデ、内面はナデ	Fig.18.1	R-1058
		H-a	東播系	こね鉢	底	内外面ともに横ナデ、外底は糸切り離し後に板状化痕	Fig.18.2	R-1163
		H-c	備前焼	鐵鉢	口縁~群	内外面ともに横ナデ	Fig.18.3	R-1169
		K b	備前焼	鐵鉢	口縁~群	内外面ともに横ナデ、内面の磨擦が進む	Fig.18.4	R-1171
		L a	備前焼	鐵鉢	底	底側縁はヘラナデ、余分な粘土が一溜めくれる	Fig.18.5	R-1170
		H a	備前焼	鐵鉢	底	底側縁はヘラナデ、内面と外底面はナデ	Fig.18.6	R-1160
		H-a	龜山焼	壺	口縁	内外面ともに横ナデ仕上げ	Fig.18.7	R-1122
		H-a	龜山焼	壺	口縁	肩はタキ調整で強く叩き締められている	Fig.18.8	R-1358
		H-a	土肥器	壺	口縁	外表面は平行尖鋒のタキの後に、頗近くをナデ	Fig.18.9	R-1088
		H-c	磁器	青磁	口縁	龍泉窯系青磁	Fig.18.10	R-1146
		H-c	磁器	青磁	高台	龍泉窯系青磁	Fig.18.11	R-1140
		H-a	磁器	白磁	口縁	全底に拘丸、外表面は回転ヘラケズリ	Fig.18.12	R-1156
		H-a	磁器	白磁	底	底は灰白色、施に茶い	Fig.18.13	R-1142
		H-c	磁器	白磁	高台	内底に目跡、高台疊書きを部分的に閉る	Fig.18.14	R-1141
		H-c	須恵器	杯身	口縁	器面の荒れと磨擦が著しい、混入品	Fig.19.1	R-1108
		H-c	須恵器	杯身	口縁	器面の荒れと磨擦が著しい、混入品	Fig.19.2	R-1120
		L-a	弥生土器	甕	底	外底はナデ、内面は荒れが進み、調整の仔細不明	Fig.19.3	R-1157
SD-01	2層	H c	上部器	皿	口縁~群	内外面ともに荒れが著しい、外底は回転糸切り離し	Fig.20.1	R-857
		H a	上部器	皿	口縁~群	内外面ともに横ナデ	Fig.20.2	R-974
		H c	上部器	皿	口縁	内外面ともに横ナデ	Fig.20.3	R-1013
		L a	上部器	皿	口縁~群	内外面ともに横ナデ	Fig.20.4	R-1002
		H a	土器器	皿	略尖形	内外面ともに横ナデ、外底は回転糸切り離し	Fig.20.5	R-701
		H c	土器器	皿	略尖形	内外面ともに横ナデ、外底は回転糸切り離し	Fig.20.6	R-906
		H a	土器器	皿	略尖形	外底は糸切り離し後に板状化痕、内底に同心円状痕	Fig.20.7	R-1093
		H a	土器器	皿	口縁~群	内外面ともに横ナデ	Fig.20.8	R-1005

SD-01	2層	H-a	土師器	坏	口縁~胴: 内外面ともに器面の荒れが著しく、調査の仔細不明 口縁~胴: 内外面ともに横ナデ	Fig.20-9 Fig.20-10	R-944 R-1093
		H-a	土師器	坏	口縁~胴: 内外面ともに横ナデ、胴下半の器面は荒れでいる	Fig.20-11	R-975
		H-c	土師器	坏	口縁~胴: 内外面ともに横ナデ	Fig.20-12	R-938
		H-a	土師器	坏	口縁~胴: 2次的な火熱を受け、器面の荒れが著しい	Fig.20-13	R-954
		H-c	土師器	坏	口縁~胴: 内外面ともに器面の荒れが著しく、調査の仔細不明	Fig.20-14	R-957
		H-a	土師器	坏	口縁~胴: 内外面ともに横ナデ、口径はやや不整実	Fig.20-15	R-973
		H-c	土師器	坏	口縁~胴: 内外面ともに横ナデ	Fig.20-16	R-948
		D-c	土師器	坏	口縁~胴: 内外面ともに横ナデ	Fig.20-17	R-1347
		H-a	土師器	坏	口縁~胴: 内外面ともに横ナデ	Fig.20-18	R-992
		H-c	土師器	坏	口縁~胴: 内外面ともに横ナデ	Fig.20-19	R-1347
		D-c	土師器	坏	口縁~胴: 内外面ともに横ナデ	Fig.20-20	R-981
		D	土師器	坏	口縁~胴: 内外面ともに横ナデ	Fig.20-21	R-1098
		H-c	土師器	坏	口縁~胴: 内外面ともに横ナデ	Fig.20-22	R-941
		H-a	土師器	底	腹部は横ナデ、内底はナデ、外底は糸切り離し	Fig.20-23	R-785
		H-c	土師器	底	内外面ともに横ナデ、外底は糸切り離し	Fig.20-24	R-926
		H-a	土師器	底	腹部は横ナデ、内底に同心円状痕、外底は糸切り離し	Fig.20-25	R-721
		H-c	土師器	底	内外面ともに横ナデ、外底に糸切り離し後に板目状痕	Fig.20-26	R-719
		H-c	土師器	底	腹部は横ナデ、内底はナデ、外底は糸切り離し	Fig.20-27	R-728
		H-c	土師器	底	内底に同心円状痕、外底は糸切り離し後に板目状痕	Fig.20-28	R-937
		H-c	土師器	底	内底に同心円状痕、外底は糸切り離し後に板目状痕	Fig.20-29	R-718
		H-a	土師器	底	内底に同心円状痕、外底は糸切り離し後に板目状痕	Fig.20-30	R-714
		H-a	瓦器	碗	高台	Fig.21-1	R-796
		H-a	瓦器	碗	高台	Fig.21-2	R-887
		H-c	瓦器	碗	高台	Fig.21-3	R-797
		H-c	瓦器	碗	高台	Fig.21-4	R-1118
		H-c	土師器	羽釜	口縁	Fig.21-5	R-1045
		L-a	土師器	羽釜	口縁周辺は横ナデ、胴外面は指頭整形、内面はナデ	Fig.21-6	R-1023
		H-c	土師器	羽釜	口縁周辺は横ナデ、胴外面はナデ	Fig.21-7	R-1026
		H-c	土師器	羽釜	口縁周辺は横ナデ、胴外面は指頭整形、内面はナデ	Fig.21-8	R-1022
		H-c	土師器	羽釜	口縁は横ナデ、胴外面は指頭整形、内面はヘラナデ	Fig.21-9	R-1020
		D-c	土師器	羽釜	口縁周辺は横ナデ、胴外面に指頭による整形痕が残る	Fig.21-10	R-1035
		H-c	土師器	羽釜	脚 指頭により整形・ナデ	Fig.21-11	R-1049
		H-c	土師器	羽釜	脚 指頭により整形・ナデ	Fig.21-12	R-1064
		H-c	土師器	羽釜	口縁周辺は横ナデ、胴外面はナデ、脚は指でナデ	Fig.22-1	R-1031
		H-c	瓦質土器	羽釜	口縁周辺は横ナデ、胴外面はナデ	Fig.22-2	R-1082
		H-c	瓦質土器	羽釜	内外面ともに横ナデ仕上げ	Fig.22-3	R-1351
		H-c	瓦質土器	羽釜	口縁周辺は横ナデ、胴外面はヘラで擦過	Fig.22-4	R-1086
		H-c	瓦質土器	羽釜	口縁周辺は横ナデ、胴外面はヘラで擦過	Fig.22-5	R-1359
		H-c	土師器	土鍋	口縁~胴内面は横ナデ、外西は指頭整形後にナデ	Fig.22-6	R-1061
		H-c	土師器	土鍋	口縁周辺は横ナデ、胴外面は指頭整形、内面はハケメ	Fig.22-7	R-1048
		H-c	土師器	土鍋	口縁周辺は横ナデ、胴外面はナデ、外底はヘラで擦過	Fig.23-1	R-1029
		H-c	土師器	土鍋	口縁周辺は横ナデ、胴下部はヘラで擦過	Fig.23-2	R-1087
		H-c	東播系	こね鉢	口縁 内外面ともに横ナデ	Fig.23-3	R-1095
		H-c	東播系	こね鉢	口縁~胴外面は横ナデ、胴内面の想滅著しい	Fig.23-4	R-1097
		H-a	東播系	こね鉢	口縁 内外面ともに横ナデ、胴外面に薄く傷が付着	Fig.23-5	R-1103
		H-c	東播系	こね鉢	口縁 内外面ともに横ナデ、口唇面に自然釉	Fig.23-6	R-1099
		H-c	東播系	こね鉢	口縁~胴外面は横ナデ、胴内面の想滅著しい	Fig.23-7	R-1158
		H-c	須恵器	壺	口縁 内外面ともに横ナデ、外面には薄く自然釉がかかる	Fig.23-8	R-1101
		H-c	常滑焼	壺	口縁 内外面ともに横ナデ、外面には薄く自然釉がかかる	Fig.23-9	R-1124

SD-01	2層	H-c	舊前焼 常滑燒	播鉢	口縁~肩：内外面ともに横ナデ、口縁下端は内側へ一部折れ曲がる 目：外面には自然釉が残っている	Fig.23-10 Fig.24-1	R-1164 R-1356
		H-c	酒甕 甕？	？	底：外底は回転条切り離し、内底は指頭による押さえ	Fig.24-2	R-1352
		H-c	青磁	碗	同安窯系青磁	Fig.24-3	R-1355
		H-a	青磁	碗	同安窯系青磁	Fig.24-4	R-1353
		L-a	青磁	碗	鹿泉窯系青磁	Fig.24-5	R-1354
		L-a	青磁	碗	鹿泉窯系青磁	Fig.24-6	R-1138
		H-c	發生土器	甕	器面の荒れが進む、肩部凸帯のキザミは仄で施文	Fig.24-7	R-1137
		H-c	石製品	研	赤色貝凸製	Fig.24-8	R-1134
		H-c	瓦	平瓦	外側には斜格子タタキ、内面には布压痕	Fig.24-9	R-1172
		L-a	瓦	平瓦	側壁はヘラで削取り	Fig.24-10	R-1173
		H-c	龜山燒	甕	口縁~肩：口縁は横ナデ、外面は格子タタキ、内面はナデ仕上げ	Fig.25-1	R-1360
		H-c	土師器	皿	1/10断片；内外面ともに横ナデ、外底は回転条切り離し	Fig.26-1	R-1019
		H-c	土師器	皿	2/30断片；外底は回転条切り離し、内底には指頭圧痕が残る	Fig.26-2	R-704
		H-c	土師器	环	1/10断片；内外面ともに横ナデ、外底は回転条切り離し	Fig.26-3	R-707
		H-c	土師器	环	口縁~肩：内外面ともに横ナデ	Fig.26-4	R-951
		H-c	土師器	环	口縁~肩：内外面ともに横ナデ	Fig.26-5	R-949
		H-a	土師器	环	口縁：内外面ともに横ナデ	Fig.26-6	R-1009
		L-a	土師器	环	口縁：内外面ともに荒れが著しく、調整の仔細不明	Fig.26-7	R-1350
		L-a	土師器	环	外底は荒れ調整の仔細不明、内面は横ナデ	Fig.26-8	R-845
		H-c	土師器	底	内外面ともに横ナデ、外底は糸切り離し	Fig.26-9	R-850
		L-a	土師器	底	外底は荒れ調整の仔細不明、外底は糸切り離し	Fig.26-10	R-783
		H-c	土師器	环	外底は糸切り離し後に板目状圧痕、内底は指頭圧痕	Fig.26-11	R-713
		H-c	土師器	羽釜	口縁周辺は横ナデ、肩外側は指頭整形の後にナデ	Fig.26-12	R-1043
		H-c	土師器	土鍋	口縁周辺は横ナデ、肩外側は指頭整形の後にナデ	Fig.26-13	R-1047
		H-c	土師器	堀	内外面ともに横ナデ	Fig.26-14	R-902
		H-c	丸腰系 こね鉢	口縁	内外面とも横ナデ	Fig.26-15	R-1105
		H-c	青磁	碗	同安窯系青磁	Fig.26-16	R-1149
		H-c	青磁	碗	刃差と基部を欠損	Fig.27-1	R-1167
		H-c	石器	石斧	外側はヘラで削る、内面には布压痕	Fig.27-2	R-1174
		H-c	瓦	平瓦	花崗岩の自然縫をそのまま利用、全面に保付着	Fig.27-3	R-1116
		H-c	石製品	支脚	花崗岩の自然縫を半切して利用、煤が付着	Fig.27-4	R-1165
		H-c	石製品	支脚			

Tab. 6 検味跡 2次調査 棚列出土遺物一覧

遺物番号	柱穴(小穴) 番号	出 土 遺 物				検査番号	遺物登録 番号
		種類	器形	部位	遺存状態		
SA-22	SP-315	土師器	环	肩	細片3	Fig.35-1	R-254
		土師器	环	底	内外面ともに器面が荒れて、調整の仔細不明		R-1338
		土師器	羽釜	肩	細片1		R-254
SA-23	SP-134	土師器	？	？	細片1	R-111	
	SP-141	常滑焼	甕	肩	細片1		R-217

Tab. 7 横味遺跡 2次調査 2・5~7号溝出土遺物一覧

遺構番号	地区	出土遺物			特徴・保存状態	撮影番号	遺物登録番号
		種類	器形	部位			
SD-02	G-b区	土師器	壺	口縁	内外面ともに横ナデ調整で仕上げる	Fig. 29-1	R-1206
		土師器	壺	口縁	内外面ともに横ナデ調整で仕上げる	Fig. 29-2	R-1204
	C-b区	土師器	壺	口縁	内外面ともに表面の荒れが進み、底盤の仔細不明	Fig. 29-3	R-1202
	G-b区	土師器	不	底	表面の荒れが進むが、外底は余切り離し、他は横ナデ	Fig. 29-4	R-1201
		土師器	壺	底	外底は余切り離しのまま、他は横ナデ	Fig. 29-5	R-1203
	C-d区	土師器	羽釜	口縁	内外面ともに横ナデ、底以下には煤が付着	Fig. 29-6	R-1206
	G-b区	瓦質土器	羽釜	口縫	内外面ともに横ナデ調整で仕上げる	Fig. 29-7	R-1343
	C-d区	土師器	壺	別	細片1		R-285
		土師器	羽釜	別	細片2		R-
SD-05	B-d区	土師器	壺	口縫	細片2		R-299
		土師器	壺	洞	細片1		R-
		土師器	羽釜	別	細片6、外側には煤が付着		R-
	CK柱張部分	土師器	不	口縫	内外面ともに横ナデ調整、外底は余切り離し	Fig. 29-8	R-1208
		青磁	碗	高台	河原窯系青磁、内外面に棒状工具で捺文	Fig. 29-9	R-1207
		土師器	壺	別	細片2		R-194
		土師器	壺	底	細片1		R-
		土師器	羽釜	別	細片2		R-
		土師器	?	?	新片2		R-
SD-06	G-b区	土師器	壺	底	内外面ともに横ナデ調整、外底は余切り離し	Fig. 29-10	R-1285
		土師器	羽釜	口縫	外底はナデ調整、内面はハケメ調整の後にナデ仕上げ	Fig. 29-12	R-1264
		青磁	碗	高台	混入品か?	Fig. 29-11	R-1361
		土師器	壺	別	細片3		R-286
		土師器	羽釜	別	細片1		R-
		土師器	羽釜	別	細片2		R-
		土師器	?	?	細片1		R-268
		土師器	壺	別	細片3		R-264
		土師器	羽釜	口縫	内外面ともに横ナデ調整、底以下には煤が付着	Fig. 29-13	R-1342
SD-07	J-b区	土師器	羽釜	口縫	内外面ともに横ナデ調整	Fig. 29-14	R-1211
		土師器	羽釜	別	細片4		R-284
		土師器	壺	別	細片3		R-284
		土師器	羽釜	別	底		R-1225
	J-b区	土師器	壺	口縫	内外面ともに横ナデ調整、外底は細片のために不確実	Fig. 29-16	R-1227
	J-b区	土師器	壺	口縫	内外面ともに横ナデ調整、外底は余切り離し	Fig. 29-17	R-1228
	J-a区	土師器	壺	底	内外面ともに横ナデ調整、外底は余切り離し	Fig. 29-18	R-1222
	K-a区	土師器	壺	底	内外面ともに横ナデ調整、外底は余切り離し	Fig. 29-19	R-1266
	J-b区	土師器	不	底	内外面ともに横ナデ調整、外底は余切り離し	Fig. 29-20	R-1217
	J-b区	土師器	壺	底	内外面ともに横ナデ調整、外底は余切り離し	Fig. 29-21	R-1214
	J-b区	土師器	壺	底	外底は余切り離し、内底には同心円の当て具出痕	Fig. 29-22	R-1219
	J-b区	土師器	羽釜	口縫	外底は捺痕による押圧調整、内面はナデ調整	Fig. 29-23	R-1213
	J-b区	瓦質土器	?	別	外側は格子タッキ、内面はハケメ調整が施される	Fig. 29-24	R-1345
	I-b区	青磁	碗	口縫	龍泉窯系青磁、釉は薄い	Fig. 29-26	R-1300
	K-a区	青磁	碗	口縫	龍泉窯系青磁	Fig. 29-25	R-1229
	J-b区	土製品	?	砂岩質	土師器皿の底部分の擦縁を一部塗装している	Fig. 29-27	R-1221
	J-b区	石臼	砂岩質	?	破片1	Fig. 29-28	R-1344

SD-07	J-a区	備前焼	裏	口縁	内外面ともに崩ナデ	Fig. 29-29	R-338
	J-a区	土器番	坏	口縁	細片 1		R-302
		土器番	坏	胴	細片 10		/
		土器番	坏	底	細片 3、とともに外底は余切り崩し		/
		土器番	羽釜	胴	細片 2		/
		土器番	?	?	細片 2		/
		東遼系	こね鉢	胴	破片 1		R-328
		良賀土器	?	?	外表面はナデ調整、内面には磨削波の当て具痕、破片 1		R-302
		瓦	平瓦	?	破片 1		/
		粘土塊	?	?	破片 4、火熱を受け塊状になっている		/
	J-b区	七輪器	坏	口縁	細片 2		R-289
		七輪器	坏	口縁	細片 2		R-303
		土器番	坏	胴	細片 2		R-307
		土器番	坏	胴	細片 36		R-280
		土器番	坏	胴	細片 4		R-303
		土器番	坏	底	細片 2、とともに外底は余切り崩し		/
		土器番	坏	底	細片 4、とともに外底は余切り崩し		R-280
		土器番	羽釜	口縁	細片 3		/
		土器番	羽釜	胴	細片 14		/
		土器番	羽釜	?	破片 1、外側には擦が付着		R-305
		土器番	羽釜	?	破片 3		R-303
		土器番	羽釜	?	破片 1		/
		土器番	羽釜	?	破片 1		R-280
		土器番	?	?	細片 21		/
		瓦	明	?	破片 1		R-303
		備前焼	?	?	細片 1		/
		龜山焼	?	?	細片 5、外表面には格子タキが残る		R-280
		須恵器	坏	胴	細片 1、古墳時代後期		/
		吉窯	?	?	細片 1、龍泉窯系吉窯		/
		炊器	?	?	細片 1、器種など細片であるために詳細不明		/
		自然鉢	?	?	破片 2、とともに強い火熱を受け赤変		/
	K-a区	土器番	坏	口縁	細片 1		R-273
		土器番	坏	胴	細片 4		R-287
		土器番	坏	?	細片 2		R-273
		土器番	坏	底	細片 1、外底は余切り崩し		/
		土器番	羽釜	?	細片 4		R-287
		土器番	羽釜	?	細片 2		R-273
		土器番	?	?	細片 3		R-287
		東遼系	こね鉢	?	細片 1		R-273
		青磁	?	?	細片 1、龍泉窯系青磁		R-287

Tab. 8 梅味遺跡 2次調査 土壌出土遺物一覧

遺構番号	地区	出土遺物			擲出番号	遺物登録番号	
		種類	器形	部位	特徴・遺存状態		
SK-08	J区	偏前施	甕	口縁	内外面ともに横ナデ仕上げ	Fig. 30-1	R-1175
		石製品	石臼		砂岩製、火熱を受ける	Fig. 30-2	R-1312
		石製品	石臼		砕石製	Fig. 30-3	R-1341
		土師器	羽釜	唇	細片 1		R-232
SK-25	C区拡張区	土師器	坏	口縁	内外面とも荒れが著しい、黄色みを帯びた灰白色	Fig. 32-1	R-1273
		土師器	坏	口縁	内外面とも横ナデ調整、淡黄褐色	Fig. 32-2	R-1266
		土師器	坏	口縁	内外面とも横ナデ調整、やや黄色みを帯びた灰白色	Fig. 32-3	R-1270
		土師器	坏	口縁	内外面とも横ナデ調整、やや黄色みを帯びた灰白色	Fig. 32-4	R-1277
		土師器	坏	口縁	内外面とも横ナデ調整、灰白色	Fig. 32-5	R-1274
		土師器	坏	底	外底は糸切り離し、内面は横ナデ、底辺は不確実	Fig. 32-6	R-1293
		土師器	坏	口縁	細片 8		R-330
		土師器	坏	剥	細片 23		II
		土師器	坏	底	細片 13		II
		土師器	羽釜	刷	細片 5		II
		土師器	?	刷	細片 2		II
		東晉系	こね鉢	群	細片 2		II
		土師器	坏	底	外底は糸切り離し、内面は横ナデ調整、灰白色	Fig. 32-7	R-1292
		土師器	羽釜	底	外底はナデ調整、内面は指標によるナデ調整、黄灰色	Fig. 32-8	R-1339
		瓦	丸瓦		外側はヘラ状工具でケズリ調整、内面は布压痕が残る	Fig. 32-9	R-1341
		土師器	羽釜	底	外表面とも横ナデ、底以下には煤付着、黄い橙色 細片 2、外側は2次的な強い火熱を受けている		R-341
SK-26	I-b区	土師器	坏	底	外底は糸切り離し、内面は横ナデ調整、灰白色	Fig. 32-7	R-1292
		土師器	羽釜	底	外底はナデ調整、内面は指標によるナデ調整、黄灰色	Fig. 32-8	R-1339
		瓦	丸瓦		外側はヘラ状工具でケズリ調整、内面は布压痕が残る	Fig. 32-9	R-1341
		土師器	羽釜	底	外表面とも横ナデ、底以下には煤付着、黄い橙色 細片 2、外側は2次的な強い火熱を受けている		R-341

Tab. 9 梅味遺跡 2次調査 水口出土遺物一覧

遺構番号	地区	出土遺物			擲出番号	遺物登録番号	
		種類	器形	部位			
SM-03	G-K区	土師器	坏	口縁	内外面とも横ナデ調整、黄色みを帯びた灰白色	Fig. 35-1	R-1235
		土師器	坏	口縁	内外面とも横ナデ調整、黄色みを帯びた灰白色	Fig. 35-2	R-1236
		土師器	坏	底	外底は糸切り離しのまま、他は横ナデ調整、灰白色	Fig. 35-3	R-1234
		土師器	坏	底	外底は糸切り離しのまま、内底面は指標によるナデ調整	Fig. 35-4	R-1340
		土師器	羽釜	口縁	内外面とも横ナデ、底以下には煤付着、純い橙色	Fig. 35-5	R-1233
		土師器	羽釜	口縁	内外面とも横ナデ、底以下には煤付着、純い橙色	Fig. 35-6	R-1232
		瓦蓋上屋	?	口縁	黄灰色	Fig. 35-7	R-1231
		土師器	坏	底	細片 11		R-121
		土師器	坏	刷	細片 2。ともに外底は糸切り離し		II
		土師器	羽釜	刷	細片 2。ともに外底は糸切り離し		II
SM-04	G区	土師器	?	刷	細片 1		R-156
		土師器	坏	底	細片 2		II
		土師器	羽釜	刷	細片 2		II
		瓦	丸瓦	刷	細片 1		II
		偏前施	?	刷	細片 1		II
		龜山焼	?	刷	細片 1		II
		石製品	石硯	底部	赤色質		R-1237

Tab. 10 特殊遺跡 2 次調査 C 頸小穴と出土遺物一覧

遺構番号	地 区	平面形	現存の規模(cm)					出 土 遺 物			掲回番号	遺物登録番号
			直 径	深さ	種 類	器 形	部 位	遺存状態	備考			
SP-109	A-d 区	楕円形	30.0×16.0	23.0	土師器	羽釜	胸	細片 1			R-173	
SP-122	B-c 区	円形	16.0×17.0	13.8	土師器	坏	底	細片 1			R-192	
SP-127	B-d 区	円形	17.0×15.0	6.7	土師器 十削器	坏	底	細片 1			R-110	
SP-150	C-c 区	円形	11.0×11.0	4.2	土師器	坏	底	底は不確定・余切り痕		Fig. 38-2	R-1279	
SP-160	C-c 区	楕円形	23.0×14.0	5.4	土師器	坏	底	細片 1			R-195	
SP-192	E-b 区	円形	28.0×24.0	26.8	土師器 土師器	坏	胸	細片 3			R-175	
						羽釜	口縁	底以下に埋付着		Fig. 38-23	R-1313	
SP-193	E-b 区	楕丸形	33.0×20.0	29.1	土師器	坏	胸	細片 2			R-174	
					土師器	羽釜	剥	細片 1			〃	
					土師器	羽釜	剥	細片 1			〃	
SP-204	F-a 区	円形	14.0×19.0	13.4	土師器	坏	底	細片 1			R-176	
SP-233	F-b 区	楕円形	54.0×105.0	22.7	土師器	?	?	細片 3			R-311	
SP-242	F-b 区	円形	21.0×21.0	36.4	土師器	坏	口縁	細片 1			R-255	
SP-244	F-b 区	円形	17.0×16.0	8.6	土師器	坏	口縁	2 次的に火熱を受ける		Fig. 38-13	R-1314	
SP-257	G-a 区	円形	13.0×19.0	35.5	土師器	坏	胸	細片 1			R-248	
					土師器	坏	底	細片 1			〃	
					土師器	?	?	細片 2			〃	
SP-264	G-a 区	楕円形	24.0×34.0	4.9	土師器	坏	底	1/4の破片		Fig. 38-4	R-1250	
					上師器	坏	口縁	細片 2			R-259	
					土師器	坏	底	細片 3			R-11	
SP-269	G-a 区	楕円形	12.0×16.0	3.8	土師器	坏		2/3の破片		Fig. 38-5	R-1253	
					土師器	坏		1			R-1247	
					十削器	坏		細片 3			R-167	
SP-270	G-a 区	円形	20.0×22.0	15.8	龜山城	壇	胸	傾き不明		Fig. 38-25	R-1315	
SP-282	G-a 区	円形	20.0×21.0	10.2	土師器	坏	剥	細片 1			R-165	
SP-285	G-a 区	円形	18.0×18.0	28.7	土師器	坏	剥	細片 1			R-242	
SP-286	G-a 区	円形	30.0×28.0	41.7	土師器	直	口縁	内外面とも荒れが著しい		Fig. 38-1	R-1268	
					土師器	坏	口縁	細片 1			R-243	
					土師器	坏	胸	細片 3			〃	
					土師器	羽釜	胸	細片 2			〃	
SP-299	G-a 区	楕円形	18.0×24.0	6.4	土師器	坏	口縁	細片 2			R-251	
					十削器	羽釜	口縁	底以下に埋付着		Fig. 38-22	R-1316	
					土師器	羽釜	胸	細片 2			R-251	
SP-307	G-b 区	円形	19.0×17.0	12.6	土師器	羽釜	剥	細片 1			R-249	
SP-308	G-b 区	楕円形	30.0×42.0	31.6	土師器	坏	胸	細片 1			R-192	
SP-309	G-b 区	円形	12.0×15.0	6.5	土師器	坏	胸	細片 2			R-262	
SP-310	G-b 区	楕円形	15.0×22.0	16.3	土師器	坏	口縁	細片 1			R-253	
SP-313	G-b 区	円形	14.0×12.0	18.3	土師器	坏	底	糸切りの後に板目状化粧		Fig. 38-3	R-1278	
SP-314	G-b 区	楕円形	15.0×24.0	4.6	土師器	坏	胸	細片 2			R-298	
					十削器	坏	底	細片 2			〃	
					土師器	羽釜	胸	細片 1			〃	
					束推器	羽釜	胸	細片 1			〃	

SP-317	G-b 区	椭円形	41.0×30.4	9.3	土師器 上部器 土師器 土師器 上部器 上部器 常滑燒 ?	坏 坏 坏 坏 坏 坏 坏?	口縫 口縫 口縫 口縫 口縫 口縫 口縫 ?	全体に粗面なつくり 細片 2 細片 1 細片 2 底径は不確実 R-1317 と同一個体 細片 2	Fig. 38-6 R-1317 R-301
SP-325	E-d 区	椭円形	22.0×31.0	34.0	土師器 ?	坏	底	系切りの後に板状圧痕	Fig. 38-8 R-1294
SP-336	F-d 区	椭円形	24.0×27.0	26.6	土師器 ?	坏	底	略光沢系切り底	Fig. 38-14 R-1245
SP-340	F-c 区	円形	22.0×19.0	7.4	土師器 羽釜	羽釜	銅	細片 1	R-103
SP-341	F-c 区	椭円形	27.0×21.0	8.8	束腰系 ?	?	銅	細片 1	R-204
SP-345	F-c~j-a	円形	30.0×30.0	21.4	土師器 土師器 鐵製品 ?	坏 羽釜 鉗?	口縫 銅 銅 ?	細片 2 細片 1 細片 2	R-224 〃 〃
SP-370	F-d 区	椭円形	15.0×24.0	18.6	土師器 ?	坏	底	細片 1	R-219
SP-373	F-d 区	椭円形	24.8×28.0	15.0	土師器 ?	羽釜	銅	細片 1	R-221
SP-376	F-d 区	椭円形	13.0×16.0	6.9	土師器 上部器 土師器	坏	口縫 銅 羽釜	細片 2 細片 1 細片 1	R-216 R-218 〃
SP-384	F-d 区	円形	21.0×19.0	21.7	土師器 ?	坏	銅	細片 4	R-240
SP-385	F-d 区	椭円形	82.0×19.0	4.3	土師器 瓦器 土師器	坏 塊	銅 高台	細片 2 内外面とも荒れが著しい	R-239 Fig. 38-21 R-1319
SP-387	F-d 区	円形	23.0×23.0	27.9	土師器 土師器 ?	坏 羽釜	銅 銅	細片 1 細片 1 細片 1	R-260 〃 R-239
SP-388	F-d 区	円形	22.0×24.0	13.9	上部器 ?	羽釜	銅	細片 2	R-238
SP-407	I-b 区	椭円形	22.0×25.0	9.7	土師器 ?	坏	銅	細片 2	R-180
SP-411	I-b 区	椭円形	28.0×21.0	11.1	土師器 ?	坏	銅	細片 1	R-209
SP-412	I-b 区	椭円形	25.0×29.0	27.1	土師器 土師器	坏	銅 口縫	細片 3 細片 1	R-212 Fig. 38-24 R-1320
SP-414	I-b 区	円形	14.0×16.0	29.5	燒點土塊 燒粘土塊	?	底	1	R-213
SP-415	I-b 区	円形	19.0×20.0	22.5	土師器 燒粘土塊	坏	底	内外面とも荒れが著しい	Fig. 38-9 R-1286 R-230
SP-416	I-b 区	椭円形	27.0×23.0	31.6	上部器 土師器 土師器 土師器 須恵器	坏 坏 坏 羽釜 ?	口縫 銅 銅 銅 銅	細片 1 細片 1 細片 1 細片 1 細片 1	R-229 R-218 R-229 R-229 〃
SP-419	I-b 区	椭円形	20.0×35.0	58.5	土師器 土師器 土師器 須恵器	坏	底	細片 2 細片 2 細片 1 細片 1	R-228 〃 〃 〃
SP-423	I-b 区	円形	23.0×21.0	41.0	土師器 ?	?	銅	細片 4	R-231
SP-424	I-b 区	椭円形	26.0×	30.8	土師器 燒粘土塊	坏	口縫	細片 1 1	R-179 R-106
SP-430	J-a-I-b 区	椭円形	22.0×18.0	36.3	上部器 土師器 土師器 須恵器	坏 坏 羽釜 ?	口縫 銅 銅 口縫	細片 1 細片 4 細片 1 古墳時代、誤入	R-247 〃 〃 R-226
SP-435	J-a 区	椭円形	21.0×31.0	24.9	燒點土塊	?	底	東亞1728	Pl. 10-16 R-1321

SP-534	G-c 区	楕円三重形	20.0×20.0	6.7	土師器	羽釜	刷	細片1	R-162
SP-535	G-c 区	菱形輪郭形	32.0×16.0	12.7	土師器	坏	口縁	細片1	R-236
SP-540	G-c 区	楕円形	24.0×34.0	22.0	土師器	坏	口縁	細片2	R-261
					土師器	坏	刷	細片1	R
					土師器	羽釜	刷	細片1	R
SP-541	G-c 区	楕円形	119.0×35.0	6.9	土師器	坏	底	系切り底	R-237
SP-544	G-c 区	楕円形	17.0×23.0	6.3	土師器	坏	刷	細片2	R-235
					土師器	羽釜	刷	細片1	R
SP-546	G-c 区	楕円形	17.0×23.0	9.8	土師器	坏	底	内外面とも横オテ調整	Fig. 38-16 R-1291
SP-556	G-c 区	楕円形	22.0×34.0	35.5	土師器	坏	刷	細片3	R-209
					土師器	羽釜	刷	細片1	R-184
SP-574	G-c 区	楕円形	24.0×17.0	?	土師器	坏	口縁	細片1	R-168
					土師器	坏	口縁	細片1	R-265
					土師器	坏	刷	細片1	R
					土師器	坏	底	細片1	R-168
					土師器	羽釜	刷	細片2	R-265
SP-594	G-b-G-d	円形	20.0×18.0	19.0	土師器	羽釜	刷	細片1	R-198
SP-602	J-d 区	円形	17.0×18.0	32.9	土師器	坏	底	系切り底	R-1361
SP-614	K-b 区	楕円形	29.0×22.0	15.9	土師器	羽釜	刷	細片1	R-257
SP-618	G-d 区	楕丸形	48.0×33.0	6.5	土師器	坏	口縁	細片1	R-269
					土師器	坏	刷	細片7	R
					土師器	羽釜	刷	細片2	R
SP-633	J-d 区	楕円形	29.0×21.0	8.0	土師器	羽釜	刷	細片1	R-170
SP-635	F-c 区	楕円形	40.0×27.0	8.0	土師器	?	刷	細片1	R-104
SP-661	払張区	楕円形	17.0×13.0	6.0	土師器	坏	口縁	細片2	R-331
					土師器	坏	刷	細片6	R
					土師器	羽釜	口縁	細片1	R
					土師器	羽釜	刷	細片2	R
SP-662	J-a-J-b 区	楕円形	40.0×26.0	41.5	土師器	?	?	1/3の破片、板目状注意	Fig. 38-19 R-1244
					土師器	?	?	系切り底	Fig. 38-18 R-1246
					土師器	?	?	系切り底	Fig. 38-17 R-1240
					土師器	坏	刷	細片4	R-338
					土師器	坏	刷	細片1	R
					土師器	坏	底	細片1	R
					土師器	坏	刷	細片3	R
					土師器	羽釜	刷	細片1	R
					須恵器	?	刷	細片1	R
SP-680	I-b 区	円形	21.0×22.0	20.2	土師器	坏	口縁	口縁は不確実	Fig. 38-29 R-1271
					土師器	坏	口縁	細片1	R-334
					土師器	坏	刷	細片2	R
SP-687	I-b 区	円形	18.0×17.0	36.5	土師器	坏	口縁	細片2	R-333
					土師器	坏	刷	細片1	R

Tab. II 様味遺跡2次調査 III・IV層出土遺物一覧

辨認番号	層位	地区	出土遺物				遺物登録 番号
			種類	器形	部位	特徴・遺存状態	
Fig. 40-1	III層	D c	土師器	环	略完形	内外面ともに横ナデ、外底は余切り加工	R-907
Fig. 40-2	III層	G d	土師器	环	口縁～胴	内外面ともに横ナデ	R-945
Fig. 40-3	III層	H a	土師器	环	口縁～胴	内外面ともに横ナデ	R-947
Fig. 40-4	III層	D-c	土師器	环	底	器底の荒れが進む、外底は余切り加工	R-933
Fig. 40-5	III層	H-a	土師器	环	底	内外面ともに横ナデ、外底は余切り加工	R-936
Fig. 40-6	III層	G-d	土師器	堀	高台	内外面ともに荒れが著しく、調整の仔細不明	R-903
Fig. 40-7	III層	H-a	土師器	羽釜	口縁～胴	口縁は横ナデ、胴外面は指頭整形後にナデ、内面ナデ	R-1081
Fig. 40-8	III層	H-a	土師器	羽釜	口縁～胴	口縁周辺は横ナデ、胴外面は指頭整形の後にナデ	R-1021
Fig. 40-9	III層	H-c	土師器	擂鉢	口縁～胴	内外面ともにナデ仕上げ	R-1128
Fig. 40-10	III層	D-c	東擾系	こね鉢	口縁～胴	内外面ともに横ナデ、内面は磨滅が著しい	R-1096
Fig. 40-11	III層	D-c	東擾系	こね鉢	口縁	内外面ともに横ナデ	R-1109
Fig. 40-12	III層	G-d	衛前焼	擂鉢	口縁	内外面ともに横ナデ仕上げ	R-1159
Fig. 40-13	III層	H-a	土師器	火舌	脚	器底は荒れが著しい、内面には炭化物が付着	R-904
Fig. 40-14	III層	G-d	青磁	皿	底	周安窯系青磁	R-1145
Fig. 40-15	III層	D-c	青磁	甕	脚	龍泉窯系青磁	R-1184
Fig. 40-16	III層	L-a	青磁	碗	高台	龍泉窯系青磁	R-1143
Fig. 40-17	III層	H-c	白磁	長頸壺	頸	内外面ともに施釉	R-1149
Fig. 40-18	III層	H-c	石製品	板		質滑製	R-1133
Fig. 40-19	III層	H-a	石製品	砾石		砂岩製	R-1178
Fig. 41-1	IV層	F-b 8	白磁	瓶	口縁	全面施釉、外面は回転ヘラケズリ	R-406
Fig. 41-2	IV層	清掃中	白磁	皿	底	外底面まで全面施釉	R-1260
Fig. 41-3	IV層	清掃中	土師器	羽釜	口縁	内外面ともに横ナデ	R-1259

図 版



①調査区全景 1 (III・IV層除去後の遺構検出状況 北から)

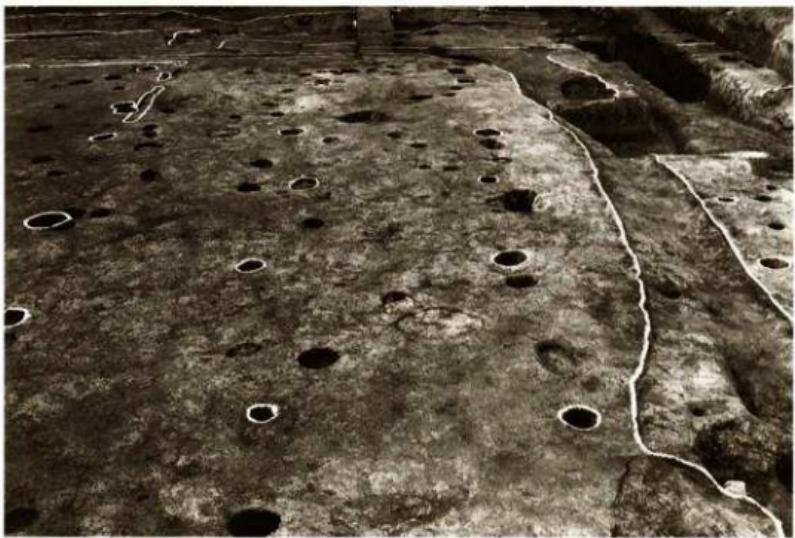


②調査区全景 2 (完掘後 北から)

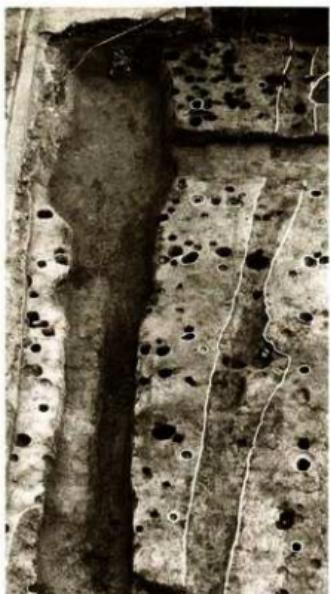
Pl. 2



①調査区全景 3 (完掘後 西から)



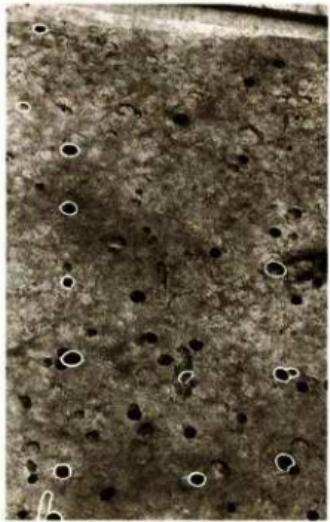
②SB-10号掘立柱建物 (SB-10) (東から)



① 9号掘立柱建物 (SB-09)、7号溝 (SD-07)、
21号柵列 (SA-21) (西から)



② 10～12号掘立柱建物 (SB-10～12) (西から)

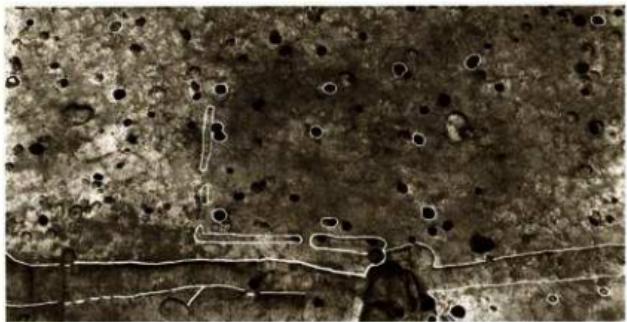


③ 14号掘立柱建物 (SB-14) (西から)



④ 15号掘立柱建物 (SB-15) (西から)

①13号据立柱建物
(SB-13)、24号溝
(SD-24) (西から)



②13号据立柱建物
(SB-13)、24号溝
(SD-24) (北から)

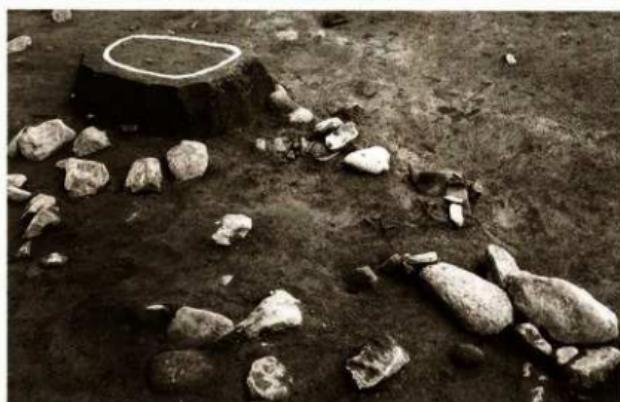


③20号据立柱建物
(SB-20)、23号柵列
(SM-23) (西から)





① I号溝 (SD-01)
I層礫群検出状況
(北から)



② I号溝 (SD-01)
I層遺物出土状況
(南から)



③ I号溝 (SD-01)
I層疊群検出状況 2
(南西から)

Pl. 6



① 1・2・6号溝 (SD-01-02-06)、3・4号水口
(SM-03-04) (北東から)



② 1号溝 (SD-01) (北から)



③ 1・2号溝 (SD-01-02) (南から)



④ 7号溝 (SD-07) (東から)



① 8号土壤 (SK-08) 上層堆积群出土状況 (北から)



② 8号土壤 (SK-08) 下層遺物出土状況 (北から)



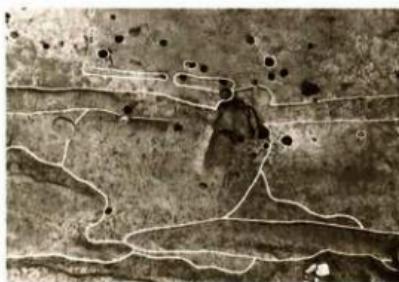
③ 25号土壤 (SK-25) (北東から)



④ 26号土壤 (SK-26) (南から)

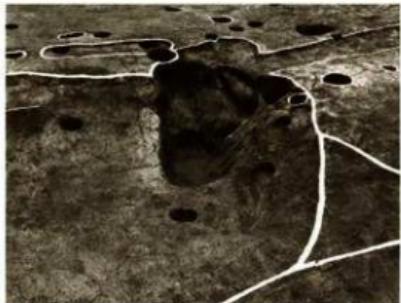


⑤ 3号水口 (SM-03) (西から)



⑥ 4号水口 (SM-04) (西から)

Pl. 8



① 4号水口西南隅の土壤状の落ち込み（北西から）



② C区拡張部分の5号溝（SD-05）（北西から）



③ 264号小穴（SP-264）遺物出土状況



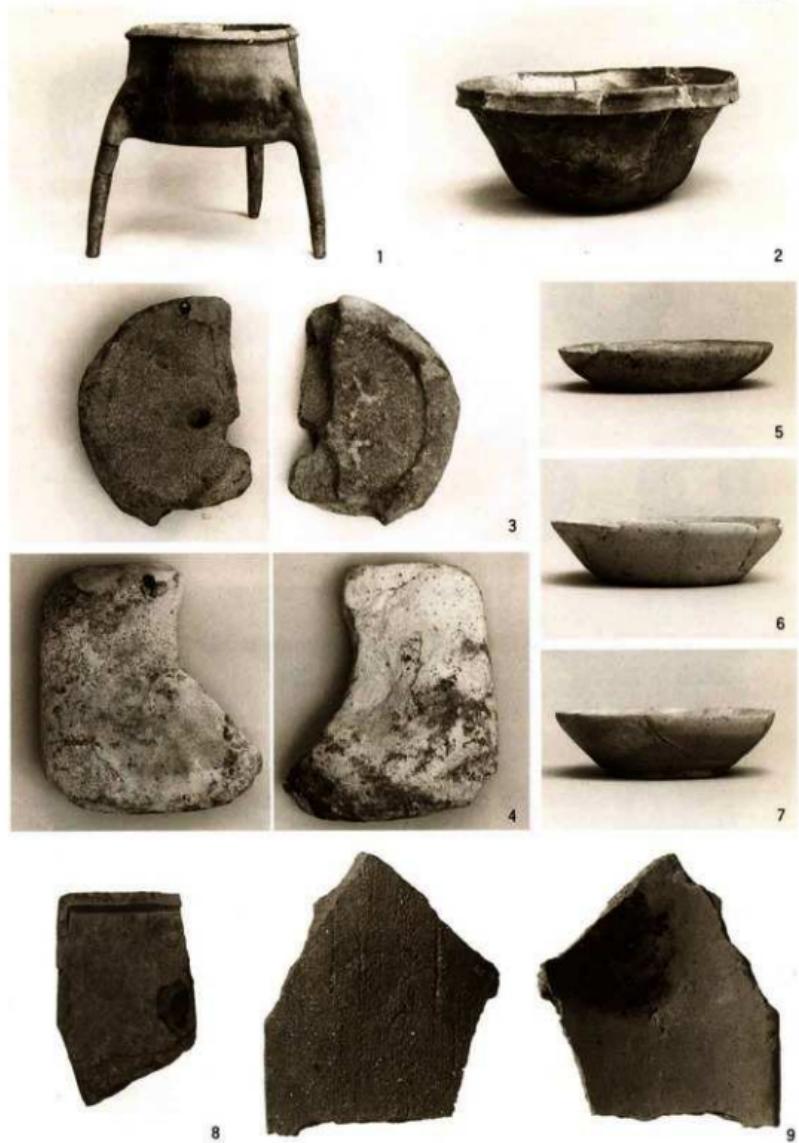
④ 311号小穴（SP-311）遺物出土状況



⑤ 336号小穴（SP-336）遺物出土状況



⑥ 662号小穴（SP-662）遺物出土状況



櫛味遺跡 2 次調査出土遺物 I (1・2・5～9は SD-01、3・4は SK-08 出土)



樽味遺跡 2 次調査出土遺物 2 (1~11は SP-444、12は SP-662、13は SP-311、14は SP-336、15は SP-269、16は SP-435、17・18は SD-01 出土)

樽味遺跡 II

—樽味遺跡 2次調査報告—

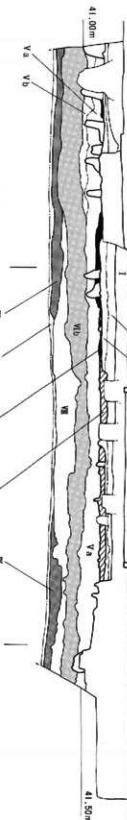
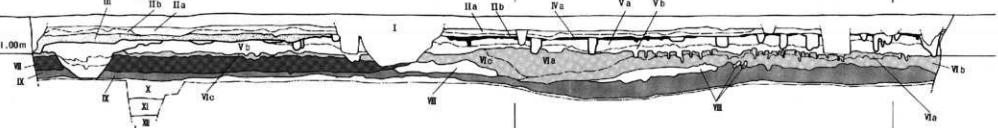
愛媛大学埋蔵文化財調査報告IV

1993年3月26日

発行 愛媛大学埋蔵文化財調査室
松山市道後裏又10-13

印刷 セキ株式会社
松山市湊町7丁目7番地1

付図 I 梅味道路 2 次調査
遺構配置図(縮尺 1 / 100)



付図2. 横浜道路周辺の遺跡分布図
(縮尺 1/750)
「横浜道路II」(愛媛大学埋蔵文化財調査報告N)

